

新しい家庭科

自立した男と女を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

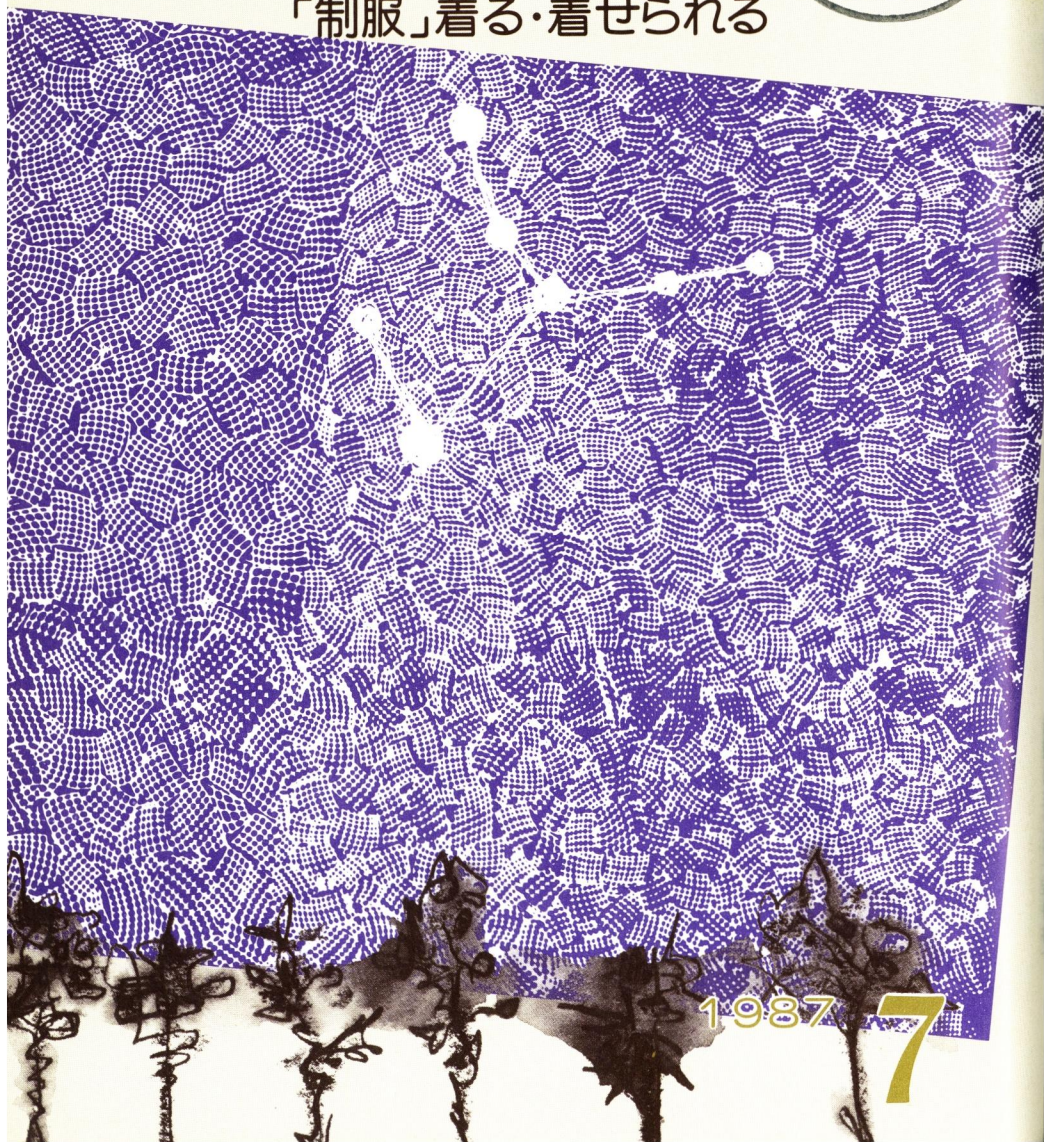
ウイ

逐次刊行物

62. 6. 20 和

国立婦人教育会館
情報図書室

「制服」着る・着せられる



1987 7

四季のうた

は
い

「ばら色の人生」というとき
そのばらは 何色や

きつと

ふつくら染め上がったピンク色

白から黒に近い赤まで

さまざまな花

グレース・ド・モナコ

マリア・カラス

.....

美女たちにまじって

アンネ・フランクは

清楚な花でした



詩 頭 卷

木

隣のそのまたむこうのはたけだった土地が
宅地造成されるとき木の始末のつけられ方
まず枝をはらって木を丸ぼうずにする

幹だけ残ったのつぺらぼうを

地より少し上で半分ほどまで切り

あとはシヨベルカーでパワーシヨベルをたたきつけて

木を裂く

根のまわりの土をパワーシヨベルですくいと

泥だらけのパワーシヨベルをまた木にたたきつけて

根をひっくりかえす

転がった木はみじめだ 泥まみれで

木の裂け口は 雷にあったようで

散乱する木っ端はうず高い

羽 生 槇 子

わたしはその木を何年も朝夕見つづけてきた
その木を見ることで わたしの日々は新しかった
枝をひろげ 葉でさやぎ

葉を落とし 新芽を出し

実をつけ 実を落とし

子どもを木登りさせ

その木がそんな目にあうのを見るのはたまらない

野良犬なら走って逃げる事ができる

都市では 木という木は

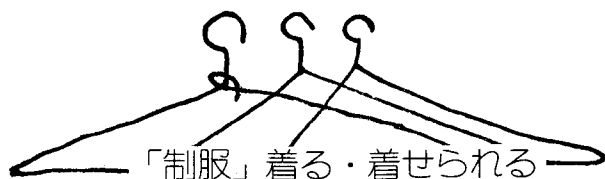
走って逃げ出さなくてはならない時代なのだ

足を出してノ 木 走ってノ 木

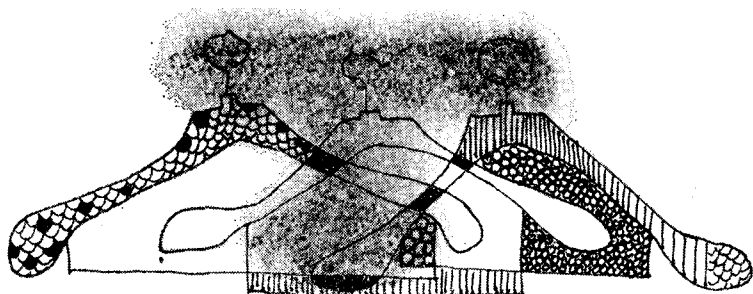
都市中の木という木が

人を捨てて走り出すのを夢みて

わたしの心象風景はすでにひき裂かれている



新しい家庭科を創るために	言 言	特 集
小学校では 中学校では 高等学校では 「若い広場」森幸枝著『男女で学ぶ新しい家庭科』を読んで 森本 理恵	幼稚園から制服とは？ 私と制服の歴史 体育とユニホーム（体育着） 制服と私 「制服」のない高校から 学校は着るものを決めて下さらなくて結構 体にあつた服装を自分で選ぼう ひらいかずこ 酒井佳代子 藤武 礼子 E・S 西澤 幾子 大西麻里子 神崎 房子	制服の論理 学校制服についての調査から 制服のない公立中学校 学習の主人公たち 中学生になると制服がある……三鷹市立中学校新入生の子どもたち 制服のない高校で……自由の森学園高等学校二年生 制服のある私立小学校で…… 片岡 輝 酒井 豊子 村田 直文
54	22	4



『87年春の公開ゼミナール』 コンピュータが人間らしさを消す?!... 64

四季のうた

ばら

金子 静枝

巻頭詩

木

羽生 櫨子

V 研究ノート「性」

女と男の豊かな未来に向けて④

村上 昌子

教育のなかの心理学

「発達」「そだつ」ということ④

小沢 牧子

いま中学校で

ぼくたちは真剣なんだ

仲野 暢子

読書つれづれ草

秘密の図書室

武田 秀夫

知らないことを知りたくて

④

蓮池 悦子

ワンポイント

欧化熱の下火と女学の衰微

秋枝 蕭子

近代日本女子教育史

高校生の娘の登校拒否

回答・児玉 澄子

Weの相談室

教育実習で学んだもの

湯沢 静江

KNOW HOW

その?

湯川憲比古

政治の目

円高不況と失業率

福島 澄香

経済の目

選挙のおもしろさ

中嶋 里美

家族を越えた

「ただの知人」を「疑似父」に

「じら・りようこ」

青春ふりかけ

87

○波 教科のカラを破る 半田たつ子 88
○ひし 蓮池悦子さん 35

表紙デザイン 加藤由美子
目次イラスト 馬場洋子
本文イラスト 編集部

○アンテナ 94 ○十字路 92
○泉 73 ○“We” EDITOR'S NOTE 96

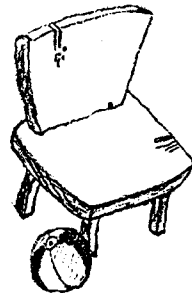
制服の論理

いま子どもたちにとっての制服とは

一九七九年は、国際児童年でした。その前の年の暮れ、毛利子来さん、斉藤次郎さん、新島淳良さんたちと語り合つて、私たちは、世界の十六億の子どもたちと連帯を呼びかける『16億の小さな囚人たち』という本を出版しました。子どもたちの人権が、「教育」や「保護」の名のもとに、大人たちによって踏みにじられている事実を明らかにし、子どもたちに自ら立ち上がつて人権を回復するように訴えかけたのです。

本の出版をきっかけに出来た「16億の小さな囚人たちと連帯する会」では、子どもの身心に加えられる苛酷な攻撃と管理の一つの形として、子どもの制服を取

片岡輝



り上げ、実態の中から、「制服なんていらないうよ」というパ
ンフレットを一九八二年に発行しました。

それからさらに五年たつたいま、本誌は、「十年以上前には、
高校で生徒たちが「制服」への疑問を投げつけ、自由な服装
へと変えていく動きがはなばなしかつたのに、今高校生は、
むしろ「制服を決めてほしい」と言い、親もまた「制服」を
支持する動きが強いように思います」という状況認識のもと
に、この特集を編んでいます。

この十年間という歳月が、音もなく風化して行く虚しさ、
だからこそ「制服」が持つ意味をかつてのどの時代よりも深
く鋭く追求して行かなくてはならないという危機感が、私の
体内を駆けめぐります。おそらく、これはただ単に、子ども
の制服の問題に止まらない何かがいま起こっているのだとい

う不吉な予感とともに。

ここに、森仲之と図鑑舎なるグループが編集した「制服図鑑」通信(弓立社)なる一冊があります。「東京女子高制服図鑑・冬服篇第一回」とあるように女子高生の制服が、劇面タッチのイラストで学校別に紹介しており、たとえば一ページ目には、「ひとまず安心の平均点セーラー服女子高生」なるキャッチフレーズで、大妻高等学校のセーラー服が図解してあります。

「胸元で巻いたリボンのコロツとした感じが可愛らしい。当区4校のセーラー服のなかでは一番地味な印象だが、ケレン味のない素直なデザインには結構ファンがついている……」といった解説文がそえてあり、女子高生の制服が、ファッション情報ないしはエロスの記号として扱われていることが分かります。

かと思うと、「近代女子学生のためのポスト純潔教育講座」と題したコラムでは、上原善二日本倫理道德協会会長なる人物が、質問に答える形で、「あなたのような純潔な人達の男女交際のエチケットにはリップ(唇)キッスはないはずです。そこまでは越えてはならないはずです」などと、大真面目で道德を説いているといった具合で、いまの子どもたちの「冗談ジョーダン。遊びアンビですよ」といった声が聞こえ

て来そうな内容も同居しています。

福岡弁護士会が、県下の中学校の校長にアンケート調査した結果、制服支持が九〇・九%、不必要との答えが僅か三八%であったという事実(西日本新聞、3月8日)が物語る高度管理化学校社会の息苦しさや制服のうっとおしさから、子どもたちはこのような形で、ひょいとは何気なく脱け出そうとしているのでしょうか。

それとも、制服の持つ意味などには無関心で、ただファッションとしてのカッコよさにあこがれているのでしょうか。それとも……。

制服は子どもを識別するために

発明されたのだが

制服を子どもに着せる側の論理は、「心の乱れは必ず服装に現れる。服装の乱れは非行の始まり」「私服だと服装の競争になり教育上支障が出る」「制服は社会的に定着している」(前出)のほかに、「自校の生徒を他と識別しやすい」「経済的である」といった理由をその基盤にしています。

フランスの歴史学者フィリップ・アリエスは、その著『子ども誕生』(みすず書房)の中で、中世にあつては「小さい大人」であつた子どもが、近代によって「子ども」という独自の地位を与えられ、それまで家庭や親方や地域にまかせ

られていた子育てが、学校によってシステマティックに行われるようになった十六世紀末から十七世紀にかけて、まず男の子が着る子ども服がデザインされ、それが女の子に及んで、服装によって子どもと大人の識別が可能になったと述べています。

そもそも着衣には、身体を保護するという機能的な役割のほかに、自分をアッピールするディスプレイ的な意味とつつしみを表すという記号的な役割があります。

この着衣の役割を制服に当てはめて考えてみると、まず機能的には、身体を保護するという基本的な役割のほかに、生徒管理の手段という役割が加わり、記号的には、特定の学校の生徒であることと、社会が期待する「学生らしさ」をシンボルする意味が担わされています。つまり、制服には、着ている人間を他から識別するだけにとどまらず、学校という集団的な枠組みと「学生らしさ」への帰順を求めるベクトルが初めから内在しており、制服を着用すると同時に、学校社会の規範である「生徒規則」や教師―生徒という上下関係を順守することが要求され、違反や異端に掣肘が加えられることになるのです。

制服は、このような制服の論理によって、着ている人間の行動を物理的に規制するばかりか、当然のことのように着ている人間の心の内部にも踏みこんできます。

かつてエリート校では、その学校の生徒であることを一目瞭然で示す制服を着るのが、誇りでした。この誇りは、生徒の物心両面の行動の支えでしたが、同時に他を見下だす驕りや差別観の温床でもあったのです。

手塚治虫が昭和六十年に発表した長編マンガ『アドルフに告ぐ』（全四巻、文芸春秋）は、アドルフ・ヒットラーと、日本人の母とドイツ人の父のあいだに生まれたアドルフ・カウフマンと、カウフマンの幼な友達で親友だったユダヤ人のアドルフ・カミルという三人のアドルフが、第二次世界大戦という時代の流れの中で織りなす運命の物語を描いた力作ですが、ここにはナチスの制服と日本の軍服が果たした役割とその魔力があますところなくえぐり出されています。

それにしても、着衣が私たちの人間性に与える影響の大きな深さには、測り知れない恐ろしさを感じないわけにはいきません。

たかが制服されど制服

一九六九年、小児科医の松田道雄さんは、「基本的人権と医学」と題した講演会で、病いを得た作家の永井荷風が、大病院へは入院せずに自宅で療養し、死の前日、近くの一膳飯屋でカツドンを食べ、一人忽然とこの世を去ったというエピソードをひきながら、「病気になったら、病院にはいつて治

療するのが当然だという考え方が風習化してしまいますと、自分の家で医者にみてもらわれないで、死ぬ前日までカツドンを食べていることは、ひどくあわれなことのように見えてきます」、しかし「直接他人の迷惑にならぬかぎり、自分の生き方は自分できめるということが、いちばん望ましい。何から何まで思う通りというわけにはいかぬかもしれません。だが、自分のえらべるところをなるべくひろくしたい、というのが人間の本性だと思うのです」(『世界』六九年七月号)と、人には自己決定権というものがあり、これが認められない社会には基本的人権も存在しないと述べています。

制服の問題に基本的人権とは大げさなと思われるかもしれませんが、基本的人権とは、そうした日常レベルのこまごました出来事に私たちがどう向き合うか、その態度の集積によって初めて実体を持つイデーなのです。ですから、松田さんは、カツドン食べて死ぬか、完全看護の病院食をとって死ぬかは、その人の自己決定権にまかせるべきだし、もしそのことを自分で決めることができない世の中ならば、そこには基本的人権など存在しないと説かれるのです。

制服しか選べないという状況は、まさにこの自己決定権を認めないということにほかなりません。

制服を着る、着ないによって、直接どのような他人にどのような迷惑がかかるというのでしょうか？ 制服を着ないこ

と、ないしは制服のきまりを破ることが服装の乱れだとするならば、制服というスタンダードを無くしてしまえば、乱れそのものも無くなってしまう。とすれば、服装の乱れを生み出しているのは、制服そのものとさえ言えるのではないのでしょうか。がんじがらめの規則が、多くの規則違反を生み出すことと同じメカニズムがここにもあるのです。

私服だと競争が始まるから教育上好ましくないというのもおかしな言いがかりです。教育現場はすべからず競争の原理で成り立っているではありませんか。服装のセンスも競争によって磨かれるでしょう。むしろそのために親の出費はいくらか嵩むかもしれませんが、無い袖さえ振らなければ、子どもがわが家の経済状態を学ぶチャンスともなるでしょう。

最近の高校生が、面倒だから勝手に決めてくれた方が楽だと言っているのを、自己決定権の放棄とみるか、あるいは、大人たちが愚にもつかない制服に青筋を立てているのを斜に構えて冷笑しているとみるか、この辺りは大いに議論が分かれます。

ともあれ、制服を着せられていない大人の議論です。一度否応なく制服を着せられるという体験をしてみれば、結論は自らから下るのかも知れません。

(児童文学者)

学校制服についての調査から

酒井 豊子



一、はじめに

学校制服に関しては、疑問を提起する識者も少なくはなく、新聞、テレビなどでも折りにふれて取り上げている。しかし一方、例えば一九六〇年代に制服を廃止した学校でまた最近復活させたとか、小学校でも制服を定めるところが現れているとか、あるいは、入学者を確保するために有名デザイナーにデザインを依頼したとか、制服の盛況を物語る情報もますます豊富である。

制服に対してどう考え、どう対応していったらいいのか、その答えを求めるには、まず制服の実状と功罪を明らかにする所からスタートしなければならぬのではなからうか。筆者らはこのような立場から、一九八〇年に、東京都内の中学校・高等学校を対象に制服の実態調査を行い、また、一九八三年には、中学生・

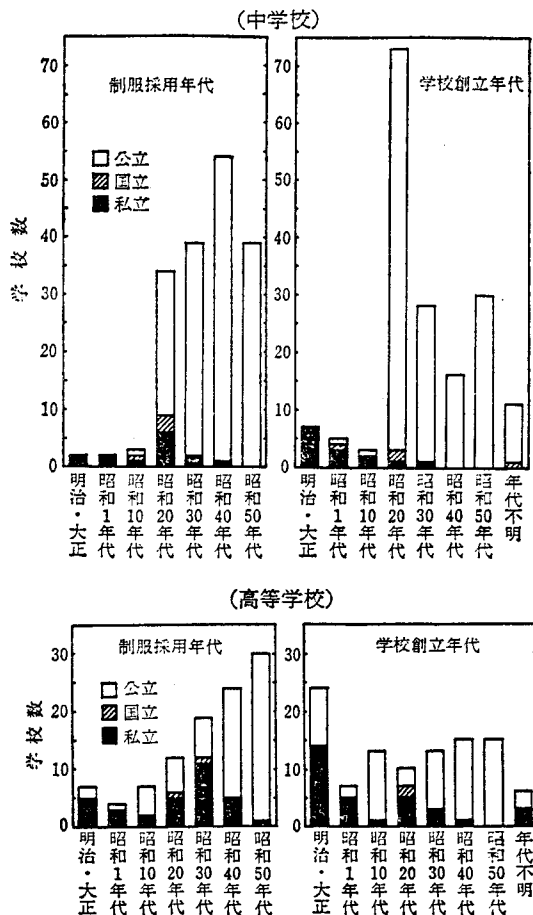
高校生を対象に、制服に対する意識調査を行ってきた。ここでは、それらの調査の結果から、主なものを紹介して、読者の参考に供したい。

二、学校制服の実態調査から

この調査は、中学校・高等学校の家庭科または生活指導の先生方から、それぞれの学校の制服および靴・鞆等の指定状況を回答してもらったものである。回答数は中学校七百九十五校中三百三十一校、高等学校四百五十五校中二百十四校であった。

中学校では制服指定校の割合は95%で、公立校の指定割合が私立・国立校より高い。一方高等学校では、制服指定校の割合は88%で、私立・国立校の指定割合が公立校より高い。制服無指定校は中学校で十七校、高等学校で二十六校のみであったが、その中にも、近い将来に制服を定める予定と答えた学校が、中学校と高等学校にそれぞれ一校ずつあった。こ

図1 男子制服の採用年代と学校創立年代



の調査からすでに七年たっており、この間に制服無指定校の数は減っているものと思われる。

図1に、学校創立の時期と制服採用時期の関係を、男子制服の場合について中学校・高等学校別に示した。女子制服の場合も全く同様の傾向であった。昭和十年代までは、学校数に対して制服指定校の数の割合は比較的少ない。昭和二十年代以後は学校数も増加したが、制服指定校の割合も急速に増

加した。

制服指定に対する教員の意見を尋ねた結果を表1に示す。制服指定校の教員の場合、制服があったほうがよいという肯定意見が83%と圧倒的に多い。一方、制服無指定校の教員には、ないほうがよいと現状を肯定する意見は、中学校で41%、高等学校で54%と約半数で、制服があるほうがよいとする意見も約30%あり、制服無指定下では服装が華美に流れやす

く、指導が大変であるなどの問題を具体的に訴える場合が多かった。

さて、指定されている制服の実状について紹介したい。

A、型 制服の型は、男子では詰め襟70%、女子ではブレザー46%が、それぞれ第一位である。女子では、戦前に制服を定めた学校ではセーラー服が多いが、戦後はブレザーを採用する割合が高くなった。制服採用時期が遅い学校ほど男子女子ともブレザーが多くなっている。

イ、色 制服の色は制服の型と密

表1 教員の制服肯定・否定の理由

制服肯定の理由	件数		
	公立	私・国立	計
生活指導上便利	140	41	181
経済的	90	31	121
華美的防止	94	24	118
集団への帰属意識を育てる	24	29	53
服装に気を使わなくすむ	32	14	46
規律・秩序が守れるようになる	19	9	28
学習と遊びのけじめ	20	4	24
統一の美	13	10	23
自分の行動への自覚・責任	15	5	20
家庭間の差がでない	12	6	18
親が望む	12	5	17
学校のシンボル、校風・伝統の表現	1	11	12
機能的・活動的	4	0	4
清潔感がある	2	0	2
計	478	189	667

制服否定の理由	件数		
	公立	私・国立	計
没個性的・画一化	42	14	56
機能的・活動的でない	28	3	31
不衛生	23	4	27
美的色彩感覚がなくなる	13	1	14
洋服は自分で決めるべき	10	1	11
不経済	4	2	6
強制に対する反動がでる	2	0	2
私服のほうが非行化がわかる	2	0	2
生活指導・管理に用いるのに反対	1	1	2
計	125	26	151

は低い。クリーニングの頻度は、70%以上の人が年に三回すなわち一学期に一回の割合である。

エ、制服以外の身の回り品 セーター、靴下、靴、学生カバン、サブバッグ、レインコートまたはダスターコートなどの指定状況は、品目によりかなり開きがあるが、色だけの指定を含めると、私立校では74（サブバッグ）から97%（靴、靴下）、公立校では39（サブバッグ）から88%（靴下）、高校で4（サブバッグ）から44%（靴、靴下）であった。

三、制服に対する意識調査から

接な関係があり、男子の場合、一位は詰め襟の黒、二位はブレザーの紺である。女子の場合は、ブレザーでも、二位のセラー服でも紺が採用されている傾向が見られる。

ウ、制服の繊維組成 高等学校および私立中学校の半分以上が制服用の生地を決めており、その繊維組成は、私立校では80%以上が、公立高校でも50%以上が純毛を選んでいる。洗濯のしやすい合成混紡の利用は意外に低く、また、別に行った制服の洗濯についての調査では、大部分の人が商業クリーニングに依頼しており、合成混紡であっても家庭洗濯の割合

一九八三年には同じく東京都内の中学生、高校生を対象としたアンケートにより、衣生活・制服等に関する生徒たちの意識・考えを調査した。このアンケートは、三部分より成り①は『ファッションに興味がある』『T・P・Oを考えて服を着る』『他人の服装が気になる』など衣生活一般についての意識に関する29問、②は『制服は経済的である』『制服は衛生的である』『制服は非行防止になる』など制服についての考えを問う23問、③は『制服に誇りがある』『制服の形は

好き』『制服は冬は寒い』など自分の制服についての10問で、それぞれ五段階で考えるように構成されている。

当時は、いわゆる校内暴力事件の多かった時期で、このような調査は生徒たちに動揺を与えるのではないかと懸念する向きもあった。そこで、あらかじめ各学校長宛にアンケートへの協力の可否を問い、協力できると回答のあった学校の中から地域分布などを考慮して選んだ中学校百十五校、高等学校六十四校において、家庭科または生活指導担当の先生の協力により実施した。一校当たり約二十人総計三千六百余人余りの生徒の回答が得られ、男子と女子、中学生と高校生、区部と市部、公立校と私立校、制服指定校と無指定校などの種々の条件を考慮して五百九十六人を抽出・集計し、各種の検討を行った。それらの中から、いくつかを紹介したい。

生徒の回答結果が最も大きい差を示したのは、男子と女子で、特に①の衣生活に関するアンケートでは、ほとんどの質問項目について女子は男子より有意に肯定的な回答を示し、衣生活に対し積極的な意識を持っているといえる。特に『ファッションに興味がある』『ファッション雑誌をみる』『他人の服装が気になる』『服は十分考えて買う』『見えない所のおしゃれをする』『毎日の服装を決めるのに迷いやすい』などに女子の点数が大きかった。

男子・女子以外の回答者区分間で差の大きかったものを表

表2 衣生活・制服についての意識に
有意な差のある回答者区分

アンケート項目	有意差のある回答者区分	
ファッション雑誌を見る	制服あり	> 制服なし
服は十分考えて買う	公立	> 私立
制服は経済的である	高校	> 中学
	制服なし	> 制服あり
制服は衛生的である	制服あり	> 制服なし
制服は非行防止になる	制服あり	> 制服なし
制服は親しみやすい	制服なし	> 制服あり
	区、市	> 郡、島
ブレザーを着たい	公立	> 私立
自分の学校を誇りに思う	制服なし	> 制服あり
制服に誇りがある	私立	> 公立
制服の形は好き	セーラー	> ブレザー
制服に対する規則は厳しい	私立高校	> 公立高校
制服は冬は寒い	区、市	> 島
制服は夏は暑い	区	> 郡、島

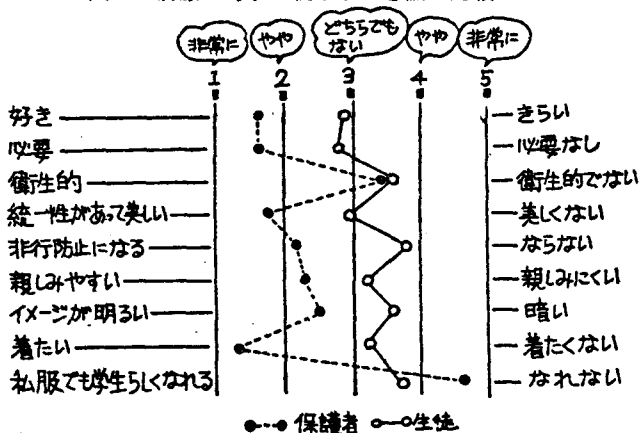
2にまとめて示す。制服指定校生と無指定校生の回答に有意の差のえられる場合が多く、制服無指定校の生徒は、指定校の生徒より『ファッション雑誌を見る』ことは少なく、『制服は経済的である』『制服は親しみやすい』と思いつながら『制服は衛生的である』とは思わず、『制服は非行防止になる』とも思っていない。そして制服指定校の生徒より『自分の学校を誇りに』思っている。公立校生より私立校生の方が『制服に対する規則は厳しい』が、自分の『制服に誇りがある』と答えている。『制服は冬は寒い』、『制服は夏は暑い』には、島部、郡部より区部、市部の生徒が高い点を与えている。

四、問題点と今後の課題

服装は、もとより個人に属するものである。どのような場合にどのような衣服をどのように着こなすかは、着る人の教養、趣味、センス、人となりを反映する。服装は、いわば個人の文化の程度を示すバロメータである。このことは、たいの中学校・高等学校の家庭科の教科書に、衣服の機能の重要な一面として述べられているところでもある。

毎朝、服を選んで着る作業はそのための大切なドリルである。この作業は、子供が小さいうちから親やおとなが助けに行うもので、子供のセンスの形成はおとなの責任である。右で紹介したアンケートを生徒の親たちに回答してもらった結果からいくつかの項目について生徒の回答と並べて図2に示す。親は、『制服は衛生的でない』と思いつつも、『制服は必要であり』『着せたい』と、生徒たちよりずっと制服を肯定している。こうして多くの親は、子供に日々のドリルを放棄させてしまっているのであるが、このドリルをやらずに制服を着ていて、豊かな服装のセンス、豊かな色彩感覚が育つのであろうか。個性の尊重、独創性の涵養を願いながら画一の中に埋もれさせていてよいのだろうか。おおいに疑問を感じるところではあるが、残念ながらこのことの科学的検証はまだなされていない。

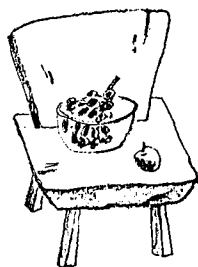
図2 制服に対する親と子の意識の比較



その他、『制服は経済的である』という答えが多いが本当に経済的であるかどうか、『制服は衛生的である』とは思われないが、一般の衣服に比べてどのくらい不衛生なのか、などなど、制服の是非を論ずるに当たり科学的に検証すべき問題は山ほど残されている。（東京都立立川短期大学）

制服のない公立中学校

村田直文



もうあちこちで何度か書いてきたことだから、くり返すのは気がひけるけれど、この際、重ねて言わせてもらおう。――服飾に関する規制の強行は人間性を抑圧するものであり、こうした規制の廃絶は人権教育の必須の要件である。

人間性とは何かという問題には多様な考えがあり得ることだが、例えば日本書籍版検定教科書「中学社会公民的分野」現行版では、『人間の生活とは、単に生存を保つということではない。ゆめやあこがれや願望をもち、その実現のために努力する生きかた、それが、人間らしい生活というものである。食べ物にも衣服にも家にも、人間のゆめや思いがこめられていた』とのべ、『人間は衣服を作る以前からさまざまに身を飾り、願望・信仰・経歴・身分などをあらわした』とす

る教材を展開している。服飾は個人の自己表現であり、単に寒暑をしのいだり、作業や学習の便に役立てたりというような、実用だけのものではない。服飾表現は人間の根源的諸要求のひとつであり、人間が人間らしさを獲得する最初の歩みでもあった。だから、その規制を強行することは、憲法が保障した表現の自由の迫害であり、人格権の侵害であり、集団に対する個人の独立の気風や気概を封殺しようとするものである。特に、集団の規律に名をかりて個性的表現を禁圧することは、個人の尊厳を冒瀆し、忌むべき全体主義の復活に手をかすことにほかならない。

新石器革命における紡織技術の成立以前から、ボディペインティングやいれずみのならわしがつくられた。それらのデザインは前記教材の記述の通り、それぞれの個人の自己確認

のしるしとして、多様な精神内容をシンボライズするものであった。それらは例えば、自分は何者の子孫であるか、部族の中でどんな地位を占めているか、どんな技術や職能によってたつ者であるか、成人であるかないか、成人儀礼の際にどんな祝福を受けたか、既婚か否か、何者を配偶者としているか、誇るべきどんな経歴を有するか、どんな戦いに参加しどんな強敵を倒したか、何に関心があるか、どんな善霊の恵みを受けどんな悪霊を斥ける者であるか、何を固有の精霊としているか、等々実に多岐にわたる。自分が生きていく社会で名誉ある地位を占めるために、他者との社会関係を安定し発展させ、人間性・個性を豊かにし、人生を喜び多いものとするために、そのような自己表現をせずにはいられない、それが人間というものの本性であり、このことに関しては、原始の裸族も現代の子どもたちも変わりはない。おとなの間にはこうした情感を失った者も多いが、それは、企業に隸属し集団に埋没し、機能主義の齒車として心身をすりへらした結果であるにすぎない。

原始の裸族にとって、最初の唯一の衣服ともいべきものは、ひとすじの腰ひもだけである。みのだの諸用具だのをぶらさげるわけでもないから、それはいちじくの葉の役割を果たすこともなく、実用的には全く何の機能もない。にも拘わらずその腰ひもを身につけるのは、「われ成人せり」という

経歴表示、並びに「目下欲情せず」という意思表示である。性的結合に關して、それは物理的には何の障碍にもなり得ないが、精神的には、牽引力と同時に強い抑制の効果をもつ。

紡織と並んで精鍊・研磨の技術が生まれると、その成果としての金属・宝玉が、悪霊除けのバリアとしてのサークルにつくられて、個体の各部位を守るようになった。精霊降臨を感受するしるしとして、ゆらぎやきらめきを伴う各種の造形を身につけるならわしも生まれた。各種のアクセサリは、当代最高の技術と精力集中の成果が、そこにこめられた人間の精魂によって、分別を超えた不思議な力をもたないはずがないという信念の表示でもある。それらは「これをまとう者に祝福あれ」「悪意をもって近づくな」という信号であり、親たちはわが子に、愛人たちはその相手に、そのような願望をこめて、それぞれの思いにふさわしい服飾をプレゼントした。プレゼントとは自己表現を本義とすることである。

身分制度が確立した古代以降は、人間の生活は身分によって固定され、服飾も身分・職能によって統制されるようになり、職分を果たすための実用性・機能性を増すようになる。生産第一主義の近代になると、生活の各分野に資本の論理が貫徹し、企業に従属する者の服飾からは生産に役立たないものは放逐され、最終的には、工場労働者の作業服に典型的な制服が生みだされる。一方、生産を管理するブルジョアジー

は、アメリカ独立革命では裾の短いホームズパンをシビリアンコートとして自立のシンボルとし、フランス大革命では貴族のキュロットを拒否した長ズボンに革命派のシンボルとした。現代のビジネススーツはこうした歴史を背負っている。

軍国主義の日本では、天皇直属の指導者層予備軍として、当時最強のプロシア陸軍やイギリス海軍の軍服を上級教育機関の制服とした。小卒だけで終わる子が同世代の8割以上、上級に進む子は太平洋戦争直前でも漸く2割という状況のもとでは、その制服を着ることは、やがてはナツパ服ではなくてスーツを着る身分になることを保障されることであった。それは特権の表示であり、底辺大衆の羨望のまこととなった。戦後、制度は変わっても天皇制イデオロギーは残ったのと同様、その羨望の意識だけは制服願望として残った。高度経済成長期、個人の尊厳と人格の完成を基調とする教育基本法へのアンチテーゼとして、能力主義や企業主義・国家主義が学校にもちこまれた時、こうした潜在意識はその恰好の手がかりとなった。はじめは「標準服」という名でおずおずと、やがては制帽・制靴・制下着！から髪型の規制に至るまでの管理主義の奔流となり、子どもたちの夢を誘う小さなファンシーグッズも許されなくなった。資本の論理に従属する生産諸技能諸資質のインプットを「教育」と称し、その「学習」に無縁のものは全面的に抹殺せよという機能主義の強行によ

って、ライフ・リバティと並ぶ基本的人権としてのプロパティ（人格的財産権）を軽視し蹂躪することが当然のことにように横行した。こうして、学校の頽廃は進んだのである。

ちかごろは、「民主団体」のパンフにさえ、「非行をなくし行き届いた教育を」とか、「服装の乱れは非行の前兆」とか、警察行政と変わりのない主張がみられる。インプット教育を行き届かせてもらっては困る。むしろ問題は、非行とか乱れとかをなくすことではなくて、そのように言われているものを見直し、共に考えることであらうのに、学校の頽廃はここまで進んだ。

私たちの東原中学校（東京都杉並区）は、早くからこうした頽廃と戦い、自由な校風をつくろうとした。生徒会選挙はもちろん、弁論大会や卒業式のことばにも、「東原の自由を守れ」という主張が頻発する歴史をみると、教師たちの努力も成果をあげているといえる。東原の子は、自由のための努力を学んできた。

服装の自由については、それを正式に決めたのは70年の11月、もちろんそれ以前から、服飾の規制に関するあらゆる慣行が批判にさらされていた。一学期のPTA広報には、つめ襟・セーラー服がいかに不潔・不衛生かつ不経済であるかを語る親たちの座談会がのっている。教師の間でも、「セータ

「にスラックスでどんな不都合があるか」「Tシャツ・ジーンズはどうして「らしくない」と言えるのか」「長髪模倣は成長と自立願望の現れ、その規制は角を矯めて牛を殺すもの」「色ものの明るさは青春のしるし」等々の議論があった。その年7月の杉本判决も、教師たちの力になった。

『……制服廃止にさいして私たちは正直であろうとした。欺瞞を排した。服装は自由だが色ものはいけなとか、学生服は着なくともよいが学帽はかぶれとか、丸坊主でなくてもよいが髪の長さには制限が必要とか、そのような一切の欺瞞的制約を拒否した。自由といったら自由、どんななりでもいいのだ。ひどく誤解を招いて違和感が学習の妨げになるような事例がでてきたら、それこそ個別指導のチャンスではないか。「ひとりひとりを大切にする」とは、まさしくそういうことではないか、ということが確認された。……A男は、小学校時代からの登校拒否で、学籍だけが進学してきた。担任を中心とするねばり強い働きかけで、ようやく中二の新学期から登校するようになったが、肩までたれた蓬髪と異様な服装や表情がめだった。あちこちで非難をこめた話題になった。教師集団が服装についての確固たる見解をもっていなかったら、おそらく初期の段階で挫折したはずである。私たちは、「……東原は、どの子も、ひとりひとり大切にしたいと思うのです」という言い訳を、いたるところでしなけりばならなかった。

とぎれとぎれに登校しはじめたA男は……学習意欲に燃える好男児として卒業、進学していった。『たつたひとりの子の話でも、その子ひとりの人権を守るためには、制服主義という規制の廃絶が必要だったのである。……人権擁護といううらには、いちにんの子の人権に、熱い思いを注ぐことがなければならぬ』(雑誌『教育』'82年5月号、国土社刊)

学校における服飾の自由は、子どもの人権を守るものである。現代日本で、子どもの人権に着目しその擁護を決意すると、どんなに多くの問題があるか。実に多方面のとりくみが要求された。有志の努力は多数の生徒・父母に支えられたが、私たちは「すべての」父母や教師と提携したのではない。色とりどりでバラバラの服装を「だらしな」としか感じない親もいた。「自分の在任中に必ず制服を制定してみせる」と提言した管理職もいたし、服飾の自由に最も無理解だった家庭科担当の女教師もいた。——私はW.の皆さんに、「制服強行を放置したままで『被服』で何を学ぶのか」について、明快なとりくみを要望したい。

'87年4月、私は退職後丸三年ぶりの東原の入学式を見た。教師はすっかり入れ代わったが、多様で個性的な服飾自由の伝統は今も健在である。



学習の主人公たち



中学生になると制服がある

三鷹市立中学校新入生の子どもたち

塩崎 維

セーラー服は女の子のあこがれの的。私も

幼稚園のころは自分の行く学校もセーラー服だと思い、わくわくしていた。だけど結局はブレザー。いざ卒業、という時までがっかりしていたが、寸法を測りに行った時、

「ああ、もう中学に行けるんだ。もうあの服が着れるんだ」

と、なんとなくすばらしい事のように思えてきた。

届いた時。箱を開け、プリーツスカートのしつけ糸をほどく時、うれしくて、手にふるえが伝わってきた。家族にすすめられ、そつとそでを通した時、とても感げきしてしまった。ほとんど体がうつる三面鏡をのぞいた時自分がぐつと大人になったように見えた。顔がほてっているのがわかる。弟が

「お姉ちゃんが制服着てると、ぼくが野球の

ユニホーム着てる時みたいだね」と言った。

卒業まであと五日もない日、洋服を買いに行ったが、

「今買っても中学に行ったらどうせ制服なんだからしかたないけどな」

なんて思ったが、あの時、初めて制服を着た時の思いを今でも忘れない。

樋口志津子

制服を着ると、中学生の仲間入りしたような感じがする。今までは、ちがう学年の人は、同じ服を着ることなんてめつたになかった。同じ学年の人と違ってなかったと思う。でも制服だと、一、二、三年生全員が同じ服だから、仲のいい友達がたくさんできるような気がしてきてうれしい。

その他に、制服には、いろいろいいことが

ある。それは、学校に行く時に、服を選ばなくてもいいし、みんなと同じ服だから、何か言われることもない。

でも、その反対に、いやなこともある。それは、運動などをする時に動きにくいし、家に帰ってくると、着がえなくてはいけなかった。

制服は着なくてはいけなから、早く制服を着てなれたいと思う。

榎本 香奈

私は、姉や兄の制服姿を何度も見ました。私もはじめて中学校の制服を着てみました。

制服を着ると少し大人になったような気分になり、きどった顔をしてしまいます。やっぱり制服は、みんなの「あこがれの物」じゃないかと思えます。そして強く心にひびくのは「中学生」という言葉です。中学校は見る人みんなが制服です。制服を通して小学校とちがった新鮮さがあると思います。

アイロンのかかった制服を着て、学校に行くのがとてもたのしみです。これからも中学生であることをほこりとして、制服を大切にしていきたいと思えます。

青木 崇

ぼくは制服を着た人をよく見るが、自分も着た事がない。今、制服について思う事は制服を着ると、子供から大人へなると思う気がする。しかし大人と言ってもまだ卵だろう。

ぼくの行く中学は制服だが、ぼくはあまり好きではない。動きにくく、着がえるのがめんどくさい。そういう部分では制服より私服の方がいい。だけど制服は中学の私服なので大事にするべきだと思う。

萩原美乃里

制服について思ったこととか、感じたこととかそんなにはないけれど、制服が家に届いてハンガーにするしてみても思ったことが二つあります。その一つはえりもとがさびしいから、ねくたいをつけたらカッコいいなあと思いました。二つめは、スカートで登校、下校するのがいやだなあと思いました。それは、いつもジーパンとかキュロットとかジャ

ージとかしか着ていなかったの、スカートをはく時になんとなくこういうかんを感じていました。(なんで制服は女子がスカートではなくちやいけなんだろう)と私は制服を見るたんびに思っています。

やっぱり制服はなくてはいけないけど、私は上のブレザーだけ全員同じで、下は自由でスカートでもキュロットでもなんでも自由がいいと思います。このようなことを思うのは私ぐらいかなあ……。



学習の主人公たち

制服のない高校で

自由の森学園高等学校二年生

なぜ。どうして。誰のために。

中川千亜希

ただ一言で「制服」とは言いきれてもその種類は数多いだろう。その数多い制服の中で本来の制服としての役目を果たしているものと、そうでないものとをここで改めて考えてみたい。

まず考えやすくするために、この世の中から「制服」と名の付く全ての服を取り除いたらどうなるかを考えてみたい。

駅員の制服がなくなれば、まず利用客がホームを聞きたい時等に困るだろう。会社の制服がなくなれば、その会社への訪問者が「誰が社員なのか分からない」と言うだろうし、

クラブのユニホームがなくなれば、観客をはじめ選手さえもが「敵と味方の区別がつかない」と言ってしまうだろう。警察の制服がなくなれば、住民が犯罪を知らせる時困るだろうし、犯罪者さえもおちおち仕事ができないう言ってしまうだろう。ウェイターやホテルのボーイの制服がなくなれば、お客がどの人に注文したらいいのか分からなくなり、困ってしまうだろう。

今まで例にあげてきた数種類の制服は、多くの人々が生活したり、仕事をしたりする上で、大変役立つような気がする。また、逆の見方をすれば、その役目のために、作り出されたのではないだろうか。

では学校の制服はどうだろう。

この学校の制服がなくなれば、生徒や先生達はなんと言うだろう。そして、他の制服をなくしてしまった時と同様に困ることがあるのだろうか。

私服となった場合、まず先生は「ハデになつて困る」と言うだろう。そして「心の乱れは服装の乱れから」とか「学生らしい服装を」とか言うだろう。つまり、先生達が困ることは、おおかた外見にしかないのである（本来、人間とは中身で勝負なのに）。

私は今、私服の学校に通っている。周りにいる友達の服装がすべてハデでないと言えばウソになるが、困ることは何一つない。あると言えば、それは私自身が、朝目を覚ました時、何を着て行こうかと悩むことぐらいである。

——最後に——

みなさんはあまりにも簡単に、制服を受け入れてはいないだろうか。学校の中で制服というものは本当に必要なのだろうか。なぜ、どうして。誰のために、必要なのだろうか。

制服の出きた意味や、制服のあり方。そして、制服が必要でないとはいえないかについて、みなさんで考えていただきたいと思います。

——自分らしさ——

松本 典子

……見たすかぎり地平線。広がる草原に。大地を駆けまわる動物たち、青空に羽ばたく鳥たち。目の覚めるような色のものもあれば、土けむりにまぎれる程の地味さのものもいる。だからといって、彼らの心の中までがそれと同じ、とは言えるだろうか。星の世界を夢みるナマケモノもいれば、風の行方を知りたい象の頭もいるだろうに……。

私の制服との出会いは、中学入学の時。皆が皆、同じ色をして、めまぐるしい高校受験への流れの中、服装についての疑問は意識の表面にはつきりと出ることにはなかった。それがあたりまえだと思っていたから。

でも、服が同じわけだから、自然と視線はそれ以外の方向にいったようだ。年に何度も繰り返される学力試験で、成績の情報ばかりが多くなる。あの人はできる。あの人はできない。そんなことで同級生を見るようになる。上級生・下級生は、校章の色、上ばきの色が違う。ただそれだけで、大きな壁ができ、それをクラブなどの「先輩・後輩」の呼称がさらに大きくした。

中学を卒業し、高校に入った。そこは個人

の自由と自立を尊重する学校で、服装に対する規則は何もない。毎日、自分で着る服を選んで登校するようになった。もちろん、周りもそうだから、しばらく経つと、個々の色が出てくる。服装でも自己主張を始める。

不思議と年の差、性別の違いなどは気にならなくなった。それぞれの自己主張の中で、そんなことはささいな事に思えてくる。その人は、その人、で。それでいい、と。

小学生の時も私服だったけど、親の選んだ服をそのまま着ていた。そして制服の三年間を経て、「自分らしい服装」について考える今、少ない枚数だけど「制服」について気付く点を書いてみたが、どうだろう。

大人が考えた、学生らしい服装があつて、そのわくに自分をはめていかないと、大小様々なつづてが当たる。自己主張を考えると、「学生らしくない」の一言で押さえられる。でも、今の私の周りでは、奇抜なかつこうをしている人、渋い好みで統一している人、色々な人たちがいる。そして押えられない分、それぞれの自分らしさが、野に咲く花のように、あちこちで色づいている。星の世界を自分引き寄せる人、風の行方を追い求める人……。

学習の主人公たち



制服のある私立小学校で

制服のある私立小学校に勤めています。

最初の授業で、家庭・日常生活に関して子どもたちの意識を調査した中から、今月のテーマに関係する部分をお目にかけます。

調査は次のよびかけで行いました。
さあ、みなさんは新学年になりました。
新しく家庭科の学習が始まります。

家庭科は、ゆめいっぱい役で立つ勉強です。

さて、このプリントは、これからどんな風に授業をすすめていくかを、研究するためのものです。せいせきや点数には関係ありません。安心して、思ったことをどんどん書いて下さい。

せいせきには関係ありません。と書かなければ、子どもは、自分から「これはせいせきのどこに入るのですか」とか「どうやって、点をつけるのですか」と聞いてきます。

何だか悲しいな。でも、こうなったのは大人の責任なんですよ。(上田智子)

- 1、子どもたちのプロフィール(21頁表参照)
- ・料理をしたことがない子は71名中1名(女)
- ・洗濯をしたことがない子のほうが多く17名
- ・家の人が用意してくれる服を着ている子が13%近くいる

2、制服をどういう気持ちで着ているか

(一人で幾つも答えている)

〈男の子〉

- ・かっこいい 7
- ・りっぱになったよう、ちよつとえらそう、中学生になったよう 3
- ・おしゃれができる、きれい 2
- ・早く学校に行きたくなる 1
- ・めんどくさい 5
- ・あまり好きでない、やな気持ち、恥ずかしい、よくない 5
- ・重い、寒い 2
- ・暑くてぼうしがいや 3

・わからない 1

〈女の子〉

- ・かっこいい、うれしい、うきうきする、すてきなあ、かわいい、いい気持ち、鼻が高い、形がよい 11
- ・学校へ行きたい気持ちが高まる、目立つからいい子にしていよう、きまってピシツとする、スカツとする、中・高校生みたい 10
- ・毎日服を選ばなくてもよい 1
- ・めんどくさい、あまりよくない、重たい、制服を早く変えてほしい 6
- ・別にない 8

3、制服のよいところ

〈男の子〉

- ・じまんできる、りっぱ、めだつ、おそう式などに着ていける、背広のよう、内ポケットがある 7
- ・そろっているのかっこいい 6

・上着は冬あったかで夏暑い日は半袖でよいから

・黒いから、いちいち着がえしなくてよい
・わからない、特にな
・あるわけではない

〈女の子〉

・お嬢さんぽくて、かわいくて、かっこよい
・リボンがいい、とにかくよい

・大人にほめられる

・学校の目印、結婚式やおそう式に着ている、きちつとしている

・きまっているとラク、朝迷わずにすむ
4、制服のよいところ

〈男の子〉

・半ズボンは冬寒い
・重い、かっこわるい、目立つ、暗い、帽子が幼稚園みたい、ボタンがありすぎる

・自分の服を着たいのに着れない、着るのにつかれる、帰ったらまた着替えないければならない

・全部いや、なんとなくいや
・ない、知らない

〈女の子〉

・区立の人にジロジロ見られる
・寒暑の調節できぬ、汚してはいけ

1.子どもたちのプロフィール

			ある	ない
料理をし	6年 男女	15	0	
	5年 男女	20	1	
洗濯をし	6年 男女	16	0	
	5年 男女	19	0	
	6年 男女	10	5	
	5年 男女	17	4	
	6年 男女	12	4	
	5年 男女	15	4	
		A	B	C
	6年 男女	3	7	5
家で決めるの	5年 男女	2	12	7
	6年 男女	2	9	5
	5年 男女	2	7	10

6年 男15女21, 5年 男16女19
A 家の人が用意してくれることが多い
B 自分の着たいものを好きなように
C A, B, 同じくらい

・六年生の女の子には、「ふつうの学校と違ってよい子が集まっているという意味」との答もあり、制服が特権意識を支え、逆に、低く評価されている学校の制服は恥だから着たくない、ということになるのでしょう。

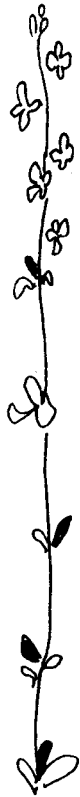
・「私立だから、区立と区別するため」と、いささか優越感を持って答えた子どもが60%もいてショックでした。

5、どうして制服が決まっていると思うか
(表参照)

・家に帰って着替えるのがめんどう
・デザインが古くさい、顔を洗う時リボンがぬれる
・ない
・悪いことをしてもすぐわかるように、子どもが答えるのも悲しく、私服だと風紀が乱れるとか、法律だとか信じこんでいる子ども少数ですが、いました。
・学校が勝手に決めた、と怒っている子はたった二名でした。

5. どうして制服が決まっていると思うか

	6年 男	6年 女	5年 男	5年 女	計
私立だから、区立と区別するため、学校の目印	10	6	13	14	43
ふつうの学校と違ってよい子が集まっているという意味		5			5
悪いことをしてもすぐわかるように	3	6			9
みんなそろうときれい、全員同じできちんとしている		1	1		2
私服だと風紀が乱れる				1	1
法律だから			1		1
あまり考えない、わからない	2	2	4	2	10
みんなが静かになるとして学校が勝手にきめた			2		2



幼稚園から制服とは？

ひらい かずい

うかつだった。娘の入園式間近になって、「入園のしおり」を開き初めて、制服の他にも体育着、半ズボン、ゼッケン、帽子と、きっちり指定されていることに気がつき、ギョツとした。何ということだろう。「先生たちが子どもと対等に楽しそうに遊んでくれる」ということを聞いて、保育園をやめて、今年から幼稚園へ通うことにしたのに……。

明日が入園式という夜、親としての考えを手紙にし、当日担任の先生へ渡した。手紙の提出と同時に周りのお母さんたちに、「どう思う？」と聞いてみた。どの人もだいたい一瞬目をパチクリさせ、「考えたことなかった……」という。「でも楽で助かるわ」ともいう。毎朝出かける前の一分一秒を競う時に、「着る物でもめないから」「汚れてもすぐ洗えるから（体育着）」、楽だということらしい。または、「小学校も体操服にゼッケンだから……」、早くから慣らしておこうということか? 「真冬に半袖半ズボン（女子はブルマ）なんて、カズミの子はどうするの？」と尋ねると、「連絡帳に上着を着せる旨書いて親の印鑑を押せばいいのよ」と、こともなげ

にいう。もう脳ミソが腐っているとは思えない。

間もなく私の手紙に対応して、園長先生から申し入れがあり、他の先生も同席で話し合いとなった。こちらは、疑問を持つ母親二人。私たちは入園式の園長先生の言葉をそのままいただいて、「基本的な生活力をつけ」「個性豊かな」子どもに育ててほしいからこそ、毎朝天候やその日の行事等を考え合わせて、着る物を自分で決めさせてほしい。制服や体育着は子どもの自立の芽をむざむざつみ取ってしまうのではないかと主張した。若い先生方は一言も発言されず、もっぱら主任先生が、「統一の美」「当園の子だという誇りを持つてほしいから」といわれ、「私たちは管理しようとしてやっているのではなく、制服や体育着が最も良いと思うから」だ、と繰り返された。

しかし、大人の側が「管理」を意図してなくても、子どもたちに与える影響は決定的だ。私の娘は、黄色や赤色が好きで、「スカートをほきたい」とのこと、断乎ブラウスとスカートで通園しているが、それとなく見ていると大きい女の

子たちが寄って来て、「ちよつとあんたスカートはいてるんじゃない?」と、上着をめくりに来たりする。既に管理者に従順な「規格品」となって、その規格の枠に入り切らない子を特別視しているのか、それとも本当は自分もスカートをほきたいのかな。

私の手紙の内容について、役員会でも取り上げられ、その報告が園長先生からの手紙として届いた。「PTAでも現状を改める必要はないだろうということでした。なお、お宅のお子さんも、皆さんと同じ様な服装にされた方が良いと思います」とのこと。たまたま私の知人が役員の一人で、PTAでの話し合いの様子を語ってくれた。「そんなことをいう人は他の幼稚園へ行けばいい!」と発言した母親があり、その後シーンと重いふんい気になってしまったという。恐ろしい言葉に、クラクラとめまいがした。

運動会ならともかく、常に子どもたちの胸と背中に大きな名前の書かれたゼッケンが、なぜ必要なのかわからない。子どもも名前をすぐに覚えてもらわなくてもいいから、子どもの前へ回って語りかけてほしい。どの子もきつと自分の口で一生涯自分の名前をいうだろう。戦中、小学生の集団登下校が開始されたのが太平洋戦争突入直前、末期には大人もカーキ色の胸に名前を縫い付た。もう既に、意識は戦中では?と思うのは考えすぎだろうか。子どもたちが大きなゼッケン

を付けて遊んでいる光景は、異様だ。

私たちの共同購入の仲間に、小学校の先生がいる。彼女は今、三回目の産休中だ。初めて会った時、集団登校や制服に疑問を持つ私に、宇宙人を見るような顔をした彼女が、今は管理体制の見直しを求める発言を職場であげている。「目の上のうるこが取れたのよ」と笑う彼女は、「学校の中だけにいたら教師も自分自身を見失い、管理強化へ流されやすい。私は産休で学校と生活の場を行ったり来たりする中で、自分のしてきたことを見直すことができた」と語ってくれた。あたり前の生活者としての視点、大切だと思う。

「あの学校へは行きたくないナ」と、娘は近所の中学生が、登下校の際に校舎に向かって頭を下げるのを見ていて、そういう。この「礼」の角度も四十五度と決められ、スカートの長さが床上何センチという規則共々、入学式で校長先生から長々と説明があったそうだ。「角度まで決まってるじゃあ、分度器を持ち歩くべ!」と一番前の席で皆で笑ってやった」という頼もしい仲間もいる。

同じ服、同じ持ち物。「皆と同じで安心」ということは、自己がなく常に他者の流れに従って生きること。それは安定しているかもしれないが、心を震わすような感動や共感からは無縁だ。「着る」という大切な自分自身のことも決められないで、どうして社会全体のことを考え判断したり、新しい

歴史を創る力になれようか。すでに幼稚園から「規格品」づくりは準備されている。が、個性豊かな子どもたちはその枠からはみ出して、自己を主張する。個人の生活にまでどた靴

で踏み込んでくる「管理」に、「大きなお世話!」と、親子で笑い飛ばしてやる日が来るように、今はしんどいけれど、皆でがんばる時。

発言



私と制服の歴史

酒井 佳代子

学生生活十四年間、そのうち八年間、制服と過ごしてきた。小学校時代は私服であった。その頃は中学に入学し、制服を着ることに対し、大人に一步近づくような感じがして楽しみにしていたものだった。

中学に入学し、制服を着てみると今までとは違い、みんな少し大人びたようにみえた。制服の色は黒、ブレザーにつりスカート、白のワイシャツというものでリボン一つない、女の子らしさが一つもない制服であった。それに加えて髪の長さ、スカートの長さまで決められていた。

そろそろオシャレにも関心をもちはじめ年頃である。一〜二ヶ月もすれば同じ制服を着ていても、その人の着こなしが制服でもでてくる。先輩などの影響を受け、スカートを長くし、髪の毛を染めたりする人、かわいい靴下をはいて女の

子らしさをだす人など、個性がでて、さまざまである。

アメリカでは、中学生も私服で、自由な校風の中で自分の個性を充分に発揮して楽しんでいる。その点、日本の中・高生はかわいそうだ、学生なので勉強第一とはいえ、のびざかりの個性を制服という限られた衣服の中でしか生かすことができないのだから。

制服を着ることで、集団意識の向上をはかり、規則があることにより社会にはルールがあるということを教えるというのはよくわかるのだが、前髪の長さなどはまったく関係ないはずだ。

高校は、中学とはうってかわって、セーラー服の女の子らしい制服だった。この制服は中・高生の間で人気のある雑誌の制服コンテストで第一位に選ばれた。中学時代のおもおも

しい制服から、憧れていたセーラー服に、入学当初は心はずませたものだった。同じ制服であっても少しでもバリエーションを生かせ、自分たちの意にそうものであれば、着てもいいという気持が、女の子の本音にあるのではないかと思うのである。

高校の友達と外で会うと、みんな大人びてみえる。昼間制服なので、休みの日には、存分にオシャレするのであろう。私が短大へ行って気づいたことであるが、都立の私服の高校へ通っていた友達と、私立の制服がある高校へ通っていた友達とは、オシャレの感覚が違うのである、私服の高校へ行った友達は、毎日登校する時に着る服なので、安くていいから数多く服がある方がよく、制服の高校へ行った友達は、一着の値段が何万円もする服を買うのである。今というブランド志向である。プライベートな部分に関しても、私立女子校の方が派手なように思った。女同士の見えもあるのか、洋服もブランド物でなくてはだめという風になる。

短大へ進学し今度こそ私服で登校と思ったのだが、進学した短大には制服があった。どうして、短大にもなって制服があるのかと、その理由は、学生は勉強が第一で私服であればそっちの方に身がはいり、学生の本業である勉強がおろそかになるといふことだからだそうだ。

確かにオシャレに関心がいかないといえバ嘘になるが、も

う十八〜二十歳の年齢である。もう少し学生の自主性を信じて、もよさそうなのであるが、学校側は、私服であれば派手になるとそれを恐れていて、結局学校の体面を考えているだけなのである。

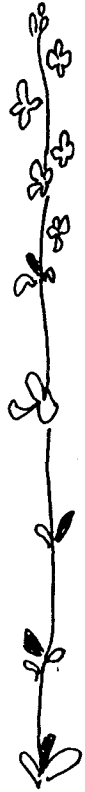
親は、経済的に楽であるという考えだから、制服のある短大は人気をよぶのであろう。

社会にでて一ヶ月たった。行き帰りは私服だが、会社では制服である。やはり毎日私服だとたいへんという理由からである。確かに働いて、やっと給料をもらう身になって、制服の方が助かるという親の意見がわかるような気持ちになってきた。

出社し、制服を着ると仕事をするんだという気持ちにもなり、最近では制服で心のきりかえがきくようになってきた。

だが、学生時代、とくに、高校・短大では、自分のできる範囲のオシャレをたのしみたかったという思いは残る。

これからは、もっと制服自体、オシャレな感覚で、コーディネートがたのしめるものであつてほしいと思う。



体育とユニホーム(体育着)

藤 武 礼 子

春、入学式、期待に胸ふくらむ季節、そしてちよつぱり憂うつにもなる季節です。「制服」が話題に上ることです……。

都内の公立小学校は私服で通学する学校が多く、私の住んでいる地域の小学生も自由な服装で、見ていてとても楽しい。

しかし中学生になったとたんに「標準服」を着せられる。

高等学校はいえ、新設校と呼ばれている学校はもちろんのこと、全日制の高校で、「自由な服装」で通学できる公立高校は今や数少ない。

私が勤務する学校は、十年以上前に生徒たちが、自由な服装を学校側に要求し、「制服」から「私服」に変えていった歴史をもつにもかかわらず、その同じ生徒会が「標準服」を作ってしまった、「自由な服装」の時代は終わった。

それでもまだ「制服」とはなっていないから、夏休みが終わる頃から私服で通学する生徒がかなり多くなっている。

親も「標準服」を支持したり、しなかったりで、クラス懇談会にはかならずといっていい程、この問題が話題になる。

「通学の服装」は、毎年この季節には話題になって、新聞紙

上をにぎわすが、学校の中では、授業では、あまり話題にならないし、問題にされない。(二、三目に余る例は見聞きしています)

今回のこのテーマは、公立高校で「保健体育」を担当している私自身にとって、重く厳しいものではある。でも、避けては通れないことだと受けとめて、体育の授業における「服装」が今どうなっているのか、そのことが生徒にどのように受けとめられているのか、現状を語って問題提起にしたい。

現在、都内の公立学校は小学校から高等学校に至るまで「体育」の授業は学校で決められた服装で受けることになっているところが圧倒的に多い。

私の子供が通う小学校は、通学服は自由だけれども、体操着は、校章がプリントされた半袖の体操服と短パンを入学時に、セットで購入させられた。その服装で一年間体育の授業を受ける。そして五月に行われる運動会は、全員がそろってその服装で、まさに統一された美しさということになる。親に観せることに重点が置かれるようになったわけでもない

思うけれど、体操着を規定することと、スポーツ的行事を盛大に行うことは、どこかで深くつながっているように思えてならない。

それはともかくとして、最近とても気になっているのは、「体育」の授業で着用するという事で購入させた体操服を、遠足や林間学校で強制的に着せる学校が増えてきたこと。二重の強制ではないかと考えさせられてしまう。

たしかに動きやすいし、何よりも教師の側からすればひと目で自分の学校の生徒だとわかるから、集団で行動する時は都合がよいということだろうが、そこまでひろがっている「体操服」に胸が痛む。

このような情況は小・中学校に多くみられるのだが、では公立の高校ではどうだろうか。

今、全日制の高校で、体育の授業を自由な服装でよいとされている学校はほんのわずかしかない。K高校は、今年度から、「自由」にしたそうだが、理由は、生徒が、決められた服装で授業に参加しなくなり、その数があまりに多くなつて、教師の側が規則を変えざるを得なくなったということらしい。今年の体育祭はそれぞれ好みの服装で参加することになる。「みんな同じ」でない高校生の体育祭がとても楽しいだ。

非常勤講師として都内の数校に勤めている私の友人に、数

少ないけれど、創立以来、体育着を規定していない学校の実情を聞くにつけ、定時制高校はほとんど規定がないということも含めて、体育着には、再考の必要が大いにある。

誰が考えてもわかるように、みんな同じ服装をしなければ体育ができないということはない。動きやすい服装であれば何でもよいはずだ。

私自身も過去に何回かそのことを提起したけれど、「集団におけるそろった美しさ」を主張する大きな声の前に引かざるを得なくて、胸にいつも何かがつかえている状態で授業をしてきた。圧倒的多数を占める「学校指定の体育着」が、さらに広がっていく情況の中で、それを支えているものは何なのか。「授業」をする教師の体質なのか、それだけではない何かがあるのか、問い続けたい。

あまりに見慣れてしまった体育着だけれど、「制服」と同じで、着せられる生徒自身がおかしいと感じた時に、情況は変わるのかもしれない。

今私の「ダンス」の授業は、全員が規定の服装ではない。他からの批判を覚悟の上で、どこまで生徒の「これだけは絶対いやだ」を受けとめていかれるか。日頃の思いを実践していられるか。試されている日々は、しんどくて、かなり厳しい新学期の始まりである。

制服と私



E · S

「ダメなものはダメ。それは規定では認められていない。決まりを守りなさい。」何度も聞いてきた言葉である。「なんとという人権無視。それでは生徒を納得させられない!」という私の胸のうちの反発もだんだん微弱になってきたようである。それがこの文章を書きづらくしている。

教師になりたての頃、ズボンの折り返しが問題になったことがある。「折り返しをのばせば三センチは長くなるし、折り返しのことぐらいで……」と発言したら、「規定では制服のズボンには折り返しがあることになっている」と一蹴された。

学校というところは、こと服装指導になると問答無用、理屈ぬきの強制のまかり通る非教育的な場になる。細かすぎる規定は意味がないから、非教育的なやり方でしか守らせられない。規則をもち出すことで、生徒を納得させ指導したと思っている。自分が自分の主人公であることを教えなければならぬ学校で、最も非教育的なことを行っている。

ようやく私の二人の子どもは高校を終えたが、子どもたち

の学校の服装指導にはやや大らかさがあつたことをよかつたと思つてゐる。娘に「決まりだから守れ」と言われたらどうする?と聞くと「わざと違反したものを着ていく。なんでもないの、誰がなんのためにその決まりを作つたか、その決まりはどんなプラスがあるか、質問する。それに答えられない先生を軽蔑する」と返つてきた。

勤務校の一期生は、林間学校へ貸切りバスで行くの往復は制服、宿舎内は私服、登山は体育着だったと聞いた時、よく生徒は従つたものだと思つた。二期生の時、私が生活係担当になり、生徒と話し合つて、出発時から身軽な私服でよいとしたら、学校の近くの住民から「あんな恰好させて」と電話があつたそうで、そのせいか次年度はまた制服でスタートした。ドライブインで他校の生徒たちと出合うが、制服の方が多い。私服をがち取つたことに私はいささか誇らしさを感じていたが、それを恥ずかしいと思う教師もいる。真夏の盛りにも制服から開放させないで、健康で快適な衣生活を創る力

をどう育てるのか？

衣服の起源は活動性を高めるための一本の紐であつた。そこから人間は両手の自由とより高い活動力を得て進歩してきたという起源説に生徒はうなずく、村上信彦氏『服装の歴史』の表現をかりて言えば、衣服の本質的機能としての活動性・保温・保護は容易に生徒の中から引き出せる。この本質的役割の他に副次的な役割、生徒の言葉で言えば、おしやれを楽しむ、自分らしさを表現する、職業とか集団を表す、男女の別を示す、気持を表す、が衣生活を豊かに変化のあるものにした。しかし副次的な役割が強調されすぎて基本的な機能を妨げ、人間の生活を不幸にした例として、コルセットや着物、てん足の話をする時生徒は集中する。服装の歴史をたどる時、どんな服装をしたか、させられたかで人間としてどのような地位におかれたかという事が見えてくる。歴史としてふり返った時に見えることは多いが、現在のものの中の問題点は見えにくい。衣服は第一に本質的機能を重視し、私たちは健康で快適で自分らしい衣生活をつくることを学習の課題にしようと話しているが、自分らしさを制服の中でどう表現せよというのか……自己不統一感が残る。

与えられたタイトルは「制服と家庭科教師」だが、これ

は書きづらいとぼやいたら、「制服反対運動をしていないからだよ」と娘は言う。娘の制服観はこうである。「中一になつて長いスカートをはかせられた時、女らしくさせるための陰謀だと思つた」「制服を着ていると、ゴキブリゾロゾロを連想する。自分も後からつづいて入っていく一匹のゴキブリのような気がして、自分がなくなつてしまひそうで情けなかった。制服というのは、個性をなくさせるものなんだ、制服を着ておいて、個性を出せ、自立せよというのはおかしい。でも卒業すると、制服がなくなつていく。もう一度着てみたい」という子もいるよ。制服のもつ社会的な意味がわかつていないだね」

中国でてん足の禁止令が出された時、旧習を固守し続けた階層は庶民層であつたという文章『女を装う』駒尺喜美は、私には大変示唆的である。旧習を固守している様なことが、私の内にないのか？。

教育とはどんな場合でも、「寝た子を起こす」ことであろう。あの手、この手で起こすことであろう。起こすことを躊躇していないか。「制服と教師としての私」を考えて、今思ふのはこのことである。

(県立高等学校教諭)



「制服」のない高校から

西澤 幾子

最近の新聞で、ある中学校では、登校したら、生徒も先生も全員体操着に着替える。男子の頭髪は丸刈り、女子は、オカッパは眉を出し、長い髪は三つ編みと、厳しい規則を決めていると、報じていた。そうになると、学校は、規則を守る、守らせるといふ関係だけに、終始してしまいはしないかと、恐ろしさを感じた。

公立学校は大体、小学校は私服、中学は制服、高校は制服・私服と各様のようである。十年程前、東京に住んでいた頃、有名私学に通う高校生は制服に誇を持ち、公立高校に合格出来ずに私学に通う生徒は、近所の目を気遣い、始業時間に間に合うより、ずっと早い電車で通学すると耳にして、心が痛んだことを思い出す。

制服については、賛否両論が、長い間論じられているが、最近では小学生にまでという論も出て来ているようだ。

我が家では、二人の子が、中学・高校でそれぞれ、転校したが、その都度制服・体育着等新調せねばならず、制服には、少なからず疑問があった。親は、必ず買うものというこ

とか、値引きなどではなく、その上、他の衣料品にくらべ縫製が、大変粗雑なのに困惑した。

私は、大部分の学校教育を、戦中に受けて来ているし、これと言って断言できる自信はないが、現在、勤務している高校の、私服通学の実態からみて、又生徒たちの声を聞いて、制服にこだわる必要が、高校生にはないと考えるようになった。

この春の卒業生が、二年生になった最初の授業で「きょうの私の服装」ということから入り、スタイル画を描かせ、次に価格を書かせた。今はほとんど、既製服を身につけているので、表示票から、素材と取り扱い方を、写しとらせた。次に「一年間、私服通学をしてみて、そのことで「親と話題になること」「中学時代の友人と話してみても」「毎日心がけていること」を書かせた。高校生として、ふさわしい服装は何かを考えさせたいと思ったからである。

というのは、彼らが入学した年度は、当地に県立高校が新設されたこともあってか、定員割れであった。私服通学が、

父母・中学側の学校選択の問題になっていたかもしれない。確かに入学して来た生徒の服装が派手という印象があった。その頃から、アパレル企業が市場に送り出す若者向衣料に、奇を衒ったものが多くなっていたし、そういうスタイルの子が、校内によく見られた。教員の中に眉をひそめる人も出始め、ストレートに注意しても、耳を貸さぬ生徒事情でもあった。それで、授業で取り上げ、考えさせたいと思った。

させてみると、興味のあるものだけに、渡したプリントはたちまちに埋まり、絵のストラスラ描けること、価格に詳しいこと、喜々として、バッグの中から細々とした小物を机上に拡げて十円単位までしっかり書くのには、驚いた。

このレポートをまとめて、全員に配ったのだが、こういうやり方をするとは結構正論が出て来るし、他の人のことも分かり、落ち着くようである。加えて、私の考えも、プリントして読んでもらったが、半分はうなずけ、半分は無関心ということだったかもしれない。「パーマ染髪は美しい髪をそこなう」と書いたが、これに対して「そんなのひどい!」と、直に言ってきた生徒もあった。

「卒業式はどんな服装で」ということが大学生から高校生まで関心事になっている時代、生徒たちは、三年生になった時から、話題にして、暮頃から、袴のリースを予約しているということだった。その卒業式、女子は振袖、矢絣の着物に

袴、ニュー着物、ワンピース、スーツ。男子も紋付袴、ズートスーツ、ブレザー等多彩だった。一人ずつ、壇上に上り、学校長より証書を手渡されるので、ショーのようにもなるわけである。集会では、私語の目立つこの頃、三時間にもわたる式なのに、静かなものだった。私は女子生徒全員に、二年生の時接しているので、その服装に一人一人の主張があつて興味深かった(あの子にして、あの装いと)。

卒業式が、着飾ることに流れやすい、飽衣時代の風潮はこの際問題の外に置いて、大半の生徒は、青春の門出に相応しい、良識的な装いであつたことを思う時、多少の問題を孕んでいても、高校三年間に生徒らしい服装に定着して行くように思う。

制服を定めている学校で、違反があると、そのことで教師・生徒の関係が気まずいものになることの方が、却って問題でないかと考えているこの頃である。

(仙台市立仙台高等学校)

ズートスーツ

ひざまである長い上着と、すそでくくられたダブついた長ズボンの男子の服装をいう



学校は着るものを

決めて下さらなくなって結構

大西 麻里子

三月も学期末近くなって、上の子（幸雄）が「学校を替わりたい」と言い出しました。曰く「どうして、ぼくは普通の学校じゃダメなの？」「ゲンちゃんも行ってるし、昌史（弟）だって大丈夫だし……」。

ゲンちゃんというのは、幸雄と同様、アメリカに五年いて、四年生の時に帰国した同学年の子なのです。

幸雄は、国立の附属の帰国子女学級に行っているのですが、どうも自分だけ特別に「朝早く起きて、バスや電車に乗って、制服着て、夕方遅くまで」学校に通っているわけがわからず、「どうして、ぼくだけが？」「イヤだよ」ということになったようです。結局、「いいよ」となり、替わる運びとなりました。

そうしましたら、ある朝、制服を着ながら「制服がなくなったらイヤだな。何着ていくか、そろえるのが大変だ」と言うのです。「あーあ、たったの六か月で、こんなにもなってしまうのか。これがほんとの『精神の墮落』ということなんだ」と、私は今まで観念としてしか知らなかった事柄を、目

の前に事実としてみせつけられた思いでした。

なぜって、彼は学校に行きはじめのころ、制服を着た子どもの集団を見て「ロボットみたい」と評し、「何で学校で勉強するのに、頭の毛を短くする必要があるのか」とか、いろいろ批判をしていたのですから……。

私は今まで、制服は、動きにくくて不便、イヤだなと思う反面、慣れてしまえば、それなりに便利だし、そんなに目くじらを立てるほどのこともない、と思っていたのです。わが子が床屋さんで坊ちゃん刈りにされた時は、もうぜんぜん似合わず、イヤーな感じでショックでしたが、制服を着た時は、みつともないとは思ったものの、「勉強することには関係ないけど、あの学校に通うには必要なだから、仕方ないでしょ」と子どもを納得させ、自分もそれですませてきました。だいたい、着る物なんて、何だかっていいんだから、と。ただし、息子がロボットみたい、と言ったのには、内心さすがわが息子、教えたわけでもないけど、ちゃんと批判力あるし、感覚も鋭い、と悦に入っていました。

ところが、その子がたったの六か月で「制服のないのは不便だ」と言う子になってしまったのです。もともとめんどくさがりやの子なのですが、それにしても、人間の弱みにつけこんだ「制服」というものに腹が立ってしまいました。

動物の中で着物を着ているのは人間だけです。親だって時にはめんどくさいと思う着替えを、人間は毎日するべきこととして、しつけをするのです。それがようやく身についたかつかないうちにまず幼稚園で制服がある。どうしてでしょう。これは全く親の都合―手が省ける、園の都合―色が統一されて目がちらちらしない、宣伝効果もある、その他何でもか。わかりませんが、それらによるのです。

ただ幼稚園の場合、帰ってくる時間も早いから、家に帰った時に、ふだんの服と着替えるチャンスはあります。ところが、小学生になるとちの子の場合、朝起きたらすぐ制服を着て、家を出るのが七時ちよつとすぎ、帰宅は早く夕方五時でした。帰ってきたらヘトヘトで、ごはんを食べおフロに入り、ちよつとした宿題をやるのでせいっぱい。一応服を着替えますが、それを着ている時間といったら、たったの三、四時間。ほとんど一週間、毎日こんどは「家内制服」のようになつてしまう同じ組み合わせをひっかけることになります。

こういう生活をしていると、ただでさえめんどくさい面もある「着物を替える」という行為がほんとに「わずらわしい

もの」になつてしまふのです。制服がなかったら、当然人間としてやらなければならないことの一つで、頭で考え、神経を使う、文化的な行為の一つであり得るのに。

制服の腹立たしい一面のもう一つは、次には靴の色・型・カバンなどの持ち物、髪型と、とめどなく規制が広がっていくことです。はては、毎日の生理現象まで、教師の「指導」とやらが支配していく様子は、まったくプライバシーなんてどこにあるの？ です。

日本人は、もともと人と人権とプライバシーとを大切にしたい方だと思います。それらを考える基になるのは、個人の感覚です。自分の好き嫌い、痛みの感じ方などなど、声を大にして他人に言うことに努力した方がいいと思います。日本の学校のやり方は、はつきり言つて、間違っています。

小さい子供、声の小さい人間に対し、その言い分を聞き出す努力を、周囲の大人がやらなければいけないと思います。それを「これは決まっていることだから……」と言うだけで、昔昔にどこかの誰かさんが決めたことを、全員に従わせようなんて「教育」でなんぞあり得ないし、学校は「教育」以外のことに、首をつつこんでくれるなどとも言いたいのです。

何を着るかは個人が決めます。親は子供にしつけとして、何をどう着るか教えます。学校は親に協力してくれればそれで結構。着る物を決めて下さらなくてよろしいのです。



体にあつた服装を自分で選ぼう

神崎 房子

桜並木の中の本だけが、もうちらほら花を咲かせてしま

っている。他のはやっとピンク色が、ちらっと見えるか見えないかぐらいの装いだというのに、桜の木にも、人間と同様、あわて者がいるかと見える。開いてはみたものの、外はまだまだ冷い空気で、虫のようにあわてて引つ込むというわけにいかないのが植物の悲しさ。冷やっこい風にゆすられて、振り落とされまいと、枝にしっかりとみついている姿があられでもあり、おかしくもある。それでもこの姿は、春の近さを感じさせ、あきあきしたオーバーコートをかたくり捨てたい気持ちにさせてくれる。

そのコートをとると、中の服が外着になって現れる。新学期になると、目立つのが制服の姿だ。せめて町ゆく人々の目を楽しませてくれる制服ならともかく、あちらもこちらも輝きのない紺か黒で、とてもそれは若い肉体を包むにふさわしい衣服とは見えない。むしろ、彼らの背後で権力をもって立ちのびる親や教師の姿が垣間見られ、それが新陳代謝の激しい肉体を、衛生よく管理できる服装なのだろうかと思ひし

くなってくる。

暖かさがつのつてくる五月に入ると、この感が一層強くなる。制服の衣替えは六月からがほとんどのらしいが、時には夏の気温になってしまふ五月、混んだ電車の中で汗を吹き出している若い彼らの姿を見ると、気の毒を通り越して、怒りすらこみ上げてくる。寒さに向かう日なら、中に重ね着をして乗りきれぬが、その逆は、薄くそして少なくしていかなければならないのに、現実には汗まみれで、がまん会みたい冬服で耐えさせられている。

一体これが教育なのだろうか。夏に冬服を着せると、どんな教育的効果があるのだろうか？　せめて五月の一カ月間だけでも、体に素直になって、その日の気温や体質に応じて、夏冬、いずれの選択でもよいというわけにいかないのだろうか。だめなら、その理由は何なのだろうか。一方的な権力で、本人の肉体の調子に思いをやらすこれも又強制的に決めた制服を着させ、これに反すると犯罪者として扱うというのは、果たして教育としてふさわしいといえる行為なのだろうか。

桜の花ですら、冷気を承知でも、早く開花したがる花があるというのに、人間なのだから、もっと体を尊重したいものだ。一般市民が見ても不快になる夏の冬服着用は、自分だけは夏に切りかえている教師にとっては、もう他人ごととして、相手を思いやる気持を失っているのだろうか。人は一人一人違い、少数でも尊重される存在だという思想を、この権力による制服強制は、奪い取ってゆくように恐ろしい。

一度ぐらい混乱してもかまわない。この混乱は長続きしないのだから、いっそ制服など全廃してみたらどうだろう。私服は高くつくというが、それは物の不足していた時代のことでも、今は現代はその逆だ。私服になれば、彼らは彼らなりに、動きやすく洗濯しやすく、かつ体にとって快適な服装を考えぬわけにはいかない。その時こそ、制服という名のいじめから解放された春がやってくる。

して、一時は東京との二重生活をする。

——それが、二風谷に住むことになるのは？

と
ひ
〈知らないことを
知りたくての〉
蓮池悦子さん



「74年、故金田一京助が未訳のまま遺した、『金成マツノート』が長男春彦氏から、二風谷アイヌ文化資料館に寄贈されました。このノートの翻訳の仕事を書野氏と共同で行うため、翌年から、二風谷に移り住みました」

このユーカラ九二曲（うち九曲は金田一氏

六月号で紹介のスナツプでは、ステさんとにこやかな蓮池さん。室蘭で生まれ高校卒業までの十八年間をすごし、東京で大学を卒業後、フリーライターとして仕事をしていた。

たまたま、ユーカラを素材とした童話を書くための取材旅行中に、偶然萱野茂さん（ニ風谷在住のアイヌ文化研究者・菊池寛賞受賞）に出会い、出版原稿の整理や資料館の手伝いを

が翻訳出版）を収めたノート七五冊、一万五千ページに及ぶ肉筆のアルファベット群を見た時の感想を蓮池さんは「これが文字なのかこれが言葉なのか……」と「私はまさに頭と胸が痛くなる想いに駆られた」と表現している。それから今年で十二年目、この膨大な仕事は、まだまだ続くという。

蓮池さんは、二年前から、この翻訳された

ユーカラを読む会を札幌で始めた。

「少人数の会ですが、童話に関心をもつ元小学校教師、アイヌのキモノのししゅう、染色に興味をもつOL、アイヌ語の研究をしている青年らとユーカラを読んでいます。少しでも裾野を広げたいと思うことと、いろいろ分野の人に加わってほしいので……」と、アイヌ文化の未来を思う。

一方では、（社）北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員の一人として、民族の歴史にかかわることのむずかしさに直面、現在のアイヌ問題の渦中にも身をおく。

今回、統一地方選の選挙運動でいそがしい友人宅の留守を守るため、はるばる札幌より上京の蓮池さん、「今の女たちの状況を見に」飛んで来られたそうです。

（青木）

新しい家庭科を創るために

蛭 間 裕 人

比留間先生 家庭科でがんばる

—「作る授業」への傾きかけ—

夏休みが終わって、二学期。宿題の自由研究の集まり具合が良くない。曲がりなりにも研究と言えるものはほんの数点で、自由工作・自由手芸・旅行記でしかない。悪いことと知りながら、比留間比呂志は、前の山椒小の「ブッチャー」や「青空」の子どもらと比べてしまふ。あいつらに比べて今度の「たんぽぽ」の、何と重たい

ことよ。

十分手を尽くしたとは言えなくても、かなり時間をかけて事前指導をしたはずなのに、と比呂志は愚痴っぽくなる。夏休みの課題は読書最低四冊と自由研究一点だった。が、蓋を開けてそこに見出したものは、郵便受けの工作だったりする。

「これは自由工作だよな」

「……」

「これ作って、何を研究したの？ ただ『作りました』じゃ「研究」にはならないのよ」

などと言いながら、比呂志は「製作記」や「旅行記」を論文仕立てで書かせることにした。要求を一段下げたのである。

遠大な計画「卒業論文」の執筆に、少しでも資するところがあればとの希いを込めて。

夏休み42日間、天気だの気温だのを記録し続ける。そんなたいへんなことを強いたのではない。夏休みの一日二日を割いたら、十分ひとを刮目させるに足りる研究ができる。そんなヒントがたくさん並んでいたはずなのに、子どもたちが選んだのは木工であり、縫物や手芸のようなものだった。特に縫い物や手芸は、母親によって選ばれ、決められ、手伝われないに違いない。

「動機」なんてわかんない。——無いはずだ。やんなきゃやらないからやった、だけなのだ。

「やんなきゃならないからやったにしても、橋川君がポストを作ったのに君が本立てを作った。それには理由があるんじゃないかな」

——そうか。お母さんが本立てにしたらって言ったんだ。……これでは落語にもならない。

論文のしめくりに「苦労したところは○○でした」と書く。これも学年末に行われるクラブの発表会での「自由工作クラブ」「手芸クラブ」一人一言の決まりきったパターンだ。

前、山椒小の時は通じていたことが、今のこの子どもたちには通じ難くなっている。たった五、六年の間に……。前の成功例の上にあぐらをかいていては駄目なのだ。

五年二期期の衣の分野は、ミシン縫いに取り組む。

「袋作り」も手縫い（運針練習として）でなく、初めからミシンでやれば良かった。——比呂志は思う。

「僕が高校から大学にかけて、オヤジが病気で、やがて死んだ。だからオフクロの編み物やミシンで暮らしを立てていた。

僕もよく手伝った。女学生のセーラー服の襟の白い線を、僕がミシンを掛けたりもした。普通、白い平たい紐の中心にかけてるので、洗濯すると両ふちがまくれ上がつてしまう。

僕は、その三、四ミリの紐の両縁を縫った。洗濯しても白い線が崩れないので、ずい分喜ばれた……」

比呂志はそんな自慢話をした。嘘ではなかった。

使えるミシンは四人に一台しかない（これも三多摩格差なのか。十年前、十五年前とほとんど同じ状況である）。一人が縫っている間、あとの三人が遊んでしまう。

ミシン掛けで雑巾を作ることにした。タオルの手拭で雑巾を作る。ミシンを待つ間は、日本手拭か浴衣の布で台布巾を。これは手縫い、と言うより手刺しで。刺繍と同じで刺せばよい。昔「さしこ」と言う言葉があったように思う。柔道衣のあれだ。

手拭を四つ折りにして畳む。畳み方を指示すべきか。研究不足で、オーソドックス・常識的な畳み方を知らない。にもかかわらず、彼には畳み方に一つの主張があった。問題はそれを押しつけるか否かである。

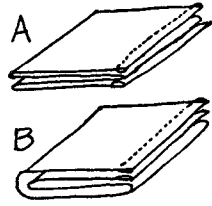
a. 自由に任せばいい（どうせ雑巾、使えればよい）

b. いろいろなやつて見る中で、子どもたちが一番良い方法を探り当てるようなやり方がいい（試行錯誤も学習の内）

c. 先達は、一番よいと思うやり方を後進に伝えるべきだ

今後、技術を伝え、技術を磨かせようとする教材は、cを貫徹しよう。比呂志はそう結論した。「どうでもいい」や「いろいろやつてごらん」でなく、「こうやれ」で行くことにする。遠山啓氏のいう「自動車教習所の教育」である。

一、畳み方はAと決める。B、その他は認めない。



その理由

① 古いタオルは中央部が弱くなったり、伸びていたりするから中に入れる

② 縁が揃えやすい

・ タオルの両端は、ふつう折り返してミシンにかけてある。中に柔らかな部分を挟む方がやりやすい。

・ Bだと、折り返した所で外側のと内側のとの間があきやすい

これは使い勝手にもかかわって来ることである。

二、縫い方（ミシンの掛け方）

① 縁を先に縫う。時計の針の逆回り

② 対角線を縫う

③ 縁に平行に、1.5〜2センチ巾で縫っていく。対角線のところを90度回す

これは参考書等を見て決めたのではない。いわば、先達としての比呂志の経験から出ているのだ。自分でやる時は、あと、目打を使って角を揃えることぐらいだ。

「もし、別のやり方でやりたい人がいたら、二枚目を、自分流でやったらいい。その方が、このやり方より有効だったなら、以後自分流で何枚でも作ればいい。初めの一枚は、僕の指示どおりやつてもらいます」

「造反有理」という言葉が喉元まで出なかったが、比呂志はそれを嚙み込んだ。言えばまた説明が要るし、子どもらを混乱させるだけだ。

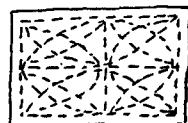
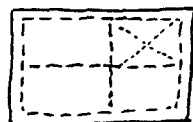
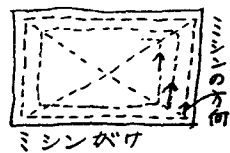
子どもたちは割合集中してミシンに取組んでいる。「どうでもいいから、自由にやってごらん」だったら、まだまごまごしている段階だろう。そうだ。家庭科だって同じなのだ。

子どもの創造性や想像力の芽を摘まないように、自由に、伸び伸びと描かせるべきだ、という考えがある。絵画の分野での話である。そういう子ども任せの絵は、いつまでたっても頭のとつぺんが平らな女の子が茶筒に帽子をかぶせたような樹木のわきで縄跳びをしている様な絵から抜け出せない。絵を描かせる時、彼はもうその点では迷わずcの考えで通している。ミシンに平行して、手刺しの台布巾に取り組む。

一、畳み方はタオルの時と同じ

二、縫い方（刺し方）の順序は、①まず縁を縫う ②十文字を加えて田の字にする ③その四つの区画を、それぞれ最低四つ割りにするくらいに縫い込む

「先生」言ってきたのは淳子である。「教室でやっちゃいけない？」咄嗟には真意を計りかねて比呂志は息を嚙む。家庭科室ではなく、学級の教室で台布巾を縫っていたというのだ。淳子の後について来ているのを見ると、いつも一緒のお団子の連中だ。——まあいいか。頭の中でそう言いながら比



呂志は首を縦に振った。

「静かに行けよ。それに、お喋りばかりしないで、仕事するんだぜ」言いながら、教師くさい、余計な一言だと比呂志は思う。わかってる、という風に手を振りながら、彼女らはそっと家庭科室を出て行った。他のグループに気付かれて、わたしたちも教室でやる、なんていうことにならないうちに、と……。

ミシンのトラブルが続く。あちらに呼ばれ、こちらに取って返し、

「せんせ、せんせ、せんせ」

「はいはい、はいはい、はいいっ」

「糸の色、混ぜていいんですか？」教室へ行っていた中の一人、橋である。刺繍じやあるまいし——頭の中で素晴らしいながら、口では「いいよ」という。本心は「勝手にしろ！」なのだ。まったく、教室へ行った連中ときたら。

「先生」今度は笠原。「真直ぐに縫わなきゃいけないの？」

「……」

「カーブっていうか。こう、曲がったように縫っても、いいですか」

「ああ、波みたいにとか……」

「波じゃないけど。いいのね」教室へもどっていく。

空腹を感じる。そろそろ終わりだ。後片付けを命じ、比呂志は教室に走る。机を持ち寄って塊を作り、橋ら五人が仕事をしていた。偵察に来たぜ——比呂志は口に出さず言う。それを感じ取ったのか

「ちゃんとやってたよ」五人の誰かが言う。

「ああ、そうらしいね」手許を見ると、台布巾はけっこう歩が行っているようだ。チャコ鉛筆で下図を書いたりして。

「終わりの挨拶は、向うでやるからね。早くおいで」

手刺しの台布巾は、橋たちの作品を中心に、いいものになり出来た。それを教室の掲示板に画鋏で止めて、彼女たち教室グループの労に報いたのである。

教室でやっていいか。色を変えていいか。カーブに縫っていいか。——ありや、ゲリラだな。比呂志は思う。枠を決めると、どこかでその枠を壊そうとする。あるいは枠の中で、換骨奪胎とまでは行かなくとも、画一主義・一律主義への抵抗を試みている。そう評価しよう、と彼は思う。

今年、十七小の二学期は学会がある。その他、児童会関係の大きな行事もある。その合間を縫って教科を進めている感じだ。そして、そのまた合間の時間を盗むように、夏休みの自由研究の論文集を作っている。

原稿を書かせる。四百字詰め横書き原稿用紙にだ。比呂志はそれに目を通し、直す。それを版下用の原稿用紙に清書させる。切り貼りして四ページ一台に組み、ファックスにかける。印刷。整本……。

作る授業かあ。——最近比呂志はふと我に返った感じでそう呟くことが多くなった。慌しく一つの仕事を終えた時の一瞬の空白の時間とか、風呂の中で。

綿の種子を播き、実から綿を取り、紡ぎ、織り機を作って布を織る。そういう実践報告に出会った時、比呂間比呂志は「よくやるね」と思う。偉いと思う。しかし心の中のどこかで、あれは特別の人のやること、といった見方をしていた。

比呂志が属する教科協では、指導要領や教科書を批判して来た。力は、てんびんの釣合いや、輪軸のように別々に教えるのではなく、力のモーメントとして扱うのがいい。氷が解けるのも、塩が解けるのも、区別できない教え方でなく、溶解は溶解として……等々の主張に基づいて研究され報告されて来た。比呂志はそれを支持して来たし、大筋で正しかったと

思っている。どちらかと言えば、現象の中から法則を導き出すとか、リング一個も象一頭も同じ《1》と抽象化することの意味を問う、数教協の教育方法に沿って歩んで来た比呂志にとって、「作る授業」は異質なものであった。しばしば否定的なニュアンスで語られた「這い回る実践」という語句を、「作る授業」に被せていた節もある。

……が、「作る授業」か。

山椒小で六年の時、同学年だった小池要さんを思い出す。六年の授業の中で、縄文式土器を焼こう、という。そう言えば実践報告を読んだことがある。興味は覚えたものの、実行するだけの気力はないままここに至っていた。それを小池さんがやろうと言う。

そして、野焼きで土器を焼き上げたのであった。

研究、と言うのは子供からすれば遠いものであろう。作ることに比べて。とすれば、作ることに熱中させるのも悪いことではない。土器作りに熱中しかつての六年生を思い出し、彼は思う。それに今の子は、抽象的なものを理解せぬまま詰め込まれ、拒否反応を起こしていると言えなくもない。とすれば「作る」ということを、授業の中に、あるいは学級生活の中に意識的に取り入れるのがよいのだろうか。「作る授業」に、進むべきか、進まざるべきか。

(小平市立小学校)

新しい家庭科を創るために

姫路サークル

乾 早 合 百

「保育」を 多角的に学ぶ

現在の形の中学技術・家庭科の男女共学がはじまって、もう六年を過ぎたというのに、なかなか共学の領域を広げられない。「保育」こそ共学で、と、心の中での思いは強いのであるが、昨年も三年生女子のみの授業を行った。一年生は共学で「食物Ⅰ」と「木工Ⅰ」をするが、二年生になると別学で、それぞれ技術・家庭の領域を

学習させる。

なぜ、共学ができないのか。それは、加古川市では一学年十クラスに近い学校が多く、私の勤務校も十一クラスある。そのために、技術と家庭科教師のベアの組み方が複雑で、他教科の教師に一部分助けられたりする部分もあり、四月には、カリキュラムや、時間割の決定に手間どる。調理・被服・木工・金工などの特別教室は一つずつしかないので、物理的条件から実習もままならない。二年生になると男子から「もう家庭科なの？」「残念やな」という声が出る。私は「もっとと家庭科したいね」と答えるしかない。私自身、三年生を担当すると、三年女子の家庭科だけで授業時間が一杯である。それで、他の学年の授業は他の教師ということになり、全年を見渡しながらの授業は実現できない状態が続いている。三年女子のみの保育の授業は目の前の生徒たちに、人間らしく生きていく上で、ぜひ知っておいてほしいことだけは、学ばせたいという目標で取り組んだ。

一、自分の生い立ち

私は四十代前半、家庭では中学生の男子二人の母であり、主婦・妻でもある。職場では進学指導担当なので、四五〇名の生徒の進路をクラス担任と共に考え、書類の準備や指導の計画を立て、実践していく立場でもあった。

夏休みの課題に「自分の生い立ち」をまとめることを出した。父母の結婚、母の妊娠、自分の誕生と今までの生い立ちを、年表、物語、イラスト風など書き方は自由。事情があつて書きにくい人は、保育に関する新聞の切り抜きを集めるか、空想物語でもいいとした。九月になると大切な写真を貼つたレポート等が続々と提出された。そのレポートを読んだから授業を始めると、なぜか私には、生徒たちの一人ひとりの目の輝きがわかり、彼女たちが、一段と成長したように感じられた。しかも一人ひとりが、まぶしくさえ思えた。

そのレポートの中から数十篇をプリントにして、生徒たちに配り、またそれについての感想を書かせた。その中のいくつかを紹介したい。

その一

「家庭科の課題に私の生い立ちをまとめるから、お母さん何か参考になるものない？」と、尋ねると、母が数冊のノートを出してきて、「これを見たらわかるわ」と、言った。そのノートの私の生れた日の所にこう書いてあつた。

〈真理^{マコト}、心待ちにしていた真理、父さんも兄さんも、私も、あなたの誕生をどれ程待っていたか。つぶらなひとみを見ると、二百八十日間の苦しみも、えらさも、出産の時の痛みもみんなふつとんでしまったの。元気な真理、私はうれしかっ

た。元気そうな声を聞いた時、力づけて下さった先生に、看護婦さんに、父さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちに、大きな声で『ありがとう』と何度も叫びながら、大つぶの涙を流してしまい、『あまり興奮しないで』と、先生になぐさめられた。真理!! 美しい気持で素直にすすくと健やかに行つておくれ。真理^{マコト}、迫れ、まことの心を大切にね。これから一緒に歩もうね。私はこの文章を何回も何回も読み、なんか感動して涙が出てきました。本当に心から私のことを大切に、そして愛してくれてると感じとれました。お母さんがそこまで私のことを思ってくれてるとは思ってもいませんでした。

その二

私がこの十五年間生きてきて思ったことは、自分一人では生きていけないということです。この「私の生い立ち」をまとめてみて、本当によかつたと思つたことは、これまでのことをふり返つて、その時その時にお世話になった人々に感謝することができたということです。人間は、励ましたり、励まされたりして生きています。そのためには、先に言つたように、一人では生きてゆけないのです。今、私の胸の中には、(一)苦労ばかりかけてすみませんでした。(二)今まで元気で育ててくれてありがとう。(三)これからよろしくお願

いします。といった三つの気持があります。これからもこの三つの気持を忘れないで生きていこうと思います。

そして、いつか両親や、お世話になった方々に恩返ししたいです。

このようなプリントを読んだ感想を書かせた。つぎはその一例である。

「私はみんなに感謝するという所まで気がつかなかった。みんなの文を読んで、私は反省しています。これからは、私が大切に育てられて今生きているのだということを思いながら、一日一日を大切に生きていって、父や母に苦労をかけないようにがんばりたいと思います。」

私の一つの目標であった、「今、自分が生きていることは、つまり生かされていることであり、そのかけがえのない命は、自分が育て、守っていくべきものである」ということが、こうした響き合いの中で、彼等なりにわかってくれたのではないかと思った。そしてこのレポートをまとめることによって、生徒自身が、母と子、父と子、父母の生き方などについて、教科書、テスト、点数などを違った世界で、それぞれが何かをおぼろげながらつかめたのではないかと思う。

二、保育と被服Ⅲ

「保育」の中にある幼児の被服という内容は、被服Ⅲの教材であるパジャマの製作をかねて「三歳児のパジャマ」を製作した。これは、裁つ時に広い場所をとらず、全てミニ版ですむため扱いやすく、時間数も少なくすむ。もちろん、布地代も半額で経済的にも負担が軽い。自分のパジャマを縫う方が意欲が出るかなという不安も持ちながら実施した。結果としては、出来上がりがとてもかわいい。大人のパジャマと構成は同じなので、製作上のポイントや技術の内容は同じであるので教科書にそってスムーズにいった。作品については、「近所の○○ちゃんにあげる」「いとこが二歳だから、もうあげる」と約束した」「人にあげるのは恥ずかしいので、自分の



子供の時までおいときます」など、適当な処理ができた。いつも被服製作は生徒の能力差が大きく進捗調整に困るのだが、全員が時間内完成へとこぎつけた。今回は市販のパターン型紙を使用した。今回は、姫路のファッション専門学校からアドバイスが受けられるよう手配している。それを参考にして簡単に、生徒自身が工夫できる型紙や縫い方を取り入れた。

三、性を考える

こうしているうちにA子とかかわることになる。十一月頃に「先生、私妊娠したかもわからへん、お医者へついて行ってくれる？」と、話しかけてきた。「相手は？」「Bちゃん、二十歳、働いてるねん」「そんなんは相手にちゃんと責任をとらせなあかん」と、話し合った。避妊もしていると話し、B夫といると、とても楽しいから、迎えにくるとつい行くのだと言う。初めは町でナンパされたが、つき合って数ヶ月がすぎている。A子の家庭は祖母と、姉二人、A子の四人は家に、父母は近くだが別のアパートに住んでいる。経済的にはゆとりがある。父は厳格すぎ暴力もふるうが、母は甘い。A子は母をごまかすことはうまい。その場限りの嘘を平気で言うため、母から父へ真実が伝わっていない。こういうA子と話していると私はたかが十五歳でと思うと腹が立つ

方、A子の心の底に一杯たまっている何とも言えぬ寂しさがひしひしとわかり、抱きしめてやりたいと思ったりもした。彼女がB夫という時は、私からみれば、本物の愛情とは思えないが、本当に暖かさや安らぎを感じていらしい。

数日して、「大丈夫だった」とニコリ笑って○印を合図する。四月にはそのA子も高校へ進学していった。卒業する時A子は「B夫とは結婚すると約束した。高校はちゃんと卒業する」と言ったのだが……。こんなA子を目の前にして何とか彼女たちが自分の性、つまり、自分自身を大切に生きてくれるように祈りたかった。そして、今、役立つ性教育を、今、やらねばという気持ちにかり立てられ、卒業を控えたせわしい時期に取り組んだ。生徒指導担当、養護教諭と小さな情報でも緊密に交換する。A子のみならず、他にもCまでいつているらしい生徒がいることをキャッチする。どうすればいいのだろうか。

16mm映画「赤ちゃん誕生」を映写。生徒たちは出産シーンに最も感動した様子。

「感動した。私もあんなふうになんか生まれてきたかと思うと、お母さんはすごいなあと思った」「出産ということは、とても感動的なことだと思う。それだけに自分の体は大切にしないとだめだと思った」等の感想がでてきた。

また、「性Ⅱ生」というビデオ（中高生向き）が市販されて

いるということを新聞で知り、すぐに購入して視聴させた。

中高生にとってCは許されるか、高一で妊娠・中絶した女性の話。十七歳で母となり子育てをしている女性の話などが出てくる。しかも「やりたいだけだ」という男子の本音がトピックの中で現れる。そのビデオを見たあと話し合っただけで感想を書かせてみると、

「女の子は、わりとメルヘンチックで、マンガとかに出てくる主人公に憧れているんだと思う。で、男の子が求めてきたりしたらその男の子にげんめつすると思う。やっぱりそういうことをして結果があらわれるのが女の子なんだから、男の子はちゃんとあとのことを考えて女の子を大切にしたい」「好きだからするなんていうことを考えずに、好きだからこそ大切にすることって考えてほしい」

「私は男性と女性の間ではずいぶん食い違いがあるなと思います。確かに性について人任せな態度ではないかと思うし、かといって自分一人だけの考え方による一人よがりになってもいけないと思います。まだ私たちは体格のいいだけの子どもだから、性に関しての知識など、もっと深めていかなければいけないと思います」

「男子こそこの教育は必要だ。女子だけにやっても、男子に思いやりがないと、この世は闇だ」

等、意外に正確に理解し、真剣にとらえていた。しかし、現

実の中学生をとりまく性情報は、氾濫していて、望まなくても、目にふれる。しかも、卑わいであって、裸を売り物にし、SEXをしないと損するといわんばかりに、雑誌や漫画で、これでもか、これでもかと刺激する。テレホンクラブのような形まで盛んになり、現実に加古川市で市内の中学生が被害に合い、相手の男性が逮捕されるという事件が報道された。

早速、私の学校でもアンケートをとってみると、一年女子では十八%、二年生では十%の者が、テレホンクラブに電話している。そのうちの数名が、「しつこく電話をかけてこられた」「家まで来た」と答えている。現代の中学の心の喝き、そういう状況を作り出している大人の心の貧しさ、寂しさ、思いやりのなさなど、冷たい世の中を悲しく思うが、落ちこんではいけない。生徒たちに必要な正しい情報を与えなければならぬと考え、プリント（略）を配布した。私はこのような子供の性の世界を知らないのは、親であり、教師であると思う。知ろうとせず「寝た子を起こすな」とつくろってすむ時代は遠い昔のことである。正しい知識をタイミミングよく、あるがままに知らせることが必要である。時期的にもエイズがマスコミで報道され、エイズについても、どのような経路で、なぜ感染するのか、その症状等も新聞記事を参考にしながら、リアルに話した。また『さらば悲しみの性』（河野美代子著）を所々読んで聞かせ、子宮外妊娠や性病、避妊

などについてもふれた。

人生にとって失敗は避けられない場合もあるが、女性として被害者にはできるだけならぬように、よく考える人に育ってほしい。本当に人を愛するということは、どうすることなのか。愛するとき、相手を強制したり、無理じいすることが許されるのだろうか。女性の性がなぜお金になるのだろうかなど、教師である私にも簡単には答えられず、自分の問題としても考えなければならぬことが次々と出てくる。産む性を持った女性と喫煙やアルコールの関係も触れなければならない。性とは本能から湧き出る美しいものであるが、責任をとれさえすれば何をしてもいいことにはならない。性衝動をコントロールすることも、人間としての理性や、忍耐とかかわる。とても今の私にはこなせる力はないが、生徒がそうしたことに直面した時、生と性の大切さが、ふと心の隅にうかんでくるような灯の火種を与えてやりたい。これは教科書にはない人間の生き方にかかわる私自身に対する問いかけでもある。そうなると、女子のみの保育領域は片手落ちであり、男女が共に学び、相手を理解し、思いやり、助け合うことに向かわせるステップとして、家庭科のすべての領域が共学でなければならぬことになる。今後も、私自身がより大きく成長するべく、努力をつづけたいと思う。

(加古川市立浜の宮中学校)



編集室からあなたに

◆'87夏季フォーラム成功させよう！

さまざまな研究団体の夏の催し案内が次々に出されます。他山の石に、とそれを読んで、Weはひとあじ違うな、と思うのは、ひとりよがりでしょうか？

肩いからせることなく、ホンネで話し合いながら、深い交わりをつくっていく。まさに「ゆたかさを紡ぐ」のです。

初参加の方をいっそう歓迎して、その方が次には実行委員になる、Weの読者会を地域に作ってしまう。そんなエネルギーが湧き出るのは。巻末の折り込みご案内をご一読の上、お友達を誘って、早目にお申し込み下さい。大人も子ども一緒に、キャンプファイアーを囲むひとときを、この夏一番の思い出に！

◆好評です。『家庭科新時代』

「これからの家庭科を考える上での貴重な提言」「それらの実践は、点数主義に支配された今の教育に何が欠けているかをよく示している」（朝日新聞評）

日本図書館協会選定図書にもなりました。まだお読みになっていない方いらっしゃいますか？ 一日も早くあなたの座右に。

◆ご投稿を待っています

10月号－機会均等法、何が変わった？

11月号－「家族」どう変わる、どう変える

12月号－国際居住年って、何だった？

給食、制服…発言欄にぎやかでした。生活の中から生まれ、生活の中に溶け込む思想を、私たちの力で築くために、自分の思いを書くことから始めてみましょう。記事への共感や反論、建設的な意見もどしどしお寄せ下さい。

Weを、名前どおりWeにするために。

—高等学校では—

新しい家庭科を創るために

梶原 公子

性別分業を考える

—女性の仕事と育児—

(その1)

☆性別分業と新家庭科時代

We'86年10月号の特集「家庭科に家庭科教師に贈る言葉」の中で、「共学の家庭科は、性別分業のことを教材に!」というメッセージが幾つか目についた。私も同感だ。家庭科の必修は性別分業の否定と表裏を成している。そしてこのことは「理念をめぐる」ことであ

り、同号の座談会で、和田典子さんも必修運動を「高度な運動」と言っておられる。

教材も、物や形としてははっきりしている事柄を扱う時はやり易いが、理念や考え方を扱うのは難しい。一方家庭科教員の間でも、難しいリクツをやるよりも、具体的な実習を多くやった方が生徒も喜ぶし、役に立つとする考え方が根強い。

しかし、果たしてそうなのだろうか。高校生位の年代の生徒たちは、本質的な事を見抜き、それを理路整然と組み立ててゆくことに喜びを感じ、生きるエネルギーを得てゆくものなのだと思う。

新家庭科の時代は、それに応えることがひとつの課題でもあると思う。

☆今も根強い性別分業論

性別分業については、「栄養のバランスのとれた食事とは」だとか、「合成洗剤の害とは」などのように、生活の中から取り出して論じる場合と違い、生活そのものである。更に、日本では諸外国よりもこの意識が強いがゆえに、空気のようなものになっているところがある。

また、このように書いている私自身にも未解決な問題と云ってよい。私たち夫婦は、双方教員の共働きで、必要上夫も家事・育児をやる。けれど彼は、時間的無制限を誇る部活動

に邁進し、学校と世間は彼に惜しみない讃辞を送っている。これは男の生きがい仕事、とする社会のためのものである。

一方、夫の家庭にいる絶対時間が短ければ短いほど、当然妻が家事をこなさねばならない。私は部活動そのものを否定する者ではないが、勝つことだけを至上とし、甲子園やインターハイだけを至上とする部活動のあり方には疑問を抱く。

話がそれてしまったが、昨年PTAの役員を一緒にやっていたKさん。彼女は、二年程前まで共働きをしていたと言う。彼女が仕事を面白く思い、一生懸命に打ち込んでいうち、家の中が殺伐として来るのを感じたそうだ。ある時、フト気がつくと金魚鉢に飼っていた金魚が、死んで浮いていた。彼女は、ハッとして金魚にエサもやれない程家庭にゆとりがなくなっていたのだ、今度は子どもに被害が来るのでは……ときっぱり仕事をやめた、と言う。

今、PTA活動などで遅くなり、夫が愚痴をこぼすと、こっそり取っておいた折り込みチラシを出して、「仕事を始めようかな」とやり出す。夫は慌てて愚痴を引っこめると言う。共働きは、夫にとってもキツイ生活が再現することを示しているからだ……と。

毎年新たに授業を持つ生徒たちに、私は「家庭科は何のために学ぶのだと思いますか」と聞く。

するとほとんどが「将来主婦になった時一通りのこと（家

事・育児）ができるようにするため」と答える。

Kさんのように女性には家族のために暖かい家庭を用意するのがつとめという思いは強い。また生徒たちのように、女性には結婚し家事・育児をこなすもの、というのはいまだに通念となっているように思う。

世は既婚女性が働くのは当然の時代であり、現に高校生の七割以上の母親が働いている。けれど主婦が仕事と家事・育児をやり、夫に家事をやらせるなんて……という具合である。

周囲を見回すとこのような状況であるが、性別分業を教材にしてどのような授業をしたらよいか。やはり、家族や家庭の分野で、家族史や女性史を織り混ぜながらすすめるのが、適切だろうか。私はこの問題を仕事と育児ととらえ、保育の最後の部分で考えてゆきたいと思う。配当時間三〜四時間。

☆仕事と家事、育児は二者択一か

金森トシエ・北村節子著『専業主婦の消える日―男女共生の時代』では次のように述べられている。

「主婦業の中身は、昔と大きく変わり、主婦の多くはよろこびも自信も誇りも失いつつあるのが実情ではないか。いまのところ手のかかる育児と老人介護が、サービス業の採算のりにくく、家庭に残されている。（中略）

にもかかわらずなぜ主婦業が現在もなお、女性の社会参加

の大きな制約要因であり続けるのだろうか。それは主婦『業』の問題というより、主婦業に対する主婦の思いこみや固定観念、つまり主婦『意識』の方に問題があるのではないだろうか。」

そして「つくられた性別分業の歴史」を次のように解説している。

共働きは長い間民衆の夫婦のありようであり、家族ぐるみで働いて生計を成り立たせてきたこと。それが明治維新になり、「富国強兵」のスローガンのもとに、「男は外・女は内」の性別分業が徹底強化された……。そして同著は次のように述べる。

「第一の富国強兵時代との大きな違いは、第二のそれは一億総サラリーマン時代とともに大量の専業主婦を発生させ、しかも既に述べたように彼女たちが主婦業としての生き方を幸せに思い、満足し、主婦業という性別役割を肯定・支持したことにあった。」

しかし、国際的にみて異常な強さを示す日本女性の主婦意識の強さが、一世紀にわたる日本の大国路線の中で多分にたくらまれ、つくられたものであることを、主婦自身が知る必要があるのではないだろうか。(中略)

職業と家庭を二者択一的にとらえて、是か非か論じる段階はもう『卒業』してよいのではないだろうか。」

引用が長くなってしまったが、仕事か家庭かを論ずるのではなく、これを両立する方向―男女共生の方向―を示している点に注目したい。また日本が諸外国よりも性別分業の意識が根強いのは、国民性の問題とか、わが国に適しているからではなく、そのようにたくらまれたからだという点についても注意したい。

仕事と育児を二者択一でなく両立させる方向としてとらえ、授業をすすめてみたいと思う。

☆生徒の実態はどうか

授業に入る前、三年生90名に「将来職業を持つことに關しどのように考えるか」を調べてみる。結果は大雑把にまとめると次のようである。

- a. 結婚し、子供ができたら職業を辞める 6%
- b. 子供ができてみずと職業を続ける 37%
- c. 子供ができたら職業をやめ、大きくな 57%

授業の初めに、この結果を示し、これから授業で女性の仕事と育児に關する色々な問題を考えてゆこうと話す。

最も身近な彼女たちの両親はどうだろうか。何人かの生徒に両親の場合を聞いてみる。

共働き家庭が多いが、父親が家事をやる家とやらない家は

半々位である。やる場合は、風呂を沸かすとかフトンをあげるとかい程度。

商店のような自営業では、母親も家業に従事するが、父親は家事は一切しないという家庭が多い。

母親が専業主婦の場合は当然性別分業が明確になっている。生徒たちは、自分の家庭を客観的に観察し、批判もしている。

「私の父は、母が外出する時、どうしても必要な場合でも『家のことはどうするのだ』ととても不機嫌になる」 Tさん
「母に言わせれば、女は男よりもいつも一段下にいなければならぬ。それが頭の良い女だと言います。保育で女性の自立について勉強し強く感じました。男だから、女だからと育てられた男は、女をあごで使うような気がします」 Hさん
今まで家事・育児は妻の役目、と当然のことのように思っていた生徒は多い。

「保育を学ばなかったら、結婚と同時に仕事をやめ、専業主婦になり、子供に紙おむつをさせ、TVで子守をさせる……こんな女性になっていたかも知れません」 Nさん

ここで副読本「たしかな青春の日々を」(実教出版)に示されている「夫は外ではたらし、妻は家庭を守る」という考え方に対する意識調査(日・フィリピン・米・スウェーデン・西独・英の六か国比較)をみる(図1)。これにより、日

本は「賛成・どちらかといえば賛成」が七割を越え、六か国中最も高い。いわゆる先進国は、いずれも三割かそれより少ないのに。

☆性別分業と経済的・精神的自立

さて、次に副読本には、次の文が示されている。

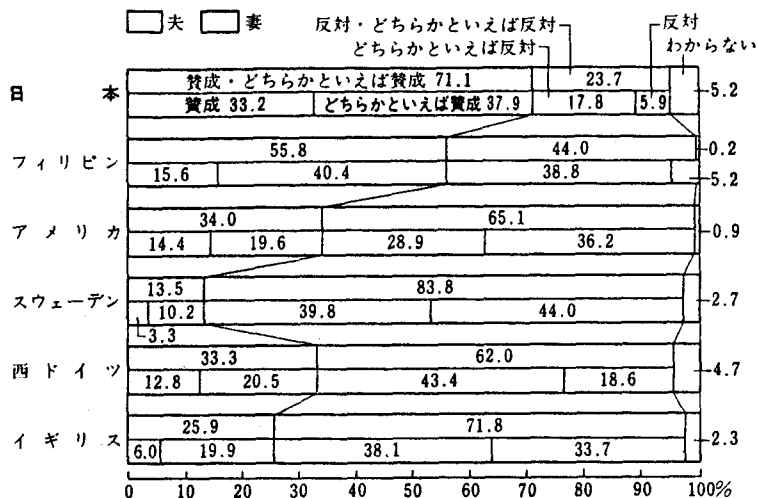
『男は外で働き、女は家庭を守る』この考え方は結局、女性を男性に隷属させ、こまごました家事仕事に追いこんで人間としての発展の芽を、つまみとってしまふことになりかねません』

なぜ、性別分業の考え方は、女性を男性に隷属させるのだろうか。いや、その前に「隷属」という語自体、生徒にとつて耳慣れないのだ。

歴史などで、封建時代には、大名と武士、親方と徒弟、地主と小作人の関係のような主従関係のあったことは知っている。しかし、戦後の豊かな時代に育った彼女たちは、重苦しい家制度の実態は知らない。

家長が経済生活を支え、妻は収入がないので、全面的に夫の働きに依存していた。経済的な施与者と享受者の間には、経済力という首根っこを押さえることにより、家のしきたりも、規律、道徳、思想、教育に到るまでの決定権を持ち、妻はそれに隷属してきた。

図1 「夫は外ではたらき、妻は家庭を守る」という考え方に対する意識 (単位 %)



☆結婚後の幸福度

二年前世を去った私の祖母も、どんな些細な事も夫に従っていたのを思い出す。薬を飲む時の水を用意する、電気毛布にスイッチを入れる。新聞や灰皿を用意する……。

今、家制度という枠はずされた。マイホーム主義と共に幸せな家庭が築かれていると思われる。しかし主婦業そのものは依然として経済的自立は保障しない。生徒は、徐々に経済的自立が何を示すのかに気づく。

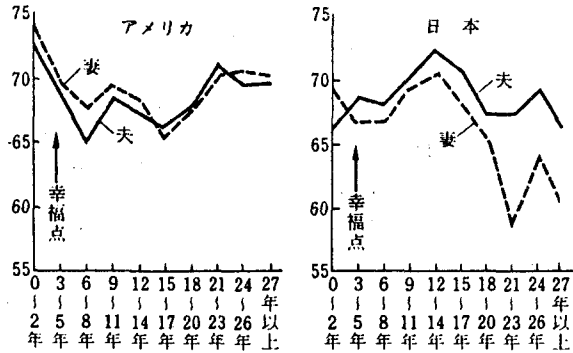
更に副読本には、「結婚経過年数による幸福度の変化」(牛島義友「家族関係の心理学」)が示している。これは、60項目に及ぶ事柄に関し、夫婦の意見の一致度から表した日米比較である(図2)。

日本の場合、結婚当初だけ、妻の幸福度が高いけれど、その後27年間、幸福度は常に夫の方が高くなっている。

「よく『結婚は女の幸せ』と言われるけれど、このグラフでみる限り、『結婚は男の幸せ』と言った方が適切ではないかな」

と言うと生徒も苦笑する。米国の夫婦の幸福度は、常にかなり一致しているのに対象的なのだが、ここにも性別分業が反映しているのではないか。つまり、男は外、女は内とその分担をはっきり決めることにより、家庭内でもひとつの事を一

図2 結婚経過年数による幸福度の変化



(牛島義友「家族関係の心理」による)

表1 生きがいに対する調査 (20~49歳)

	女 性	男 性
もっている	69 %	67 %
生きがいの内容	子ども	19
	家庭・家族	10
	自分の職業	29
	個人的趣味	11
	夫 (妻)	3
	以下省略	
もっていない	31	33

(総理府「婦人に関する意識調査」による)

表1をみると、女性の生きがいのうち、「子供」とする者が36%を占め、非常に高くなっているのとも関係する。

「子はかすがい」という夫婦のつながりの現実と、「愛があるから」と考える高校生。彼女たちもこのギャップに気づき始める。

「結婚の夢がこわれた」「現実をみせつけられた」との感想を述べる生徒が多かったが、それではどのように考えたらよいか。生徒の中には、「自立」という文字が少しずつ大きくなってきているように思う。

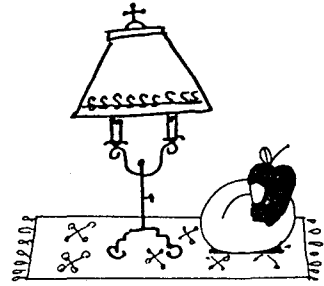
(静岡県立大仁高等学校)

緒にやるチャンスが少なくなり、夫婦の意見は当然開きが出てしまうのではないか。

もう一つ特徴のある事は、日本の場合夫婦共、幸福度が子供の成長・自立と平行して、浮き沈みしていることだ。妻は子供の結婚期に最も落ちこみ、孫出生期で上昇する。

「生きがいに対する調査」(総理府「婦人に関する意識調査」)

Weの読者会だより



〈We拡大版の会〉

◆四月二十一日、府立高校家庭科研究会に参加された半田さんをお招きして、午後六時より、上本町の「なにわ会館」にて会を持ちました。家庭科の男女共修をすすめる会、研究会参加の方々、フリースペース、婦人民主クラブ……等から三十一名の参加がありました。

まずは自己紹介から始め、次に半田さんから男女共修をすすめる会や、女性民教審の活動報告等をしていただきました。その後の自由な話し合いの中では、

○性教育に、男女の性別役割分担に加担するような、生まれながらの男女の違いを認める学説が深く浸透していることについて

同じく、○栄養必要所要量に男女差（女性が少なくてよいようになっている）があるの

は個人差にすぎだということなど

○体育時のゼッケンについて、その是非と、そのゼッケンを家庭科の時間に縫いつけさせることへの疑問。制服、校則等から管理教育について。

今思い出してみても、たくさんのおもしろい話がありました。半田さんの娘さんの話も忘れられない。「若い人たちは、自分たちとは違った文化を育てていくんだと思う」と言われた。本当にそうだなあと思った。フリースペースの若い人たちが話すのを聞いていてもそう思う。

少し前に77歳の飯田しづえさんの話を聞く会に参加して、今まで知らなかったことを知り、新たな感動を受けた。私たちは飯田さんたちとは別の新しいものを創っているのだろうか。次回は、九月十二日（土）二時から、なにわ会館の予定。

（北川好美）

〈We東久留米の会〉

◆五月十一日滝山団地東集会所で――。

ともかくにも、こうしてWe東久留米の会は二回目を無事むかえるに至りました。「準公選による身近な教育委員会の実現を」の小冊子を読み合わせることははじめたもの

の疑問点続出で、なかなか前に進みません。

（この読み合わせ 久しく忘れていた学生時代を思い出し緊張！ 自分の読んだ箇所は全く理解されていない！ 私だけかしら？）

「教育委員会って本当に必要なの？」「必・不必論を説く前に教育委員会のしくみや、権限・内容を知るべきじゃない？」「教育委員会ってそんなに圧力あるの？」等々……。学習する内容は実に豊富で、結局、教育委員会の傍聴にできるだけ出かけ皆さんに報告することになりました。又、教育基本法、憲法の歴史を、瀬戸井さんが追ってレポートして下さるとのことです。

五月号の「情報化社会の光と影」から三つのテーマを選び、感想意見を交換しました。「夫は、ソフトエンジニアだが、今のコンピュータは完成度が低く、まだまだデータ不足で学校教育に取り入れるには難点が多い。が、教科によっては価値があると」と大岩さん。出し惜しんだ話があるとかで次回は是非伺いましょう。

次回は六月八日（月）am 10～pm 1時
場所 東久留米市滝山団地東集会所
連絡先 西内みなみ ☎〇四二四（七三）

〇九〇一 （畠山 節子）

森 幸枝著 『男女で学ぶ新しい家庭科』 を読んで

日本女子大学家政経済学科 森 本 理 恵

森氏が教育者として常に念頭に置いたのは「高校三原則（地域制・総合制・男女共学制）を守ること」である。このことは本の随所にうかがえた。実際の家庭科は第三の点で明らかにこの原則に反している。生きることと男女の性差はなく両者とも同じ「人間」である。男女で学ぶことで相手を知り、自分を見直し、さらに人間を理解する。この本で、それがいかに大切なことかを痛感した。

しかし、現在の社会では人間が人間として生活することの重要性が忘れられている。家庭科はそれを考えさせることが出来る教科でありながら、女子のみ履修という全く歪んだ形態を取っている。その社会を変えるには、まず己れを変えなければいけないという文中の言葉も印象的だった。理想を述べるのではなく、出来ること（自分を変えること）から手掛けて外部に向けて働きかけ、理想（社会を変える）を現実にする。この大変な仕事を努力を重ねながら実際に成し遂げた森氏は偉大だと思う。

彼女がそこまで頑張れたのは家庭科の持つ大きさを認識し、この教科に対して大きな期待をしていたためだろう。生徒自身が、人間が生活する上で常に関わっている事柄に目を向け疑問を向け疑問を持つ。それを見て聞いて調べて解決し、身につける。次に自分のことにとどめないで外部に働きかける。このような学習が「三原則」を守ることにつながる。

本の中に水俣病患者のことが少し出てくる。人間が、経済を成長させることだけに懸命になり、生活を考えなかったために自らを破壊した最も顕著な例である。現在はずっと目立たない程度で、もつと深刻に人間破壊が進んでいる。社会科で公害について授業をした場合、それは他人事ですんでしまふ。水俣病という公害で苦しんでいる人がいますと。しかし同じことを家庭科で取り上げると自分に関わる問題としての授業が出来る。「害のある魚を食べて病気が発生したので。私たちの食べる魚も同じだったらどうしますか？」

この教科は、教師の力を借りながらもいかに生徒が問題意識を持ち取り組めるかがポイントとなる。他教科は教わるのとがほとんどで、主体は教師である。しかし、家庭科は生活

している生徒自身が主体であり、教師もそのうちの一人なのだ。上から知識を押しつけるのではなく、生徒と共に学ぶ姿勢が必要である。学習全般に言えることだが人間は自発的にやらないと身につかない。やる気をいかに起こさせるかが教師の役割となる。身近な問題として、認識させ、社会的に広げさせる。

今まで多くの人が行ってきた「スカートを縫う」「グラタンを作る」だけの授業ではためなのである。二年程前に私が教職課程をとっていると話す友人は「花嫁修業だね」と即座に言った。反論しなければと思いつながらそう出来なかった自分を情けないとばかり考えていたが、広く考えると家庭科が実技のみに走った結果、一般にこの考えが定着したのではないか。今回模擬授業を体験して、実技を伴わない授業がいかに難しいかを痛感した。しかし、同時に大変広い分野の学習が出来ること、あまり重視されてなかった経済の分野の比重が高まりつつあることを感じた。

模擬授業では私が高校で受けた様な物の説明だけの授業はなく、どれも生活に密着しており、自分を振り返られる内容だった。半年間教育法の講義を受けて、学生の内側に何らかの変化があったからだと思う。今まで受ける立場だった学生が教える側に回った後の授業では、私語がほとんどなく、背筋を伸ばして講義を聞く人が実に多かった。「自分がやる」

ということとはこれ程同じ人を変化させてしまうものかと驚いた。

日本は高度成長によって物が大変豊かになった反面、心は実に貧しい。数字だけにとらわれる教育。入試科目でないからと軽視される家庭科。まだまだ「良妻賢母」を育てる授業とカン違いしている社会。それを変えるのは私たちひとりひとりである。先生が教育法の講義で私たちの目を開いて下さった様に、今度は私たちが周りの目を開かせる努力をしなければならぬ。

先程水俣病の事に触れたが、私は小一三の三年間を水俣市で過ごした人間である。この三年間に私が公害の恐ろしさを肌身で感じたのは貴重な体験である。家庭科の授業にしろ、公害にしろ、歪んだ社会の問題に気付いた人間はまだ気付かない人間に問題提起する義務がある。家庭科は学校のカリキュラムの中でそれが出来る貴重な授業だ。人間が人間として生活することがどんなに大切で、しかしどんなに困難なのか。それを改善していくのは社会に存在している、ほかならぬ私たちなのだということを考えていきたい。

家庭科は、現在この様な社会だからこそ、見直されつつあるし、積極的に見直さなければいけない教科である。私もその見直しの一端を担える様に努力していくつもりだ。今はまだまだ力不足だが、今後頑張りたい。

(4) 「人間の性と育ち」を学ぶ授業(2)

女と男の関係を考える会回

先月号では「性と社会」についての授業の報告をした。今月号では「産む性、産まない性と性行動」のテーマの授業を報告したい。

性心理

最初に生徒に、スライド「男女交際（女子の性心理、男子の性心理）」北沢杏子脚本、アーニ出版を視聴させた。このスライドでは、まず男女生徒の、いわゆる社会通念に毒された男意識、女意識が語られる。それに対して、性衝動や、男女の性意識の差、処女性、買春、女らしさ、女性観等について言及し、人間の性行動はその人間価値観を写し出す鏡であり、どのような性行動をとるかは、自分自身が慎重に決めなければならないと、説得力ある語り口で述べている。

動物たちは発情期に性行動をおこし、それは必ず妊娠・出産につ

ながるようになっていく。それに対して人間は、性の進化のプロセスの中で発情期を失い、言い換えれば、いつでも性衝動を感じることができるようになった。それに伴い、性衝動を感じてもそれを即座に行動に移すべきでないというルールを作ってきた。性欲の自律化が人間の集団を守り、性や愛の文化を作りあげてきたことを説明し、「性とは何か」を考えさせる授業を展開した。

生徒たちは、「今のところ進化の頂点に達した人間だけが種族保存という本能にとらわれずにできることなのですから、それをお金のためにというのは許せません」「婚姻史をみると、女は子を産む道具といわれてきましたが、今はなんだか女性が自ら道具っていうか、そうしたものになっているようにみえて仕方ありません」等、現在の性風俗に批判的な目を向けるようになった。

乳幼児死亡率がきわめて低く、平均寿命が著しく伸びた現在の私たちにあって、生殖・種族保存のための性交はごくわずかの比重でしかなくなり、むしろ出産をどうコントロールするかのほうが大きな課題となっている。避妊しない性交は望むと望まざるにかかわらず、妊娠、出産、哺育へとつながる（可能性がある）。その適切な選択がなされない性交は、望まぬ出産あるいは人工妊娠中絶という不本意な結果につながる。そうであってはならない。だからこそ人間が人間である

ために避妊は大変重要な意味をもつ。(87年二・三月号参照)

性交は様々な人間関係の中で一番親密な行為であり、相手の人柄・生きざま、二人の関係によって大きな幸福にもなり、みじめにもなり得る。性行為をもつには人をみる知性や愛しみあう感性が必要であり、生理的成熟だけでなく、精神的、社会的にも成熟していることが必要である。性行為の問題は身体や年齢といったことより、心の貧しさ、幼さ、エゴイズムからきている。一方の性からの強引な要求や暴力で結ばれる性交、金銭を媒介とした性交が現実社会には往往にしてみられる。「性の解放」とは、相手かまわず自己中心的に性交することでも、性を商品化する自由でもない。「性の解放」は、男女の平等、相互の人格の尊重の上に存在しうるものである。そこで問われることは、両者が対等な形で出会えたのか、避妊や妊娠について語りあえる関係の中で結ばれた性関係であったのかどうかである。

新聞の投稿欄の若者の性交観を教材にして性交についての授業をすすめたが、生徒にとって大変興味深く、懸命に考える様子がみられ、多くの真剣な感想が寄せられた。

「人間は他の動物のように本能だけで行動してしまうのをおさえることができます。だからこそただ単に子孫を増やすということの他に、もっともっと精神的な結びつきを手に入れることができたわけです。が良い面だけを手に入れることが

どれだけむずかしいことなのかこの学習でわかりました。性交をもつことで幸福になる半面、みじめになることもあるのですから」「私は今まで性交というものをいやらしいものとか不潔なものだときめつけてきました。でも授業をきいていたりノートをみせたりして、初めてそういうきめつけた考えだけでなく「すばらしいもの」と考えることができました。性交を行いたくなるのも、人間がそれだけ成長したということだし、そして性交を行いたい相手ができるということも本当にうれしいことです。でも、みじめになる性交のこと

避妊

人間が妊娠を自律的に行うことを手に入れるまでには長い歴史があった。非科学的で危険な「避妊」行為や「中絶」行為、そしてえい児殺し……。女性には悲惨な「性」を背負ってきた。人間も動物と同様に、性Ⅱ生殖でしかなかったのだ。

避妊を「罪」とする中世カトリック思想や、「人口論」の観点で避妊をとり上げようとする「男の論理」。そんな中で女性解放運動としての「避妊」は、アメリカのサンガー夫人によって声が発せられ、世界中の女性が呼応していった。今日、女性の性周期や妊娠成立のしくみが解明され、「避妊」を私たち自身の手に入れることができるようになった。これは、長い間主体的に性を選びとってこれなかった女性にと

って大変な重みをもつ。まだまだ100%完全で安全な避妊方法
はできていないが、男女双方が対等に出会い、両者で避妊を
選びとれる関係の中でこそ、いいセックス、いい女と男の関
係が創造されるのだ。

「避妊の知識をもたせることが軽はずみな行動へのきつかけ
となる」といういい方をされることがあるが、これは誤りで
ある。人間にとつての性交の意味を再度確認する中で、避妊
の意味をしつかりおさえていけば。

「妊娠の危険があるから性交はいけないといわれれば、避妊
さえしていればよいように聞こえる。そうではないのだ」「充
分な知識を習得しなければならぬことの重要さを知りまし
た。これは女性側だけが知っても意味のないことで、あくま
でも「二人で」協力しあう上での問題だということもわかり
ました」と生徒たちは避妊の重要性を理解していった。

人工妊娠中絶

避妊が「罪悪」だとされていたころでも、実際には中絶や
えい児殺しにより子供の数が調節されていた。中絶という手
術が、母体への影響はもちろん、胎児の生命を絶つことであ
り、安易に行われていいはずはない。中絶件数は、'80年には
59万8千であったのが'85年には55万に減少しているが、未成
年の件数は1万9千(3.2%)から、2万8千(5.1%)へと増え
つつけている。また既婚女性の半数が中絶の経験者であると

いわれ、現実の生活の重さを感じずにはいられない。私たち
は「中絶という結果としての行為」のみに注目してはならな
い。その結果に至るまでのプロセス、つまり性交という重要
な人間関係を結ぶうえで、二人が対等な形で出会っていたの
かということこそが問題である。100%完全な避妊法を、私た
ちは手に入れている以上、中絶はその最後の選択肢として
残しておく必要がある。手術の時期、方法、安全性について
の正確な具体的知識は伝えるが、決して、危険だ、中絶した
女性はや人を犯したと、おどすようなことはしてはいけない
(世間のこのような風潮があるからこそ)と強く感じた。中絶
をめぐる男女の人間関係に起きる変化に言及し、よりよい
男女の関係の創造に向けて考えさせたいと思った。

「中絶はもともと女の人の体を守るためのもののなのに、今日
では男の人の都合で用いられ、逆に女の人の体も心も深く傷
つけているのが現状ではないでしょうか」という感想に、私
は少なからず感激してしまった。多くの生徒が私の意に反し
て、中絶の悲惨さを書いている中で、そのこともふまえた上
でこのように感じとってくれたことをとてもうれしく思うと
同時に、「ホントにね——」とため息をついた。

その他にも「今まで『中絶をした人はやましいことをして
遊ぶから悪いんだ』と思ってた考えはちがっていた」「避妊
のことを頭において性交しても妊娠することがあります。や

つぱり妊娠・出産にはそれなりの準備、そして何よりも大切なのは気持ち……など、いっぱい必要なものがあります。そのようなものがまだないのに妊娠してしまったら、どうしても中絶しなければならいってことや、その時の状態、気持ちがよくわかりました」等と述べている。

おわりに

この授業のあと『妊娠・出産』では「どんなお産を選ぶのか、それは女性自身が決めることなのだ」と、『母性と父性』では、「母性も父性も学びとるものである」「家族よりも企業を優先させる現在の社会体制では、父性を発揮することがますます困難になってきている」と、『発達の原理』では「人間は育てる人の文化の程度によってしか育たない社会的動物である」ということを伝え、この「人間の性と育ち」の授業を終わった。

「この三学期の家庭科の授業で最初はとてもゆうつだったけど、一つ一つを先生の話できく中でたくさん『すばらしさ』というものを感じました。異性と出会い、性交をもち、妊娠し、出産、そして子育てまでいくら（断片的な）知識で知っていてもだめなんだということや、もともと自分の気持ち大切に、それなりの考え、心が必要であること……今まで保健の授業とか雑誌とかで知ったこととは全然別のこととが知れてうれしくて仕方ありません」

「このノートを書き出してから、もう三ヶ月にもなるんですね。この三ヶ月の授業とても有意義だったとおもいます。ふだんは勉強やクラブに追われて何も考えていなかったけど、この宿題も手伝って、男女平等だとか何やかやについてまじめに考えることができました。けれどもしつこく言いますけど、こんな授業をどうして男の子にはしないんですか。いくら女の子が『これが本当のあり方よ』といってみたところで、そういう女の子は『生意気』『かわいげがない』といわれ、女の子たちはそれがいやでやっぱ元のかわいこブリッ子にもどってしまったんじゃないかと思えます。私は男女の対等な関係などについてしっかり話し合える人をさがします。そして私自身は自分の意見をちゃんと伝えて、そして相手の意見を客観的にきくことのできる人間になりたいと思います」

この授業でも、やっぱり最後は、家庭科の男女共学のことにとどりついてしまった。目下、女子のみにこの授業を語ってきたことの「罪」にさいなまされている私です。一方では、昨年度までの授業では「性交」ということばさえも使えないで「性行動」とごまかしてしか話せなかった私が、この一年で（この連載とともに）、よくこれだけの話ができるようになったものだと思量無量の状態です。

（村上昌子）

心理学のなかの教育

小沢 牧子



「発達=そだつ」
ということ
(4)

おさむくんの死

冬のある日、十一歳の男の子が横浜にある高層団地の十三階から飛び降りて、小さな命を絶った。二年半ほど前のことである。この少年杉本治くんの事件については、新聞などでも大きく報道されたし、その場にサインペンで書き遺された言葉「マー先のバカ」は、そのまま彼の遺作を集めた本の題名となって出版された。「マー先」とは、治くんの担任教師の愛称である。治くんは「マー先」に、学校を批判する会話内容について叱られ、反省文を書くように言われたあとに、その作文を残して自死をしたのだった。

治くんの自死をめぐる、横浜の人々による「杉本治君問

題を考える市民の会」が生まれ、この事件についての市民の手による調査が進められて、記録集が次々に作られている。その貴重な記録集を通して私に見えてくるものは、治くんが「自分らしさ」を表現することを許されず、その代わりに「子どもらしさ」を強制されており、目に見えないその圧力に大きな苦痛を感じていたのではないかとということである。

「子どもらしく」、「小学生らしく」あるいは「中学生らしく」という「らしさ」を、いま強力で要求しているのは学校である。年齢にふさわしい発達を、という課題を、学校はもっとも高くかかげているようにみえる。

子どもらしさとは何か

治くんは自分の考え、自分のことばをもっていた。つまりものごとを批判する力を身につけていたということである。最後の作文に彼はこう書いている。「学校は、人が作ったものだから人は必要なものと思うだろう。だけどだ、学校にいつてしあわせになるかだ。一段ずつ上の上の学校に行かなければならない。」「昔は学校がなかった。その時、人は自由にくらせたんだ。進歩のためだ。学校がなければ進歩がしない。これぐらいで進歩を止めた方がいいと思う。」

自分の頭で考える態度を、学校は子どもに期待する面もある。しかし学校や大人にとって都合の悪い考えは認めない。

歓迎されるのはあらかじめ用意されている答を子どもが自発的に考えたときである。根源的な批判はしりぞけられる。「子どもらしくない」という非難をとまなつて。

「市民の会」の調査によると、治くんの学校への懷疑について、担任教師は次のように言っている。「学校を破壊させようなんて思う子に将来なんてあるわけじゃないじゃない、良くなくても精神病院行きよ。気持ちがいいじゃないの。」「子どもはもつと健全な明るい考え方をしてもらいたい。」

子どもらしさという言葉の本身は、大人を脅かさない子ども、大人にとって心地よい子どもということであろう。つまり子どもらしくあれとは、子どもの分際を守れということなのである。

育てる意図と育つ力のはざま

治くんは、十一歳の子どもの平均像に近い面もたくさん持つていた子どもであつたろうし、一方平均像から離れた面も持ち合わせていただろう。年齢的な平均像にあてはめてみれば、はみ出して目につくところがあつて、「発達段階」という物指しに治まりにくく、それが担任教師をいら立たせていたかもしれない。

しかし治くん自身にとって、自分はほかならぬ自分自身であつて、そのことこそが大切だつた。物指しにあわないから

といつて手足を切り取られるのは屈辱だったに違いない。「子どもらしく」と治くんを強制する学校の圧力の背後には、心理学が提供してきた「発達段階」という、「らしさの枠」が見えかくれする。

発達の平均像を支えてきたのは、主として心理学である。その物差しは子どもものの「早熟」をも指摘するし、「発達の遅れ」をもていねいに測る。治くんのはみ出した部分を押しこめようとする力は、同時に「遅れた子ども」の足りない部分を引っぱる。「早熟」も「遅れ」も、ひとりひとりの子どもにとつてみれば、同様にかけがえのない自分の個性にほかならないのだけれど。

一方、ひとりひとりの個性によりそい、それを大切にしようとする目も、心理学はまた持つている。カウンセリングの精神にみられるものがそれだ。しかしカウンセリングはしばしば、やさしくソフトに、望まれる方向へ人をつれもどす技術に傾くという限界をもっている。結果として、苦痛を感じさせずに手足を切りとるという作用になる場合もあるだろう。

治くんは、「自分らしさ」を「子どもらしさ」に明けたらず、頑固に学校批判の作文を綴つて自死した。心理学は、そして私たちひとりひとりは、いまだこまで子どもの個性そのものの側に近く立とうとし、そしてどこまで立てるだろうか？



ぼくたちは 真剣なんだ

として日本が世界的な注目を集めているということだ。止めようのない危機に至るか、その寸前でくい止められるかの瀬戸ぎわにあって、何も知らずに考えることを誰かに任せたままというわけにはいかない……。私なりに知識を広げようと努めてみた。性教育の一部としてどんな形がいいのだろうか。何処まで話せるだろうか。

今の三年生は一・二年生の時、生命誕生の神秘についてビデオやスライドを見たり、自分の出生についてある程度話し合いはしてきた。精子がきびしい旅の後、一個だけ卵子に合体する画面を固唾をのんで見守り、胎児が人間らしく形作られていく過程を感動もって見つめた。遅刻の王者セイチャンが「オレ、トップだったのかア」と何度もつぶやいていた姿が目に残っている。

その時「肝心の生まれるところが見られなかった」のが不満だとクラスのみんなが言うので、夏休みにビデオを探して二学期に見せた。その中で、実際に出産に立ち合った若い父親の目に光っていた涙を、みんな共感をもって受けとめていた。そして「人はどうして好きになるのだろう。好きになるってどういうこと？ 知りたい知りたい」と女の子たちは考えている。三年生になったら、心の問題と実際の話をしようという心づもりだった。

エイズ―最初はやはり遠い話だった。週刊誌などの売春文化のお先棒が、思わせぶりにサワギ立てているのもウツトウしくて、私自身さしたる知識も関心も持っていなかった。男同士で肩を組んだりしている生徒に「エイズのカンケイ」などと自分で軽口を叩いていた程度の浅はかさだった。

それが、生徒たちがもやもやとした不安を持っているのに気付いて、一度本気で話し合ってみなければ……と思っていた矢先、ある懇談に招かれて幸運にも第一線の研究者のお話をじっくり伺うチャンスがあった。

エイズビールの発生の仕組みから各国の発生状況や経路をたどってみると、今まだ「千万分のひとけたに留まっています、しかも衛生的医療行政的な対処能力を持っている地域」

*

*

*

エイズ―第一にわかっている限りの正しい知識を伝えること。第二は人間同士、また男女のかかわりを考えること。

クラスではぜひ話したいと全員が言う。

―どうしてエイズだけそんなに？「必ず死ぬから」

―癌はちがうの？「エイズは若くてもかかるし、どうしたら防げるか知りたい」ととても不安がつている。

―エイズビールの正体はもうすではつきりしていて、感染は血液への混入、性的接触、母子感染に限られている。もし家の中に患者がいたとしても、伝染した例はない。アメリカでは母子感染のエイズの子どもを普通の家庭で養子にしている位だ。歯ブラシやタオル、剃刀などは別にする。熱に弱く、五七度位で消毒できる―等の基本的なことを話した。

「プールなんか大丈夫だね？」―衛生管理ができている所ならべつにね。念のため水着の貸し借りは止めた方が……。

日本での報道の内容やアメリカのエイズの子どもの病院の様子など話し合った。

―ここでみんなに考えてほしいのが、麻薬、セックス、ホモのこと。麻薬の注射による感染がアメリカでは一七％といわれている。薬物乱用をしないですむ生活を自分でつくりだすことはもう分かっていると思う―。

「セックスでなんだ？」―人間相手でなくてもセックスでい

うのだろうか」「やはり人間同士だから、お互いに思いっきり大切にするのはないのかな？」「簡単にできるつてのはオカシイヨ」……。

ホモ全体にあまり偏見は持つてほしくない。性の好みの問題はそれぞれの事情や心理的背景もあるのだから、ただ、ホモの間で大量に広がったのは、多数の相手とセックスをする風潮があつて、肛門性交をはじめ、精液と血液が混じる危険性が多かったからだとはつきり話した。それから今の年齢での経験が性の好みを分けてしまうことが多いので、誘惑や、暴行など、望まぬ経験を絶対避けることも。意は尽くせないけれど、またの機会を待とう。

家庭訪問に行つたとき、子どもが誇りをもって語つたと何軒も言われた。「うちのクラスではエイズのことをとつても詳しく、真剣に話し合つたんだ」「お兄ちゃんも知つた方がいから」「お母さんの態度は不真面目だよ」。あれだけでも話してよかつたんだとホツとした。

一方保健所のエイズクリニックの医師の話を思い出した。相談者の中にごく普通の主婦が多いので、ヘンだと思つたら、実は夫がいろいろ身に覚えがあつて不安だけれど、自分ではクリニックへ行きたくないで、妻が検査を受けてシロなら自分も安全だろうと、妻を寄越すというケースだという。日本の大人の貧しい性関係がここにも露わになっている。

〈'87年春の公開ゼミナール〉

時・'87年3月29日(日)一時―五時

場所・東京都婦人情報センター

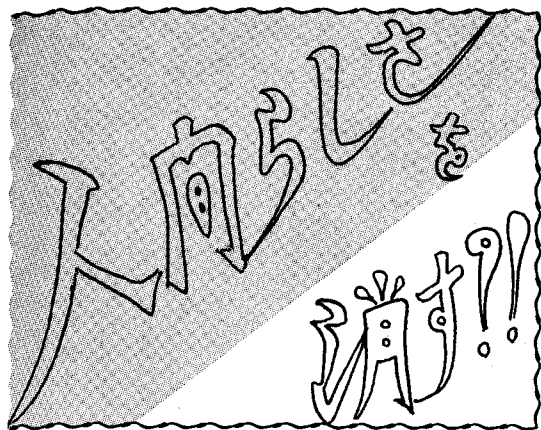
内容・問題提起

橋本益男／湯川憲比古

石川由紀

・グループ討論

・全員による討論



公開ゼミナールを終えて

川崎 絢子

公開ゼミナールを終えて今、私は反コンピュータ人でいたいと思う。実行委員長の任を引き受けたおかげで三氏のレジメの中からたくさんのお話を学ばせてもらったけれど、内容を知らなければ、最先端技術の進行に僅かながらもブレーキをかける側にいたい。

パソコン操作もおぼえてはおもしろくて時の経つのも忘れてしまう。そして次々とやってみたくなる。ちょうど車の免許取りたてにやたらと運転してみたくなるのと同じだ。やがて自信がつくと高速道路をピンピン飛ばして、そうなると車しか目に入らない。人間はほとんど視野に入らない車優先の感覚だ。国土の七割が「山」で占められている日本にはかつて毛細血管のように峠道があった。日々人びとが往来し流通経済の動脈として村

落の生活を支えていた。それが鉄道が敷かれ新しい道路が造られたことによってサビレ、過疎化していった。便利になったと喜ぶ人たちの「陰」に入ってしまう人たち。科学技術の発達には人びとの暮らしを豊かにするはずなのにいつの世も弱者は生じるものなのだろうか。「便利な生活」ができる都市は人間が文明の利器を駆使して造ったまち。そこでの暮らしにはコンピュータはなくてはならない存在なのだろうか。便利なことには誰れを豊かにすることなのか、人間らしく生きるために必要なものは何なのか。公開ゼミナールではこの点についてまったくと言ってよいほど話し合えなかったのが心残りです。

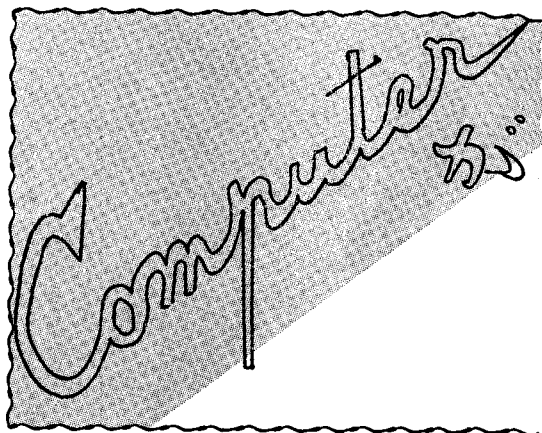
余談ですが、先月緑豊かな青梅市にある作家吉川英治記念館を訪れました。彼の書いた原稿が展示されていたが、欄外に書き加えられた跡や、グチャグチャと塗り潰した跡があった、そこから彼の手の温もり息吹が感じられた。これがワープロに替わると訂正も書き加えもない整然と並んだ文字だけになって、後世に「生きていた人間」の証しは残らないのだろうかと思いに駆られた。私はやはりコンピュータ落ちこぼれ人間でいたい。

道具は使い込んでこそ道具



似顔絵・ごじりょうこ

橋本 益男



当日は熱心なお顔を拝見しながら、考えていたことの半分も言えず（時間を大幅に超過しながら）、果たして適切な問題提起として、コンピュータの発展と我々の生活に与えている影響を、その発生から現在までの状態を通じて理解していただけたか？ 反省すること多多であります。

この紙面をお借りして補足させていただきますと、企業はその活動を通して、便利な計算道具としてコンピュータの利用方法をいろいろ工夫してきました。夢中でやってきてふと気づくとその社会に与えている影響の大きさにびっくりしたというのが高度成長時代の終わり（昭和40年代後半）の実感ではなかったかと思えます（私もその中で働いた一人として）。そして脱工業化社会、情報化社会ということが声高に言われ始めたのも同じ時です。コンピュータの中の記号化された情報素材の加工のすごさに目をつけたとき、単なる計算機械ではなく、この情報操作の問題が社会問題として浮かびあがりました。情報処理機器の発展と情報の処理は無縁ではありませんが、機械を操るのは人間であり、その情報の操作を誤らないようにするのも人間です。

そしてこの便利な道具としてのコンピュータ

タそのもの及びその利用技術としてのソフトウェアは、現状では決して未だ完成された技術ではありません。

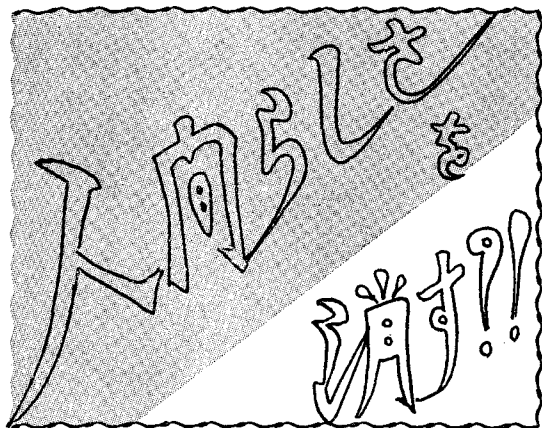
多勢の科学者や技術者がこれからもまだまだいろいろな要素をつけ加えて発展していく過程にあります。したがって現状を認識するだけでなく、今後どういった形に発展していくのかきびしく見守るだけでなく、この発展過程に積極的に参画していくことが必要です。

コンピュータがわかり、操れるということだけでは決して社会に有用なこととはいえません。社会に有用な生活の、専用の立場から、いかにコンピュータを使用するかを考えると大切であると言えます。

そのためには、今、皆様方のそれぞれの立場からの活発な議論を行い、我々あるいは子孫にとって必要なコンセンサスを作り、発展するコンピュータ・テクノロジーをきびしく見守り、その健全な発達をうながすことこそ必要ではなからうかと考えます。

また機会があれば、ご一緒に議論をし、考えてみたいと思っています。

（前例）トランスコスモス主任研究員）



個人・市民の「情報主権」の 確立こそ



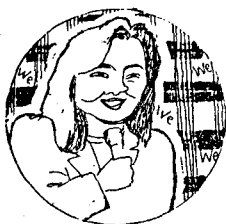
湯川憲比古

私は現在7種類の名刺を使っていますが、「情報化社会」や「コンピュータ」に関しては、3種類の名刺で対応しています。まず「衆議院議員 江田五月 事務所政策担当」者として、教育改革を考える立場で、ここではむしろ「インターネットスクールの構想」や教育現場における安易なコンピュータの導入を否定しています。もう一つは、ビジネスの分野で、元「びあ」経営者兼編集長の経歴からも情報化社会の到来は得意とする分野なので「㈱タウンズコーポレーションプロデューサー」の名刺で、主としてICメモリーカードを使った、パソコン通信による「オンラインネットワークとオフラインネットワークのコンビネーションネットワークの構築」にとりこんでいます。もう一つは、「情報公開東京連絡会世話人・情報公開法を求める市民運動運営委員」の名刺で、ここでは情報公開の推進とプライバシーの保護、国家秘密法（スパイ防止法）の制定阻止にとりこんでいます。

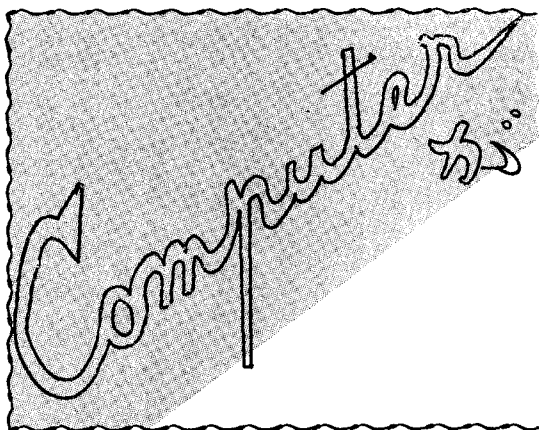
今回のゼミナールでは、私は3番目の市民運動の立場から、「情報化社会とプライバシーの保護」について報告しました。この中で私は、行政と民間企業によるコンピュータを駆使した「情報化社会」がどんどん進む状況を前提として、その中で個人のプライバシーと主体性を守るためには、プライバシー（個人情報）保護法・条例の制定が最も重要であり、各自自治体や国でその制定の準備作業がかなり進んでいることもあって市民の立場から、真に個人のプライバシーを確保するための法・条例を制定する必要があること、こうした動きの中で、個人・市民の「情報主権」を確立する方向で対処すれば、コンピュータ社会を恐れる必要はない、と報告しました。

なお、報告後の討論の中で、私の発言の中の「市民社会の成熟」や「コンピュータ社会を恐れる必要はない」といった点について、疑問が出されました。生来、楽天家の性格をもっており、発言内容が流れた面もありましたが、ただ私の言いたかったことは、日本の社会を、市民社会が成熟していく方向でとらえていきたいということ、本来きわめて「中央集権型」の技術になりやすいコンピュータの技術も、情報公開とプライバシーの保護の原則のもとに「自治と分権型」の技術にしておくことは可能であること、そして私自身はどのような方向と方法で行動していきたい、ということであった、ということをお願いしておきたいと思います。

「情報処理」は家庭科か？



石川由紀



子どもの遊びの中心が『ファミコン』になったように、文書の多くがワープロで書かれるようになりました。銀行へ行っても、駅へ行ってもコンピュータのお世話になる日常が現実としてあります。日常生活と深い関わりがあるコンピュータだから、家庭科にコンピュータ教育が持ち込まれたのでしょうか。

コンピュータを使った授業は他の教科でもやっていますが、高校の家庭科には「情報処理」という名で入ってきました。中学には「情報基礎」という名で技術系列の中に入ってきました。このように、'86年十月の教課審の中間まとめでは、先の家庭科教育に関する検討会議の報告の中にもなかった項目が加わりました。これは'85年十月に全国高等学校長協会家庭科部会が提案した内容に非常に似ているのです（本誌'86年二・三月号「情報」参照）。

ここで私の勘ぐりを述べさせていただきますが、第一には必修になる家庭科の男子校対策ではないか。第二に、臨教審のいう六年制中等学校創設のため、高校の家庭科も「技術・家庭」とし、中高一貫の教科を狙っているのではないか。第三に、'84年に通産省から要請があったとされるソフトウェア技術者供給基盤作りの対応として、他教科には当ては

めにくいため、ここに持ってきたのではないか。いかがでしょうか。

現在、各県でコンピュータを利用して教える家庭科研究がなされているようですが、そのことと、情報処理が家庭科に入ってくることは、幾分意味合いが異なっているのではないかと思います。教育手段としてのものと、目的としてのコンピュータ教育とは全く別のものと思われれます。

今、家庭科に「情報処理」を受け入れることは、次の点で私は反対です。

○「情報処理」は家庭科的内容ではない。

○莫大な費用を要するコンピュータ教育が家庭科本来の授業に必要な費用を侵す。

○家庭科教師の負担増、家庭科教師数の減少を招くおそれがある。

○家庭科の教育内容の後退が予想される、等。

情報化社会に対応した家庭科教育とは、情報化社会が私たちに及ぼすであろうプライバシーとの関係や生活管理、新たな産業構造における労働と健康と生活を、いかにによりよく手に入れていくかなどの力をつけることであり、コンピュータのハードやソフトの操作の習得が目的ではないはずなのです。

（家庭科の男女共修をすすめる会世話人）

Aグループでは—
使うか使わないか
に現れる人間性

参加できなかった人には申し訳ないが、やはり実行委員会から参加してみてもっと良かった。実行委員会ではテーマをしぼり学習会を重ねていくなかで、自分のなかに少しずつ問題意識も芽生えテーマについての理解と認識の輪がひろがっていったように思う。なにより橋本氏の「集中講義」が圧巻で、実行委員会のメンバーが何を聞いても何でも出てきそうなそのお人柄もユニークでとても楽しかった。当日は時間が限られていたこととさすがの橋本先生も少し緊張ぎみで、参加者にそのお人柄が少しも伝わっていない気がしてすごく残念であった。やはり実行委員会から参加してみるべきです。

「コンピュータは単なる道具にすぎない。それをどう使うか、使わないかにこそ人間性が問われるのだ」という私なりの結論らしきものを持ってしまったのだが、一方でその道具の持つ影響力の不可逆性に対する不安感がある。武田秀夫さんの言われた文化変容や私のグループで特に話題になった労働障害等の問題、これらの問題に何の手立てもないままコンピュータが教育の場に持ち込まれるということはまずいなあ、と改めて思った。では、この問題について私は何をすべきだろうかと考えている。

西内みなみ

Bグループでは—
考える材料を
たくさん、ありがとう

私たちの話し合いは17名の輪でした。高校教師3名を含み小学校教師や事務職員等、職業上学校に関係ある者6名、出版界2名、民間の職場でコンピュータと関係の深い人、深かった人2名、法科学学生2名、美術系学生2名、その他市民3名の顔ぶれで、男女比7対10、年齢幅40歳位とみました。今回は異なる分野の人と話せるようにグループ分けしたことを説明し、各人の生活観から、コンピュータへの関心を出し合いました。

生命のリズムとかけ離れすぎだ、なくてもよいという点では原発と同じとする見解から、現代人の我々には、ここに至って拒否のすべはない、時代の道具との間に、必要な距離感を人間として培う議論を！ の意見まで多様。

教育界への導入には警戒基調、先行例に触れたい旨の声に、『教育コンピュータ工場』の著作関係者が幸運にも同席で、幾例か詳しくお聞きし、考える材料を頒けていただけました。

家庭科で、そのコンピュータをの論も出しました。湯川報告関連では既に相当の個人情報収集されている実感に根ざす不快、怒り、防御への無力感。それでも人間らしく生きのびようと考える時、要を托すことになろう法律、芸術の学生と話す時間が切れ、残念でした。

若竹キミイ

Cグループでは―― 時代の課題に向き合う

高二の男の子のお母さんが口火を切った。「息子がコンピュータを欲しいと言う。何のためか聞いても『わからない、世の中に出回っているから』と答える。いくら位のがぜいたくか親に判断材料がない。五万円以内でと言いついたら二万八千円で買ってきた。私は家にあることが既に気持ち悪いのに、夫は遊びの段階からなじんでいるほうがいいと言う。息子は通信教育を受け、ゲームを一人で作って満足した様子」と。この話題は、コンピュータ先行社会への人間の対応の幾度かを、象徴的に示していると思う。

秋田・山形・埼玉・静岡・大阪・熊本……はるばる参加の家庭科の先生方の問題意識は鮮明。工業高校でコンピュータを教える方は、テーマに関心持って初参加。図書館運動にかかわってこられた新聞記者は、一行の文章のために資料を漁り発見する面白さに比し、たちどころに検索できてもコンピュータは薄っぺら、と。

コンピュータ教育先進県、熊本では「情報処理」講習に希望者殺到。だが、卒業生をこの仕事に一人就かせれば、何人もの就職機会を潰すとの矛盾も語られた。行きすぎたホームオートメーションは、家族の対話を奪う。手段としてのコンピュータを目的としてしまう恐れ。では対応の切り口はどこへ？ 時代の課題に向き合った。

半田 たつ子

Dグループでは―― 二人のパネラーを 占領して

パネラーの橋本・湯川の両氏をまじえての分科会では、お二人の提言と資料に関しての発言が終始中心になった。

行政側が掌握している膨大で細密な個人情報について、一市民が自由な選択で生きている日常を、「何を収集し、何に使われるのか」を知らされぬ側の者として、不愉快さの源をさぐって卒直な意見が活発に出された。

コンピュータの出現によって、情報の収集と管理が大がかりに可能になったこと。それによって利益を得るのは誰か。数値によるデータから個人の思想信条を類推されることに人間の感情が違和感を覚えるのは当然だ。だが、文明社会に不可欠で、加速度的に浸透するコンピュータに、機能性に関する無知故に、拒否反応をのみ起こしていることも許されぬのではないか。有能な道具を持つてしまった社会に、現在を生きねばならぬという現実。その事実認識の個人レベルでの混乱は、話し合いを時にかみ合わぬものにもした。

さて、私は、参考文献を読破し、古くからの友人である橋本氏に感想を述べ、化石化を防ぐ一歩を踏み出そう。人間が尊厳を失わずに自分らしく生きるにはどうすればいいかを、信じ合う仲間とゆっくり愉快に考えよう。

森本 邦子

全体会では—
「人間らしい暮らし」
を原点に

全体会では学校教育の中へのコンピュータの出現をどう考えるかについて様々な意見が出されました。コンピュータ操作のハウ・ツーだけを教えたり、コンピュータを使って授業の効率化を計ったりする（個別学習により落ちこぼれ浮きこぼれをなくすという名目で）という発想は恐ろしいことであるという共通認識がありました。特に石川氏の資料の中の、鳥取県の「高家研」で提案された、コンピュータを使つての家庭経営の授業計画では、人のくらしがズタズタに切断され、Weの目指すトータルな人間としてのくらしとは正反対の方向に向かつていることが鮮明に描かれていて一同不快感を持ちました。

しかし、コンピュータそのものをどう受けとめるか。学校教育の中でどうとらえるかといった点では、議論は様々な方向に分かれました。

錦 真理

○コンピュータは現に否応なく我々のくらしに入つて来ているのだから、その正体を正確に知らねば何がプラスで何がマイナスかの判断の材料も持てない。人間の生き方とからめて、義務教育の段階からきちんと取り入れていくべきである。

○人間らしい豊かなくらしをするには「情」の部分の発達が基盤になる。今の教育は「情」より「知」の発達を中心においていることにこそ問題がある。「情」の発達が大切な時期に「知」の分野であるコンピュータを教えることは危険ではないか。

○コンピュータは国家・企業のニーズによって生まれたもので、もともと我々にとつては幸せを与えてくれるものではない。民衆は管理され、知らない間に人間性をそこなわされていくものであるから、はっきりと拒否するべきである。

大まかに以上の三つの意見に整理できると思います。また、コンピュータというものの認識については、「コンピュータは単なる道具であつて使用する人間の人間性・主体性こそが問われるべきである」という「使い方の問題」や、個人のプライバシーは別として行政側の情報为民衆に向けて公開されることこそが重要であるといった、やはり「使い方の問題」が出たのに対し、指紋押捺拒否の運動が続けている蔡さんから、「国家に個人の情報が握られ否応なく人権が犯されていくことにとてもたちうちできない。コンピュータによつてさらに管理に拍車をかけられるのではないか」といった意見も出しました。

このように参加者のコンピュータに対する認識は様々で、今後も夏のフォーラムに向けて議論の余地を残しています。でも、「人間らしいくらし」を願う気持が原点になっていることは共有しあえていますよね！

加藤千恵子

◆学校にコンピュータが導入される時代に入り、今まで新しい機械が入ったからと言ってそれほど自分の存在を脅かされるように感じたことはなかったのに、ここに来て私はもうついていけない時代が来たのではないかと押し寄せる波の大きさを感じていました。それが家庭にも導入されるようになったら、人間らしさは本当に喪失していくのではないかと思えます。現代家庭の抱える問題は、機械化による解決ではなく、労働時間の短縮化と人間らしい働き方による、時間的、精神的ゆとりによってこそ解決しうるものと、家庭以外の人間からのサービスとを、どのように組織的に結びつけるかということによる解決が最も重要だと思います。

コンピュータは有用な道具と言われた橋本氏の規定に基づいて、学校の中で事務処理に使用した場合、教育の中で、各教科の教育方

法として使用した場合、情報処理として使用した場合（進路指導・生徒指導）、コンピュータを理解するための技術教育として取り入れる場合、など掘り下げてみる必要があると思いました。学校の中で、本当に有用な道具であると認められる所に限定して、コンピュータは導入すべきものだと思います。

磯部 幸江

◆今回は、こういう催しには出たがらない夫を無理やり連れ出し、途中で帰りがたがるのをひきとめたりしていました。帰る道々、二人で話し合ったことを、感想、あるいは反省点としてお伝えしたいと思います。

まずテーマ、「コンピュータが人間らしさを消す」というのは変だと言います。主語は、コンピュータではなく、それを使う人間なり、社会の体制ではないか、と。実行委員会での話し合いの経過などを話しましたが、やはりとても感覚的、感情的なテーマだと言います。コンピュータはいやだという嫌悪感があるのだらうと。私も、はつきりしたことがわからないのに、感覚的にきらっているのかもしれないな、と思います。橋本さんの話には、とても興味を持ってました。

会の持ち方として、グループに分かれた時に、話し合うテーマがはつきりしていないと、いろんな意見が出てくるのはわかっていましたので、まとめ役の人はいへんだったろうなあ、と思います。Weの人たちは欲ばりだから、しぼりきれないのでしょうか。夫は初めAグループでしたが、Dグループに途中から変わってしまいました。橋本さんや湯川さんとのやりとりの方がおもしろかったと言っていました。

コンピュータは、今の世の中、道具として使うのはあたり前になっていることを認識しなければならぬのでしょうか。その原理や使い方を誤るとどうなるかなどは、しっかり教育しなければならぬと思います。でも、家庭科でやることではないと、はつきり言えます。高校なら現代社会あたりでやるといいな、などと話しました。

入江 一恵

◆春のゼミナールは、年度末で他の行事と重なり、今までは参加ができにくかったのですが、今度初めて参加しました。コンピュータは、十五年位前からごく親しい友人が内地留学をしてやっており、それなりに興味を持っ

ておりました。五年前、職場でグループを作って勉強会を一年程続けましたが、その中で私は落ちこぼれでした。新しいものに対する挑戦という気持でした。でも二年位前から教育現場へのコンピュータの入れ方の異常さに疑問を持ち始め、臨教審の答申などでその疑問は拡がるばかり。今回のゼミナールは、あらゆる角度から考えることができ、とても有意義でした。教師が多かったとはいえ、いろいろな人が集まって、多角的に話ができ、ことは、Weならでは……の感を強くしました。この問題は、今回だけでは語りきれなかったし、ぜひフォーラムへと続けてほしいと思います。

六本美代子

◆生活している中で感じる様々な疑問、思いに示唆を受けたり、ふくらませて私なりの結論に達したり、行動の指針を得たり、感動したり、色々刺激を与えて下さるWeに感謝しています。私も自分の思いを形に表していけるようになりたいです。

脇 美智子

◆コンピュータへのアレルギーを捨てて、ち

よつとかじってみようかと思いはじめました。ある程度理解した上で批判してみたいと感じました。ただ、コンピュータが生活に入ってくることによって、何が起るのか、どんな問題が起るのか、それがわからないだけに不安です。生活が便利になることによってできた、手先の器用さが失われ、合成洗剤・添加物の問題のように、何が起るのでしょうか。

川名はつ子

◆関心の方向も、予備知識のレベルも様々な人が、いきなり集まってるゼミなので、時間不足で、ある人にはちんぷんかんぷんで、ある人にはもどかしかったのではないのでしょうか。事前に誌上等で予備講座をつみ重ねるなどの工夫が必要かと……。

嚮田 徳子

◆どうしても動かすことのできない用事がありまして、少し顔を出す程度になってしまったのが、申しわけないやら、残念やら……。しかし、どうしても資料（私にとって貴重なものになるので）は欲しかったので参加しました。

家庭科の領域にコンピュータを導入するなど、家庭科本来の主旨を大きく逸脱するものであり、家庭科教諭として、これからの内容には大きな不安を抱えています。私たちの力で阻止せねばならないと思っています。

谷山 和男

◆今日の集まりでは、特に討論時間がよかったですと思います。今度はずっと、それに時間を割けたらと思います。

梶原 公子

◆毎回実行委員の方々が入念に計画して下さっているの、今回も、講師の方や資料、とてもよかったです。が、場所の都合のため時間が短かく、やっと本論に入ったところで打ち切りというのを歯がゆく思います。

コンピュータの問題では、やはりそれにかかわっている人の立場で、コンピュータやそれを受け入れる学校も含めた社会の見方にズレを感じましたが、それはまた当然のことだと思えます。しかし、見方の相違を前提としても、いくつかの共通点ははっきり出たようです。（以下略）

泉

情報の頁

◆冊子ご案内◆

『制服なんていらないう——育ちざかりの子どもに「制服」は必要でしょうか——』

16億の小さな囚人たちと連帯する会

・A5判 60頁

・同会は大人の管理と抑圧によって「囚人」と化している子どもたちの『叫び』に呼応し、なやみを話し合い、解放する方途をさがっている。

・定例会 毎月第二日曜日 二時より

・機関紙 毎月一回発行

・年会費 一五〇〇円

・連絡先 同会 〒150渋谷区神宮前3—30—

10 ☎03-408-6948

『せたがや教育フォーラム 第一号』

せたがや教育フォーラム編集部

・呼びかけ&編集 湯川憲比古 小林順子他

・内容 創刊によせて 永畑道子 林千代／

特集 セタがや校則コレクション 区立中

学校17校の校則を分析 中学生のアンケート

ト その他／資料 教育環境の整備をめぐ

って／レポート あなたも区教育委員会を

傍聴してみませんか／ふぉーらむ 声の広

場

・B5判 32頁 価三〇〇円

・連絡先 同編集部 〒154世田谷区太子堂3

—21—2 豊田方 ☎03-411-2081

◆一緒に考えてみませんか◆

『暮らしの科学』研究会(「よいしょ」の会)

・目的 暮らしに密着した市民の科学をめざ

す。身近な題材から化学・家庭科の授業に

入れられそうなものを開発・研究する。公

立学校の実験室が地域の分析センターとし

て役割をはたせるよう考えていく。(小平)

・定例会 第三土曜日 二時半より

・場所&事務局 〒350-13埼玉県狭山市上奥富

34 県立狭山清陵高校化学実験室 小平陽

一 ☎0429-53-7161

◆シンポジウムご案内◆

「みのがすなノ かくされた性差別」

—全金日産家族手当裁判勝利にむけて—

・日時 六月二十七日(土) 二時〜五時

・場所 東京地評会館ホール(田町駅下車徒

歩三分) ☎03-463-4011

・講演「間接差別もやっぱり差別」中島通子

・報告「アメリカ家(いえ)事情」そして世

帯主はいなくなつた!—三井マリ子

・会場費 五〇〇円

・主催 健康保険の扶養認定・家族手当の男

女差別をなくす交流会

◆絵はがきができました◆

・障害児を普通学校へ・全国連絡会製作

・会の思いが多くの人びとに伝わることを願

い、第一集、第二集と絵はがきをつくりま

した。今回の第三集も前回同様赤羽末吉・

梶山俊夫・杉浦範茂・長新太・坪谷令子・

長谷川集平のみなさんのすてきな作品で

す。(メッセージより)

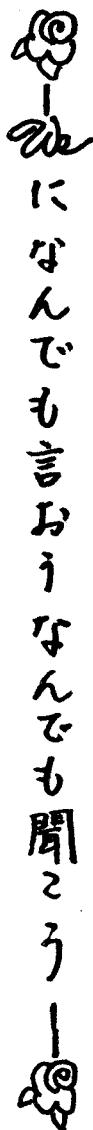
・定価 六枚組一セット三〇〇円(送料別、

一〇セット以上は送料無料)

・申込先 同事務局 〒155世田谷区北沢4—

4—11 ☎03-303-4739

〈ワイド版〉



◆四月号「先生は悩んでいる」を読みながら私はどうなのか考えました。

大きな所では、受験対策的教育の流れと管理教育の流れを変える目的が立たないことです。学校の中の具体的問題では、学校が民主的運営に程遠くなっているということです。

職員会議の議長は教頭です。議題に対して反対意見を述べれば、すぐさま議長が説得する意見を言い出すのです。多数決は絶対ありません。職員会議は議決権を持たず、審議するのみで、校長が全て決定権を持ちます。職員は、校長のいない所（教科会議・分掌会議）では比較的自由に意見を述べるものの、校長の前では絶対に意見を言わない人が多いのです。

課長、教科主任、学年主任はすべて任命制です。教科主任は、前校長が退職する五日前に開かれた職員会議で、突然任命制にしてしまいました。昨年からは現校長になったので、当初からこの問題を組合で取り上げ交渉をして来ましたが、五月の段階では教科主任は互選にしても差しかえなからうという話でした。

たが、今年二月、最後の詰めになったら急に変わり、任命制は変えないということになりました。

互選にすると輪番制にしてしまい、主任に適さない人を主任にしてしまうことがかつてあったと言われている。教科主任は教科内で指導的役割を持つているので、若い人では無理である。又意見の調整という点でも先輩の人の意見を若い者がまとめることはできない。課長、学年主任との関係をよくするためにも必要……など説明し、未来永劫にわたって、私は任命制でなければならぬとは考えていない。教科主任はしかるべき人がやるものというイメージが定着した時には、互選にしてもよいと考えているという回答。話を聞けば聞く程、任命制は校長にとって都合のよい制度と認識を深めました。任命されて教科主任になっている人でも、この制度に反対の人もいたので、働きかけて、教頭・校長の所に行つて意見を言ってもらいたいと要望しましたが、二人だけしか実行して下さった人はいませんでした。

そして今、主任会、各小委員会、全て校長の意見に賛成の者のみで組織された原案が作成されます。

ああ、こういう所で働くのはいやだと、会議の後で憤りと空しさの混じった気持ちになります。ちよつと過ぎると、どこへ行つても形は違ふけれど問題は必ずあるのだから……と、自分に言いかけます。

最近『夜と霧』を読み、人間の精神力の意外な程の強さに勇気づけられています。「強制収容所の人間における内面的生活の崩壊の究極的な理由は……心理的・身体的原因の中に存しない、ある日決断に基づくものだ」とすれば……先ず最初に精神的・人間的に崩壊していった人間のみが、収容所の世界の影響に陥つてしまうということを示している。

この先、どうなるのかと不安になると、必ずこれを思い出し、その場で明るさを見出して生きていけると考えることにしています。

(静岡・K・T)

◆学校の先生方、忙しすぎますね。でも、余計なことばかりしているのではありません

か? 「自分でなくても出来るもの」を、多くかかえこんではいませんか?

不景気な世の中、仕事は分けあってほしいです。例えば、校内に用務員とか雑事務員を雇う、とか。家庭のことで、カギツ子にしなければ、ベビーシッターを雇うとか、皆さんでお金を出し合って雇ったっていいし、もちろん、公的に行政に働きかけたっていいし、PTAでやったっていいんじゃないかなあ……。と思うのだけれど……。

Weの四月号、おもしろかったです。

(保谷・大西麻里子)

◆今朝、窓から見た「はなみずき」の林、赤と白の花弁(実はがく?)がみんな開いて、冬の木立の味わいとはまた違った、明るい天然の額ぶちを見るようで、しばらく見とれてしまいました。

五月号、「情報化社会の光と影」。春のゼミナールの続きで読みました。とりわけ木村温美さんのが、家庭科の教師としての私には、とても参考になりました。少し整理できたように思います。コンピュータ・リテラシーなんて言葉、これがキイワードのような気がします。そして高度な技術・情報社会への疑惑こそ、人間らしい平衡感覚のあかしであり、

ハイタッチ社会への願いが、家庭科と大いに関係する部分なんだと納得できました。

それから「老人医療の最前線から」、山口里子さんの「私からあなたに」、中嶋里美さんの「65歳の独立宣言」、これらは授業で使いたいな、と思いました。ごじらちゃんの「青春ふりかけ」、今週授業事始めで、オリエンテーションをやり、評価についても話したので、チクチク胸が痛みましたが、「体が一ヶ所に縛られていると、世界の本当の広さに気付きにくいと思う」というところ、今、私もつくづく思っていることです。

(調布・芦谷薫)

◆学校給食論争(家事の社会化)や、性教育の中で、結婚制度の問題点も取り扱っていくなんて、マスコミにもイデオロギーにもできない、とてもすてきなテーマです。楽しみにしています。

さて、五月号の中で「We大阪の会」の報告として出ていた「女の視点を取り入れた地域計画」については、職住接近や、生活と生産を同一視座で取り扱っていいこうという私の考えを、未熟さゆえ、うまく伝えられず、少し残念でした。今後ともより深く、よりわかりやすく、がんばってゆきたいと思います。

一年ほど前、水質や土壌をテーマにした号を出されたようですが、「憩いの場、子どもの遊び場としての河川・海岸」「女の社会参加と道路交通問題」も、ぜひともテーマにしてほしいものです。両者とも、ここ十年位でがらっと状況の変わってきたことなのに、マスコミでは、あまりきちんと論争されているとはいえません。

(八幡・安東尚美)

◆「老人医療の最前線から」を読ませていただきました。私のような筋ジス患者と共通するのは、介護が中心的な問題であり、今日もなお多くの患者の家庭の中で、自分の居る場が存在しないことです。

私は、今の国立病院に入院する以前、介護が必要なために、二か月ほど行き場がなく、老人病院に入院していました。そして、その病院が倒産ということになった時は、多くの老人をどこで世話をするのか。老人のキャッチボールを見るようでした。病院内での看護の話題の中心はエロ話です。人間が生きていることに対する話題など皆無でした。恐ろしいことです。これが、現代日本のありのままでした。

(広島・森章二)

◆'87年6月号の「学校給食で論争しよう」を興味深く読みました。今の学校給食の実情、問題点、運動の方向等、私が日頃まとまりなく考えていたことが整理されていて、これからの学校給食へのあり様のおおよその方向が見えてくる感じがしました。特に、矢口さんの「学校給食への親の『想い』」の中で、学校給食を教育の「一環」から「根幹」へ位置づけたいとする視点に、深く共感を覚えました。

そのようなことから、改めて私が何か提案するということはないのですが、ただ、小寺氏の「学校給食を問う」の中で言われていることに、言い添えたい思いに駆られました。それは、'86年10月号「学校給食を全廃せよ」の根拠のひとつが今回も出ていて、そこに私は強い違和感を感じるからです。

前回には、「一九五一年（昭和26年）ガリオア資金打ち切りと同時に学校給食は廃止されるべきものであったのである」とあり、今回は、「戦後の一時期は学校給食が一定の役割を果たしたことは確かである。そして、当然、ガリオア資金打ち切り（一九五一年）と同時に学校給食は廃止されるべきだったのだ」とあるところです。小寺氏の見解は、戦後の学校給食は食糧難の時代に欠食児童対策

として意味をもったが、その一時期以降は、廃止されるべきであったのに、アメリカの余剰農産物の処理策として政治的に利用され、給食関連産業に企業の側が目をつけたことから、廃止されることなく肥え太って現在のような状況に立ち至っているのだから、ガリオア資金打ち切りの時点で立ち返って学校給食は全廃すべきである、と受け取りました。

この見解は、朴木さんの「臨時教育審議会と学校給食」の中で、「家庭・学校・地域との連携に関する分科会」座長、木村治美氏が述べたという「家庭の教育力がなくなったから学校で、といわずに『シーザー』のものはシーザーに」家庭の役割は、思いきって家庭に返す方向で（中略）考えていきたい」との主張に、とても似ているように感じました。

でも、私には「ガリオア資金」という言葉がとてなつかしい響きで入ってくることに連動して、「給食」も小学校生活を色どる暖かな響きで伝わってき、「廃止されるべきものであった」という表現を拒みます。それは、私の単なる郷愁かしれませんが、私が通っていた小学校の当時の親と教師で執筆された『PTA』（三一新書）の中に、ガリオア資金打ち切り後の給食費をめぐる問題の経過

があり、私の記憶を後づける思いでした。それを少し紹介して、今の学校給食問題を考える参考にぜひしていただきたいと思います。

ガリオア資金打ち切りの年、私は京都市立D小学校の四年生でしたが、その翌一九五二年九月、この小学校で給食を中止するという事態が起こりました。それは、当時から多くの給食費未納があり、欠食児童も一校に何十人単位であった中で、未納金の市補助金で足らない分はPTAで負担する場合が多いという状況があった中でのことでした。私の学校もそのひとつだったのですが、この年のPTA総会で「これは本来公費で負担するべきものだから、学校はその実現に努力してほしい。PTAも協力する」と決め、補助金の予算計上をやめます。学校側は、職員会議で校長会で解決することを求め、校長も努力しますが通りません。しかも、この年、給食費は7円から11円に上がった上にガリオア資金打ち切りで更に大幅な値上がりが予想され、欠食者や未納者が増えることは明らかだったのです。この経過の上で職員会議は直接行動に出るしかないといわれ、PTAも賛成して、給食を一時中止することになったのです。その上で市当局への働きかけを始めます。

そして、このことは新聞紙上でも取り上げられるところなり、市教委も実情調査を行います。その結果、予想以上の給食費未納金と欠食児童を学校がかかえている実態が明らかになります。そして、問題が一つの枠から全市的なPTAや教職員組合の動きになる中で、補助金の追加予算を組むことが決まり、それを受けて、二週間に及んだ給食中止が解かれることになりました。

私の学校では、その後も給食調理室の改築を全額公費獲得で造ったということもあり、私の中にもみんなで作った給食室というイメージが残っています。また、脱脂粉乳の問題から、当時もPTAの論議の中ではお弁当持参の声もあったのですが、当時の給食は、貧しさもみんなで共に分かち合おうという思いの結実としてあったように思います。ですから、私たち子どもは給食を、先生達の「どの子も一緒にひとつものを食べよう」という熱意の伝わってくるものとしてうけ取っていましたし、その頃の調理員の方の顔も記憶に残っています。

このような動きへの評価も、今一様ではないと思いますが、ガリオア資金打切りによって、むしろ学校給食を教育の一環として守っ

ていこうとした学校現場のあったことは事実です。小寺氏が「廃止されるべきだった」といわれることが、国の方針としてそうだったということであればその通りですが、親や教師の直面していた現実には、給食を切実に必要としていたのです。

また、その後の給食運動とも関わることでして明らかにしておきたいことは、当時PTAでがんばった母親達のエネルギーです。わが子を飢えから守りたいところから出発した思いは、PTAという場を通して給食の実態を知り、どの子にも社会的に保障される食事：そして教育をねがうようになります。つまり、女性の社会的な目覚めの過程と重なると思わずにはいられません。ですから、その後の脱脂粉乳問題から始まる給食の歴史に対して母親：女性の責任を感じます。

家の台所から出て、もっと広い視野から食糧の問題を解決しようとした女たちのエネルギーは、はたして飢えの問題の解決のためだけに機能したのかどうか、今改めて問い返したいと思います。その出発の時点での意味が確認できるなら、学校給食を「シーザーのものはシーザーに」といって家庭に返せば済む、ということにはならないのではないでしょう

か。

食は本来個人に帰すとしても、そのあり様は歴史的に一樣ではありません。それは、その時代状況が必要とするものによって規定され、極めて現実に営まれるものです。小寺氏の所論で残念に思うのは、学校給食を廃止してどうするのか、という展望が示されていないことです。そして、お弁当を、といわれる中に、ある固定した食のイメージがあるようにうかがえます。今、日本で直接的な飢えの問題はないとしても、地球規模での食糧問題と、そこにつながる私たちの食の文化を創っていくことが、私たちの切実な課題であるならば、その中に学校給食の果たす今日的な役割があるとはいえないでしょうか。

そのへんで、We 6月号投稿者の方々の現実的な運動の体験を心強く思いました。小寺氏の「給食問題を決めるのは、学校でも、教育委員会でも、文部省でもないのだ。それは、私であり、あなたなのだ」に、私も同感です。ひとりひとりの運動の積み重なりが多くなる中で、国や企業にからめとられない学校給食がみえてくるのではないのでしょうか。

(長岡京・菅原充子)

秘密の図書室

読書つれづれ草

池袋の私の家の隣に、Yさんというひとが住んでいました。和洋折衷の不思議なつくりの大きな三軒長屋の、その端のスペースを借りて住んでいたのですが、Yさんはキリスト教新聞の編集長をしているエライ人だというウワサで、その家には本がたくさんあったものですから、雨などが降ってどうにも退屈なときは、少し気おくれを感じながらそれでもそれを押し切って出かけ、「すみません。また本を貸してください」とおばさんにたのんで書齋によく入れてもらいました。

学校の図書館ではお目にかかれぬ本がずいぶんありました。「ボー・ジェスト」「クオ・ヴァ・デイス」といったものから、ディクソン・カー、ヴァン・ダイン、G・K・チェスタートンといった外国の推理小説、横溝正史、高木彬光といった日本の推理小説が、キリスト教関係の書物の間に、無造作に置かれてありました。私はそれらを二、三冊ずつ借りては片端から読んでいきましたが、横溝正史の「八つ墓村」を読んだときの興奮、チェスタートンのブラウン神父ものが少年の私に与えた不思議な感興など、いまでもなつかしく思い出ことができます。とにかく中学の後半から高校にかけて、

Yさんの書齋は、私の秘密図書室といったおもむきを呈し、漱石も、その書齋にあった岩波の古い全集であらかた読みました。

高いところに縦長の窓がついているだけの洋風のその部屋は、雨の日などはことに薄暗く、高い天井からさがるこれまた妙に暗い電灯のあかりのもとで、私はひとりどの本を借りていこうかと書棚の前にすわりこみ、あれこれとページを繰ったものでした。

Yさんの書齋には、私の家にはない不思議なおいがただよっていました。四囲の壁を天井まで埋めた書物の集積が放つにおいなのか、それとも、いまからおもえば葉巻のにおいだったのか、とにかくYさんの書齋にただよっていた不思議なおいは、地下の穴ぐらのような暗さ、ぼつんと高くともっていた電灯、外に降る灰色の雨などとともに、いまでも私の感覚にいきいきとよみがえってきます。

Yさんは背の高い瘦身の紳士で、いつも折鞘を小脇にかかえ、背すじをきちんと伸ばした背広姿で勤めに出ていきましたが、私はそれを少し離れたところからひたとみつめるだけで、親しくYさんと話をしたことは一度もありませんでした。そのひとが家にいるらしいとわかると私はけつして本を借りにいきませんでした。おばさんは少しもクリスチャンらしいところのない気さくなひとでしたし、私より少し下の姉弟三人はカン蹴りをしたり路地にゴザをしいて回り将棋をしたりする遊び仲間でしたから、ひとり超然と鶴のごとく歩むいかにもクリスチャンらしいYさんとそうしたごく普通の母子が、いとわぬ家庭というものがどうにも少年の私には不思議に思われ、それが、関心を抱きつつ敬遠するというYさんへの態度となつてあらわれたのではないかといまの私は思っています。キリスト教というものがそのころの街の少年に与えた独特の印象といったものも、

そうした私の態度を底のところできさえていたのかも知れません。

しかし、その一方、あれだけたくさんの本をお借りしながら少しも狎^なれることなく、お礼のことはひとつと言わなかった少年のころの私もまた、おとなからみれば、ずいぶん猜疑心のつよい、小さなけものめいたこどもにみえただろうなあとおもいます。おとなだけでなく三人の姉弟にしても、私が本を借りにいったときだけは、ああ、ヒデオちゃんがきたとにこにこしながら書斎の入口に顔をのぞかせるだけで、めったに近づいてはきませんでした。黙って坐りこんでいつまでも本をいじっている少年の私は、遊び仲間のこどもたちからみても、ずいぶん奇妙な生きもののように思われたのでしよう、本を選ぶまでは私をひとりそのままにしておいてくれるのが常でした。

つい先ごろ、Yさんはもう池袋のあの家には住んでいないということをお伝えきました。おばさんが亡くなられたあと、しばらくして再婚し、いまはそのひととふたりで別の土地に移り住まれたという話です。葉巻を手にしたYさん（見たこともないのにどうしてそうした姿がうかぶのか不思議ですが）に、お礼の一言もお伝えしたかった、そのうえでいろいろとお話もうかがいたかった、そんなことをおもう年齢に私もいつのまにかなってしまうしました。

それにしても敗戦後の日々に、「ボー・ジェスト」を読み、内外の推理小説を読みながらキリスト教新聞の編集長をつとめつづけた人の精神生活はどんなかたちのものだったのだろうか。そしてまた、自分の留守中の書斎にあらりこんで自分の本をあさっていきながら、決して近づいてこようとはしない隣の家の奇妙な少年を、その人はどんな眼でながめていたのだろうか、そんなこともいまはちよ

っとYさんにたずねてみたい気がいたします。秘密の図書室で、書物だけをなかだちにして互いを窺ったまま、表面はなににごともなくすれちがったひとりの紳士とひとりの少年。ちよつとしたハイ・プロウな短篇推理小説ができそうじゃないか、そんなほしいままなことを考えながら、私はいまひとりでおもしろがっています。

さて、そうやって中学生や高校生の読めそうな本は片端から読んでいつて四、五年たったころ、さすがの私の秘密図書室にも自分の興味をひく本はなくなつたとおもわれてきたある日、高校二年生の秋か冬だったと思いますが、私はカバーをかけた岩波文庫が前後二列にずらつと並んでいる書架の前に坐りこんで、「聖アウグスティヌスの告白」などといったものをパラパラやっていました。「カラマーゾフの兄弟」「戦争と平和」といった、なにやらむずかしそうな、しかも何冊かに分かれた部厚いものだけが未読のものとして残っています。ドストエフスキイ？　これがほんとうに人間の名前から。「罪と罰」？　なんだ、法律の本か。一、二ページ目を通し、どういう風の吹きまわしか、私はそれを二冊だったか三冊だったか借りて家にもちかえり、その日の午後から次の日にかけて、白熱的な光線に全身を貫かれるようにして私は一気にそれを読み切つてしまいました。あんなすさまじい読み方はあとにもさきにも経験がありません。あのYさんは、少年の私がいつかきつと手を出すことを確信しながら、埃のかぶつた書棚の奥に、私めがけてひとつの爆裂弾を用意しておいたにちがいありません。高校三年の十二月、私は池袋の教会で洗礼を受けました。

〈訂正〉6月号74頁下段2行目「この必然」を「この心熱」に訂正し、おわび致します。



(4) 蓮池悦子

しかし、この学校に通つたのもたつた三日でした。もうすでに一人前に農耕馬を使って畑仕事のできたので、あまり学校に行く気にもなれず、叔父が家庭の事情を先生に話して、学業免除の許可をもらったということでした。

一家の働き手として、あるいは子守のために女の子が学校に通わせてもら

ここにも現代に生きるアイヌの矛盾の一つがあります。衣食足りて、ようやく自分たちの文化を見直そうとしたとき、すでに自分はその担い手ではなくなっている。建前では民族の誇りを取りもどそうとアイヌ語教育を主張しても、二重言語教育は子供たちにとって負担でしょう。基本的には近代以前からの社会で使われていた言語で「今、目の前の事象をすべて語ることができるか」という問題です。アイヌの子に高等教育を受けさせる悲願と民族教育の矛盾。これも課題の一つです。

〈14〉 欧化熱の下火と女学の衰微

——特にキリスト教系女学への風圧——



「鹿鳴館」に象徴された欧化政策は、一般社会の伝統的生活感情や、当時の経済不況や続発した天災の中で、極めて不調な表面的榮華として、次第に人々の批判的となり、殊に欧化政策推進者と目されていた森有礼文相が「西欧かぶれの不忠者」と糾弾されて、二十二年二月紀元節当日暗殺され、また「鹿鳴館」自体が同年六月民間に払下げられるに至り、西欧志向の所謂「鹿鳴館時代」は僅か数年で幕を閉じた。

この時代に華やかに展開した女子教育、特にキリスト教系女子教育も、時代背景を敏感に反映して、急激に変容し、衰微していった。森文相の後をついだ榎本武揚は、同年六月、早速次のごとく、女子教育批判を行った。「女学校生徒中には婦人社会に於ける無鳥郷むちょうきやうの蝙蝠こうもろうを氣取り、兎角生意氣なる事を云い輕佻なる事を行う者多きが如し。予は今日の女子に授くるに余り高尚なる学科を以てするは不可なりと信ず。」

（東雲新聞）以来、教育時論や婦人雑誌の中に、西欧志向的女子教育への非難や、それらを戯画化した記事とともに、伝統的な儒的女性觀乃至女子教育觀の主張がしばしば現れ、華族女学校長細川潤次郎も「女子教育ノ方針ハ高等ノ教育ヲ施シテ女博士女学士ヲ養成セント欲スルニ非ズ……只淑女ヲ養成シテ他日ノ内助タラシメント欲スルニ在リ」（二十五年二月、大日本教育会雑誌）と述べて、女子教育の眼目は女子本人のためでなく、男子への内助に役立つためと主張した。

この様な社会風潮の変化につれて、キリスト教系女学校は軒並に入学者が激減し、かつて名流夫人や令嬢達の送迎用人力車が校内に溢れていたという東洋英和女学校ですら閑古鳥が鳴く淋しさで、さらに二十三年校長ラージ女史が暴漢に襲われて重傷するなど、「荆の道を辿らねばならなかった」と沿革史は伝えている。地方でもキリスト教系女学校への風当たりや迫害は相つぎ、廃校となるものや、「キリスト教」の看板を降ろして普通女学校になるものが続出した。また仙台の宮城女学院では、二十五年二月、日本の教育を要求した生徒たちのストライキ事件まで起こった。

これらの西欧志向的女学校に対する批判や非難に対して、明治女学校校長嚴本善治は、女子への高度な教育の必要を主張して、度々「女学雑誌」上で論駁したが、保守反動への趨勢を押し止めることは出来なかったのである。

児玉澄子がこたえます



高校生の娘の登校拒否について

相談します。志望する高校に不合格のため、女子高に入りましたが、いじわるな級友がいて気が重く、欠席がちでした。運悪く、二年になっても同じクラスになり、学校へ行く気力がなくなりました。中学までは、とても明るく健康な毎日を送っていましたが、今は夜中まで起きている生活です。先日は部屋ですすり泣いているので、入って行きましたら、「どうしてこんなになってしまったのか、とてもつらい。どうしたらよいか」と訴えます。母親としても耐えがたいのを耐えて「自分で考えるしかないわ」と、平静を装って答えましたが、かわいそうではまりません。近所に気がねして、全く外出しません。昔の積極性はなくなりました。友人に映画に誘われて約束しても、その日になると行けません。登校拒否の本にあるように、閉じ込めりの時期、暴力をふるう時期を通り、何年もかかるしか仕方ないのでしょうか。まだ初期なののでしょうか。このつらい状態から抜け出られるかもしれないから、いっそ、学校をやめさせようかと思いますが、どうしたらよいのでしょうか。



文面からしか判断できませんが、理由がはっきりしている登校拒否のように思われます。いじわるな級友のいる学校生活に適応できなくて、行けなくなったものと思

います。でも、「行けない」ということが重く心にのしかかっていて、心を病むようになっていく危険も感じられます。

お母さんは、登校拒否の本をお読みになって、初期なのか閉じ込めりなのか、「自分で考えなさい」と、自立を促すが、とあれこれ診断なさったり、対応を考えたりなさっておられますが、外側からのアプローチではなく、ほんとうに、娘さんのつらい気持を、そのまま、理解してあげようと近付いていくことはできないでしょうか。母親を拒否したり、心を割って話してくれない場合は、娘さんがもつとも信頼している誰かが、その役をしてくれないものでしょうか。今は、親の面子や、プライドや、立場よりも、娘さんの現在、そして将来への足掛かりの方が、はるかに大切だからです。

「生きる」ということは、そんなに格好のよい、とんとん拍子の、小ざれいなものだと思っていないので、「どんなふうになって生きているし、それなり、実も花もある」という考えです。その考えに立てば、今の女子高を辞めるもよし、又、別の高校に編入するもよし、定時制もあるし、いろいろな道が考えられます。要は、どんな道でも、苦勞はあるし、喜びもある、きまりきった道にしがみつかないで、心を自由に持って生きていけるか、その力をつけられるかです。まずは、お母さんが、世間に促われず、心を広く拡げて、娘さんに、「大丈夫！ 生きていける」という気持を伝えてあげて下さい。

——教育実習で学んだもの——

その2

湯 沢 静 江

中学校の教育実習であったが、その期間に、同じ地区の小学校の授業を、一日見せていただいた記憶がある。前にも述べたように大勢の教生が、それぞれの教室に配属されたから、児童の後ろには数人の教生がいたことになるが、休み時間ともなると、私たち教生の周りをみんなでとり囲み、スカートを引っ張る者、上衣の裾をつかむ者、なかにはそのために教生の服が、ビリビリと裂けたりして、大変な歓迎ぶりだった。何年生で、何の授業だったのか、忘れてしまったが、休み時間の様子からすると低学年だったろう。児童の順応性のよさに驚き、「先生、先生」と言われるたびにくすぐったい思いをしたことが印象に残っている。

わずかに二週間の教育実習ではあったが、自分の非力さと不勉強を思い知らされ、一方でそんな教生をも慕ってくる児童や生徒の純真さに心を打たれた。「古きよき時代の教生だったから」

と言えはそれまでであるが、この二週間の体験と、「家庭科教育とは何ぞや」と悩んだことの二つが、その後の私の教職生活におけるバックボーンになっていることは間違いないさそうである。

この数年、おもに私立大学へ進学した卒業生が、出身高校での教育実習を希望して来るので、何人かの学生を指導する機会があった。教員採用の状況が厳しくなっているので、指導した学生が全部教職につけるとは限らないが、彼等が実習に来たときには、次のことを必ず言いきかせている。

『H・R担任としては、①保健指導 ②生活指導 ③読書指導 ④進路指導 ⑤学習指導（一般的な）のそれぞれができなければならぬ。教科担任としては、⑤の専門の教科指導にウェイトがおかれるのは当然であるが、①④⑤までの指導も、教科指導のなかに織り込みながらやらなくてはならない。そんな難しいことは、はじめからできるわけではないが、教師という職業は究極のところ、指導する側の人間と、指導される側の人間がまるごとかわりあいを持つことで成り立つもので、毎日が真剣勝負だし、どこで生徒と切り結ぶのかという想を練りながら、完成することのない行脚（なげり）を続けるものだ』と。

● 政治の目 ●

ソフトエネルギーパスについて

湯川憲比古 ●

前号につづいて、「自治体」と「市民」の手によって解決が可能な「大問題」として、「エネルギー問題」をとり上げてみたいと思います。

原子力発電が、もはやハイテクでも何でもなく遅れた「ダサイ」技術であることは、多くの人々の認識するところだと思えます。スリーマイルやチェルノブイリをもち出すまでもなく、不確かな安全性、ひとたび事故を起した場合にコントロールができない「怪物」と化す不完全な技術であること、いつまでも残る危険な廃棄物など、最悪の技術の一つであることは言うまでもありません。

これに対して、エネルギー供給の中心を「集権型」の原子力や化石燃料ではなく、「分権型」の太陽熱や風力などの再生可能エネルギーに置き、それでも生じるエネルギーの需給ギャップには、省エネルギーで対応する、というエイモリー・ロビンズ氏の「ソフトエネルギーパス」の構想が提案されて10年になります。この構想は当初、非現実的とみなされることが多かったのですが、その後、省エネルギー技術や太陽エネルギーの利用技術、発電時の排熱で冷暖房や給湯を行なうコ・ジェネレーションの技術、最近話題の超電導の技術など、

むしろ先端技術の進展も原子力発電を必要とする方向へ進んでいます。政府もエネルギー需要予測を下方修正し（今後50年は年率2〜1%の増加）、原子力発電を相対的に低く位置づけた「複合エネルギー時代」を提唱しています。したがって、少なくとも今後の需要増加分をソフトエネルギーでまかなうことにすれば（その中の最大のものは省エネルギー）、新しい原発は不要となり、あとはソフトエネルギーパスの進展に応じて、一つずつ原発の運転を中止させていけばよいことになります。

さて、ここで「自治体」と「市民」の役割が登場します。具体的には、全国3323自治体（47都道府県653市23区2006町594村・86年10月1日現在・前号の数字を訂正します）での月間・年間のエネルギー消費量と生産量を電力に換算した統計づくりからはじめます（今はない）。そして、全国3323の自治体がエネルギーの節約と生産にとりくめば、あるいは「市民」の力でとりくませるようにすれば、ソフトエネルギーパスは大いに進み、原子力発電が不必要になる時もそう遠くない、と考えるのは樂觀的すぎるでしょうか。

○ 経済の目 ○

生活サイドから見た経済
現代の貧困 ④

円高不況と失業率

○ 福島 澄香

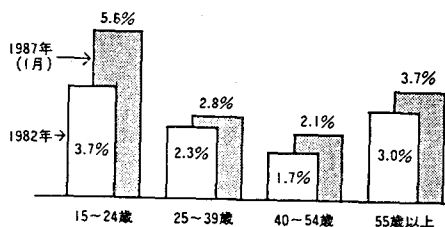
今年、私は学校の校務分掌でPTAの広報係になった。係のお母さん達は、関心の強い生徒の進路について、子どもがどう考えているかを特集するという。

三年生は六月に入り、卒業後二、三年たった先輩30名ほどを招いて進路懇談会をやる。生徒達は顔見知りの先輩達が各企業で厳しい勤務状況にもめげずに働いている様子や急に大人っぽくなった大学生に感心しながら進路を決める参考にするために真剣に質問する。お母さん達は、そんな子どもの様子や子ども

$$\text{完全失業率} = \frac{\text{完全失業者}}{\text{労働力人口}} \times 100$$

(「労働力調査」による計算)

若年層にひろがる失業(年齢別の失業率)



(出所) 労働省資料。

が自分の生き方に関わって進路をどう選ぶかと考えているのか取材したいと張切っている。私の学校は職業高校・商業科と農業科・畜産(食品化学・造園)なので、多くは卒業と同時に就職して経済的自立の第一歩を踏み出す。したがって父母にも生徒にとっても雇用・失業の問題は最も強い関心事なのでWe六月号で失業に触れた。その記事について二つの質問があった。ここではその一つ「欧米式の計算だと日本の失業率は倍になるのはなぜか」という質問に、少し詳しく述べたいと思う。

通産省は最近になって「米国流に計算し直すと日本の失業率の数値は二倍近くになる」と言いはじめた。今年一月、わが国の完全失業率は3%、その倍は6%となり、米国同期の6%に近づく。日本の失業率は米国のそれに比べ分母が大きく、分子は小さくされている。例えば、日本では調査期間一週間に、一時間でも仕事をした人、求職の希望があっても職安へ行つて求職活動をしない人は失業者に数えられないが、米国ではレイオフ(一時帰休)の人も、週労働時間が15時間以下の家族従業員も、就職口はないだろうと諦めて求職活動をしない人も失業者に数える。故に失業率の分子が日本より大きくなる。失業率の分母の労働人口も米国では軍人を入れないのに、日本では自衛隊員を入れているので分母が大きくなる。したがって、日本の失業率は欧米のそれより小さい数値が算出されることになる。

別の統計に、政府が三年に一度実施する「就業構造基本調査」がある。それによると、無職で職を求めている人は、100万人を越えている。前述の政府の発表した失業率3%の完全失業者数は184万人であった。このように一般に使われる「完全失業者」数は、実際に仕事がなく職を求めている人の半という実態から遠くかけ離れた数値である。

(続)

家族を越えたネットワーク

選挙のおもしろさ

● 中嶋里美

ナイロビ大学のタイファホールで開かれた「もし女性が世界を統治したら」のワークショップの様子が今、再び目に浮かぶ。あの時の女たちの声が今も私の耳にひびく。今回の統一地方選の結果を報じた新聞はこれまでの中で最も読んで楽しいものだった。共に運動をしたり顔見知りの私たちの名前がいくつも見られたからだ。やがて私のよく知っている女たちが首相になったり教育や外交を担う日が訪れるだろう。そして幼い時から進路を政治家におく女子がふえるだろう。本当にいい時代に生まれてきたなと思う。

とはいえ現実には地方議会に占める女性の割合は五パーセントにもみたくない。この一〇〇名中五名、五〇名中二・五名の数字は私に想起させるものがある。それは今から三〇年前位の高校である。女の教師といえば家庭科に一人と体育に一人、あとはみんな男たちといった具合だった。それが現在女教師率が二割程度になり、外からの国際婦人年の動きや、家庭科の男女共修をすすめる運動等のゆさぶりの中で少しずつ男女平等教育が根付いてきた。地方議会に占める女性率が二割程度になるには早くてもあと二〇年はかかりそうだ。当面

は議会に女たちをどしどし送りこまなくてはならない。それには議員になろうという女、送りだそうという女や男たちがふえなくてはならない。今回の選挙にかかわって大変なこともいくつかあったが、さまざまな出会いやスリリングな喜びもあった。それは自分達が考えてきたことを今までよりもずっと多くの人に読んでもらえたり、聞いてもらえたり、議論できたことだ。

芦谷薫さんたちと終電近くまでやった政策ビラ作りの夜が忘れられない。選挙運動期間中に十万余枚各戸に配布するものだった。「都政に女を」という項で、原稿用紙四〇〇字詰め一枚半ぐらいの訴えで、女たちが今でもどんなに差別されているかの現状を書いたものだ。私達が考えた文を共に練ってくれる男たちがいて、印刷、校正、配布という裏方を担ってくれる大勢の人達がいることを実感することが出来た。

私たちが日頃思っていることを卒直に、大胆によりわかりやすい言葉で、堂々と訴え、議論出来る場として選挙を考えてみたかどうか。選挙は実にドラマチックであり、人間を知る最高のチャンスでもある。

“ただの知人”を
ままちち
“擬似父”に

友達何人かと、アパートで会うことになっている夕方、最初に現れたのは「料理の上手な男のヒト」という素晴らしい人だった。そこで、私たちは、あとから増える人数分も含めて夕食を作った。

私の冷蔵庫にはよく、一人分には多すぎた野菜などが冬眠しているが、この日もキャベツが冬眠していたので、その半分を無理矢理、にくにハンバーグ（本日のメイン）に利用してもらった。

人もそろい、話し合ううち、夜が

更けた。そこへ電話が鳴った。

「モシモシ？ あたしゴジラ。あ、おとーさんっ♡」

お父さんと聞いて、部屋にいる男のひとたちは急に、物音をたてるのをやめた。ひとしきり、やけにノリのいい私の声ばかりがこだました。

受話器を置いた時、友人は、

「お父さん、酔っ払ってたの？」

今のは、いわゆる「ただの知人」からの連絡であって、別に酔っ払った父としやべっていたのではない。

ではなぜ電話の人をおとーさんと呼んだかと言いますと、

——あるとき、みんなで電車の切符を買おうとしていて、私は百二十円必要なのに八十円も足りなかった。それで近くにいた知り合いの人に向かって、

「おとーさん、八十円ちょうだい」と声を張り上げたのだ。いきなり娘と化したごじらに、思わずお金を恵



青春ふりかけ せじちち

んでしまった時点で、単なる知り合いであつたその方は、私の擬似父としての人生を歩むこととなった。

私の中の良い娘の面が、擬似親子関係の中でだとすんなり顔を出す。

現実の親の前ではこうはいかない。だいたい、八十円で感動したりしない。やっぱり非現実との差なのかな。

ままちちにもらつた五分づき米（多分四〜五合あつた）はそろそろなくなりかけているけれど、シングルだと、いろんな物がゆつくり減る。にんにく臭い台所で翌朝、お弁当のサンドイッチのために例のキャベツを千切りにしたら、たつたの一片で、十分な量の千切りが出来てしまった。腐る前に消費しなきゃ、と思つていても、タツパーウェア携帯で擬似家庭へ遊びに行つたりしてるから、なおさらキャベツの冬眠を長引かせたりしてしまうわけだ。

教科のカラを破る

—常陸れいさんのしていること—

半田 たつ子



水仙を大胆に染めぬいた紺のワンピース、ウエストを黒革のベルトでキュツと締め……常陸れいさんの今日の装い。今日の授業は、「ろうけつ染め」だ。八王子からバスで二〇分、浅川のほとりの檜原中学校。教室の窓外には緑の田園が広がる。

八王子は織物の町。だが、中学生の生活は、地域の誇る文化とは無縁だ。常陸さんのおつれあいには、八王子の土を愛する陶芸家、常陸さんもまたくらしをいとおしむセンス抜群の人。ろうけつ染めのシーズンには、ありったけのろうけつ染めの服をかわる着用に及ぶ。プロが作ったもの、自分でリフォームして染めたTシャツやスカート。ろうけつ染めの源流ともいわれるジャワ更紗や、修学旅行の時、美術商から買った藍染のふとん地の服など。先祖が伝える文化を、現代の私たちが取り次ぎ生かす、生きた事例として。

二時間目、三の二は、図案の考案。すでに実物大の下絵をすませ、布に写す子もいるが、手つかずのまま陽気にしゃべっている子もいる。

四時間目は、三の四が、いよいよろうけつ描きをするところ。ハンカ

チーフ程度の小布のためし染めをしてから、と常陸さんは言われたのだが、小布を忘れた渡辺くんは、まっ先に大きなかぶの図案に筆をおろす。ろうけつ染めは二人に一台、生徒たちはいきいきハツラツ。のどかな授業風景で「荒れる中学生」など、どこか話かと思ってしまう。緑の環境のせいかな、常陸さんのお人柄によるものか、教材の持つ力か。恐らくはそのすべてによるのだろう。

常陸さんは前任校の恩方中学校で、全面共学をやってきた。「生活人としての物の見方を養うのに、男も女もない」と技術の先生を説得、地方に古くから伝わる手うちうどん、けんちん汁、雑煮、かしわ餅、まゆ玉作りなどをどんどん取り入れた。地域の民俗を調査研究している社会科の先生の助言も得て。生徒たちも、代々伝わる雑煮の作り方や、まゆ玉に小麦粉を使っていたのは、米がとれなかったからだ、など調べてきて、くらしに根づいた授業を創造できた。

共学と無縁だった檜原中に転任が内定すると、恩方中でやってきたことを話し、まず一年を共学にすることを赴任以前に決めてしまった。四年目の現在は、一・二年完全共学、三年は一時間共学、二時間は男女別に技術と家庭をやっている（その概要は左頁に）。

常陸さんの強味は、フランクに語り合って教えを仰ぎ、家庭科も理解させ、仲間をふやしていく力だ。今日の教材でいえば、理科の教師から、染料に使われる植物の知識を得、図案については美術の教師に助言を仰ぐ。視聴覚教材を使う日は、朝の打ちあわせでその旨を知らせ、授業を公開し、共学の意義と教科への理解を深めてもらう。保育では、体育の教師と指導内容の打ちあわせをする。父母会では、機会あるごとに「家庭科はいのちやぐらしに關する教育である」と話し、女子用教材という先入観を潰す。

1年(男女・1時間)	2年(男女・1時間)	3年(女子・2時間)	3年(男女・1時間)
<p>技術・家庭科をなぜ共学で学ぶか</p> <p>〔食物〕</p> <p>①なぜ食べるか</p> <p>②食物の役割</p> <p>③炭水化物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米について ・でんぷんの糊化 ・調理実習一おにぎり／ルーから作るカレーライス ・小麦粉について ・手打ちうどん ・砂糖について <p>〔住居〕</p> <p>①すまいの歴史</p> <p>②現代のすまいと問題点</p> <p>③生活のしかたとすまい方</p> <p>④家具の配置のくふう</p>	<p>〔被服〕</p> <p>①被服の役割</p> <p>②わたしたちの衣生活</p> <p>③布地、繊維について</p> <p>④衣類の表示</p> <p>⑤洗たくについて</p> <p>⑥袋作り</p> <p>大きさ・色・形自由、作品は林間学校や通学のサブザックに利用</p> <p>〔食物〕</p> <p>①食生活と消費者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食品添加物 ・食品の品質表示 <p>②青少年向きの献立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理実習 	<p>〔被服〕</p> <p>休養着—パジャマの製作</p> <p>色・形自由</p> <p>修学旅行にのみまきとして使用</p> <p>〔食物〕</p> <p>①成人の栄養について</p> <p>②たまごについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理上の性質 ・調理実習—マヨネーズ作りとそれを利用した献立／プリン作り 	<p>〔被服〕</p> <p>ろうけつ染め</p> <p>①染色について</p> <p>②染料について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・草木染めと日常生活 ・化学染料と日常着 <p>③ろうけつ染め</p> <p>作品は文化祭に展示</p> <p>〔保育〕</p> <p>①学習課題二つ</p> <p>②子どもについて</p> <p>VT R赤ちゃん</p> <p>③胎児発育上の障害として考えられること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遺伝と突然変異 ・母親の病気、薬害、ウイルス感染、喫煙、ストレス・公害・放射線・食品添加物・農薬

(技術の内容は省略)

この日は、近くの中学の根津公子さんも、授業をやりくりして馳けつけて下さっていた。常陸さんと根津さんは地域の中学に呼びかけて学習会を作った。小学校の先生も含めて十名ほどのメンバーが集まっている。

帰り、中学生のための反核反原発副読本「ノンちゃん原発のほんとうの話」を作って、全国教研でも注目を浴びた同校国語科の幸地正憲さんも食事をつきあって下さった。他教科に働きかける常陸さんは、幸地さんの申し出もきいて、家庭科でこの本を使って授業したという。できればそのレポートを来年の全国教研で発表してもらいたいと、幸地さんは精悍な顔に人なつこい笑みを浮かべた。

常陸さんのユニークさはまだある。二年生が作った袋は、通学用のサブザックにもなる。補助鞆を制定し、それを守らせようという会議で、「形も色も自由な袋を家庭科で作りながら、それを使っていけないのですか」と発言する。技術科で作った織機で、生徒たちはあったかいすきなマフラーを織った。マフラー不可の校則も、「せっかく作ったマフラーができないなんて」と破ってしまったのだという。

研究し、緻密に組み立てた授業を、教室内で終わりとするのではなく、仲間を作り、自分も仲間も変えながら、家庭科を武器に校内の管理体制をもつき崩していく力は、凄い。

共学家庭科で男女平等教育をすることに燃えている根津さんが、二時間の参観のあと、「手を使う授業がしなくなった」と呟いたのも、おもしろかった。今日のような授業が、50分で切れてしまうことが、なんとも口惜しかったけれど……。



私 あなたに

◆ここブリュッセルでも、新ジャガのおいしい季節になりました。居住地の区役所で「職業なし……」の身分証明書を発行してもらって早、九ヶ月になろうとしています。毎月Weをお送りいただきありがとうございます。ますます内容が充実し、活気を増してきたWeは、一人ぼつんと、時に取り残されたように生活している私を圧倒するほどです。遅ればせながら、家庭科男女必修への大きな一歩、おめでとございます。

家庭科の現場とは、今直接かわりがなくまた、家庭科がかつて私たちが修めたような教科であるならば、二度とかかわりたくないと思ってきた自分は、正直のところ、家庭科の門外漢だという感じがぬぐいきれません。それでも以前、誌上で、より幅広い読者を得るために、つまり私のような人間もWeの仲間に加わりやすくするために、Weから「家庭科」の枠をはずしては、という読者の声を読んだとき、それには賛成できませんでした。

その考えは、確かに魅力的ではありませんが、それよりもまず、家庭科に対する半田さんの「こだわり」（というのが当たっているかどうかわかりませんが）こそが、Weのいちであると思いましたが。このこだわりがなくねば、Weは、いかに「自立した男と女を、人間らしい生活を、差別のない社会を」という揺るぎない主張を掲げていようと、いつしか散漫に解体してしまうのではないかとも思いました。

そして今、改めてそれを確信しています。これからも「一教科の枠を越えて」かわろうと努力しつつ、Weの行動と行方を見つめていきたいと思っています。

ブリュッセルでの生活のこと、ぼちぼち自分のために形にしていかなくては、と思いますが、自分のことに集中できる夜の数時間は語学の習得と、物を読むこと、そして最近テレビを借りたので、それを見ることにほとんど費しています。それに、何よりも、言葉そ

の他の諸々の理由で、この国の現実のすべてが、一枚のペールの向こうにあるようなもどかしさを感じています。

このところ、日中は15度前後まで気温が上がる暖かい日が続いています。木々の芽もみえるふくらんできました。先週末には郊外の森へ出かけ、時間を忘れて散歩いたしました。息子は三歳になったばかり。森に着いたとたん、人が変わったように、よく歩き、走り、笑い、足許の木ざれや葉や土に夢中になつてアタックしている小さな姿を見て、森「自然」ではなく、あえて「森」と書きたいほど、この森は魅力的です！のもつ不思議な力を感じます。

最後に、六年目のWeに万歳！ お元気で。

（ブリュッセル・杉山智子）
◆少し古くなった報告ですが――。

長岡京の「家庭科の共修と共学を考える会」では、一月二十五日に三回目の集まりを持ちました。男性一名を含む十七名が、円型にテーブルを囲んでの集い。

教員生活三十七年の穴井紀子さんから、小学校での家庭科の様子を、戦中、戦後、そして今は……と話していただきました。その後、雑談の中で、いくつも担任してこられた家庭

科の授業時間を思い起こして、ふと語られました。

「……いつも男の子の中には、特別器用で上手に縫う子がいたね。その反対にまったく縫えない子も大勢いたけど……」。

ある年——その時も器用な男の子がいて、あんまり上手に針を使うので、友達が『○○君は大きくなったら、外科のお医者さんになつたらええわ!』と言ったことがあった。そうして、その子は本当に医者になって、今は整形外科医をしている。……女の子の方は、たいていみんな似たりよつたりで、まったくできない子もいないかわりに、特別とびぬけている子もいなかったね……」。

私は大変おもしろい現象だと思って、その日夕食のあとで、わが家の子どもたち(高二と中三の女の子)に話しました。すると二人は異口同音に

「私たちの時も、そうやった!」

「あたりまえや!」

と言うので、よく聞いてみますと、男の子はよくでたら先生にもみんなにもほめられるし、できなくてもどうということはないけれど、女の子はちょっとぐらいできないと恥ずかしい。だから、みんな、大体はできるよ

うに格好をつける。そうかといって、それ以上でなくてもどうということはない——ということです。

そう言われて、私は気がつきました。男の子にとつては、家庭科も他の教科と同じ位置にある。だから国語や算数の時と同じようにずばぬけている子もできない子もいて、そのことが他の教科の授業と同じように、先生からも友人たちからも評価される。ところが、女の子にとつては、小学生の時からずでに、他の教科とは違った位置づけになっている。そこでは、教師も本人たちも、無意識に他の教科とは異なつた思いで家庭科をとらえているのだ、と。

そうして、その会場で、穴井先生の話を受けて「その縫うことにずばぬけていた子が、女の子だったとしても、同じように、将来の職業に結びつけて、医者になつたらいいと、誰かが言つたのだろうか」と疑問の形で出された問題とあわせて、私は、家庭科を男女で学ぶことの意味を、改めて考え直しています。

男の子と女の子が、同じ教室で学び、内容の高い同じ教材を使って学ぶだけでは解決しない多くの問題があり、そこにこそ、社会通念としての男女の性による役割分担意識を取

り払っていくカギがあるように思います。

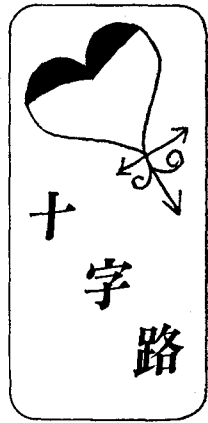
(長岡京・金森順子)

◆『家庭科新時代』、ずしりと重く立派な本になりましたね。待たれていただけに、公開ゼミの帰りの列車の中で夢中で読みました。みんな一度は目を通した実践なのに、改めて新鮮なものを感じました。やはり生徒を生き生き動かしていращしやるものには感動しました。私は「思い」ばかり過剰で恥ずかしい限りです。もう一度挑戦ということも今ではままならなく、さびしい限りです。「狼に育てられた子」については、今までもいろいろ意見を耳にしましたが、福島先生のお考えにも一理ありますし、一度お話し合いたいなと思いました。実践を改めて通して目にするにより、他の方の所でも交流したいなあとという思いがふくらみました。何か又新しく誕生したという気持ちからでしょうか。

(明石・入江一恵)

◆『家庭科新時代』、私が想像していたよりもずっとすてきな(失礼?)御本でした。ずしりと手ごたえのある重味に負けない中身の重さ。全く半田さんの仰せの通りの「珠玉」ばかりで、改めて感激をしながら読みつづります。

(京都・森幸枝)



■北海道 暮らしの中から反核の声を（道新 5/4）

幌延問題に取り組んでいる札幌市内の女性団体などが主催し、三日、「ノー／ノー／核のゴミ捨て場 女・子どもの一万人フェスティバル」が札幌市民会館で開かれた。米国のスリーマイル島原発事故調査に参加したアイリーン・スミスさんが、住民から直接聞いた事故のようすと、汚染による後遺症の苦しみをなまなましく報告したほか、幌延町や天塩町の酪農家からは、核廃棄物処理施設が酪農の崩壊をもたらす不安が述べられた。

■秋田「親と同居」望んでます（さきがけ 4/15）（高橋芳恵）

老後問題をテーマに学習活動を行なっている秋田市の主婦グループ「あしの会」が、秋田大生を対象に実施した「高齢化社会へのアンケート」（二三人対象）で、「結婚した

ら両親と同居を望むか」では男女とも四〇％が同居を望み、「今の高齢者に望むこと」では「生きがいを持ってほしい」（五〇％）「身ざれいにしてほしい」（二六％）「自分でできることはやってほしい」（同）など。同会では「高齢化社会は一日にして訪れるものではなく、若いときの延長線上にある。若い人には自分にとっての老後はどうあるべきかを考えてほしい」と語っている。（山崎久美子）

■群馬「子どもの目に映った戦争」展（朝日 5/4）

第二次大戦中、ナチス・ドイツ軍に占領されたポーランドの子供たちが描いた画集が、今、日本全国で大きな反響を呼んでいる。高崎市の県退職婦人教師の会会長岩崎千枝子さんは、偶然手にした雑誌でこの画集を知った。「私は平和教師になりすましながら、子供たちには戦争体験を生のまま描かせようとしなかった」との反省がある岩崎さんは、協力者たちと、六月に原画展を開催する。

■千葉「環境をどう守る」（朝日 4/6）（林田初恵）

近隣都県からの「越境ゴミ」も目立つ県内で問題となっている産業廃棄物処理の実態を明らかにし、開発と保存の新しいあり方を考

えるシンポジウムが五日、山武郡芝山町で開かれた。その中の関係町村長らのパネルディスカッションで「人の行かない山林・畑・田んぼには、不法投棄のごみの山だ。業者も廃棄物を受け入れろ、と言ってくるが拒否している」（松尾町長）との報告も。（木田直子）

■東京 理解はあるが協力しない（毎日 4/5）

仕事を持つ主婦は出勤前に朝食作り、職場の休み時間に銀行へと忙しい——東京都民銀行が「外で働く主婦の生活意識と行動パターン」について調査したところ、こんな結果が出た。夫がどのように対応しているのかについては「理解しているが特に協力はしない」（四割）が最も多い。「家事分担など協力してくれる」夫は二割程度だった。（福井晴江）

■福井 福井女性は控えめ？（福井 4/17）

機会均等法施行から丸一年。福井商工会議所が働く独身女性を対象に行なった意識調査によると、お茶くみなど雑用への不満を持ちながらも、男性上位を是認する消極派が大半、全国平均と比べても意識改革が大きく立ち遅れているという結果がでた。この結果について同所では「女性自身の意識改革が必要だが、一方で女性の『目覚め』を妨げている風土が

あることを見逃してはならない」と語っている。

(山崎京子)

■新潟「平和の大切さ」伝えたい (新潟日報 5/5)

新潟市の母親のグループが、在日朝鮮人の半生を関西芸術座の新屋英子さんがひとり芝居で演じる「身世打鈴(しんせだりょん)」の上演準備に取り組んでいる。「いかに私たちが事実を知らなかったことか」「時代のせいだと後に押しやることなく、目を開いて事実を見据えなければ、また同じことを繰り返しかねない」。大勢の人たちに見てほしいと呼びかけている。

(山口久子)

■静岡「いじめ」被害50%超す(朝日5/3)

静岡市青少年輔導センターの調べによると、昨年一年間の市内の小中学校での「いじめ」被害率(被害を受けた者が全体に占める割合)は、五〇・三%で前年より十二ポイント増。特に小学生の増加が目立ち、六五・五%となった。被害の対応では、「だれにも言わない」が二八・八%を占めている。(平井和子)

■長野「どうしてこの世にいじめがあるの」

(信濃毎日4/25)

長野市篠ノ井西中二年の上原夕子さんがいじめを苦にした遺書を残して自殺した問題で

市教委は同日開いた校長会で、各校のいじめに対する指導態勢の見直しを指示した。同中では「担任がそのつど指導していたが、徹底しなかった」としているが、決して同中だけの特異現象ではないいじめに対する指導内容、学級づくりのあり方を見直す必要に迫られている。

(宮崎春美)

■大阪、大学入試に向けコース別学習(朝日4/16)

府教委は全日制府立高校で、生徒の興味や学力に応じたコース別学習をとり入れることにし、教育次長、指導主事、校長らで構成するプロジェクトチームを発足させる。研究課題は能力のある生徒の力をさらに伸ばすための学習指導と、基礎学力の保障の二本柱。学力差の大きい英語、数学、国語などは学級編成の枠をはずし、基礎的なものから発展的なものまで二つか三つのコースに分ける。浅野素雄教育長は「ハードからソフトへ」の時期が来た。生徒が目的を達するには、大学入試を突破しなければならぬ。そのための学力をつけてやることに遠慮しすぎているのではないか。私学ともいい意味で競っていかねければならない。現場の意見も聞いて、大胆に進めたい」と話す。

(徳永美和子)

■鳥取 均等法は人ごと? (日本海)

労働省鳥取婦人少年室によると「施行前から使用者側からは問い合わせも多く、勉強を重ねて法律の詳細を検討していたようだが、当の働く女性からのものは、周知の上でかあるいは全く関心がないのか、ほとんどないのが現状」という。ある事業所から「定年年齢に男女差があったので直したいと思うのだが、女性労働者が今のままでいいという。どうしたらよいだろうか」との相談も。

(前田享子)

■沖縄 平和行進団が出発(タイムス5/9)

九日北部と那覇の三コースに分かれ、十五日に那覇市で開催される県民総決起大会に向けてスタートした。主催者を代表して、護憲反安保県民会議の渡久地政弘事務局長は、「県民が祖国復帰に望んだのは、核も基地もない平和な沖縄であり、平和憲法の下への復帰であった。しかし、県民の願いとは裏腹に、復帰十五年を迎えた今日、基地機能は強化され、依然として広大な軍事基地を抱えている。沖縄から再度、反戦の闘いを全国に広げよう」とあいさつ。十回目を数えた平和行進は、復帰十五年、憲法施行四十年の節目を迎えたことで大きな盛り上がりを見せた。(大嶺麗子)

より103人増。全議員中1.3%。

婦人有権者同盟副会長の紀平梯子氏は、予想以上の支持を得たのは「給食、洗剤、教育、環境など身近な問題で運動してきた成果の現れだろう」と。(読売、5・14付)

◆婦人の地位向上へ新国内行動計画◆

総理府の婦人問題企画推進本部(本部長・中曽根首相)は5月7日、婦人の地位向上を図る「西暦2000年に向けての新国内行動計画」を決めた。'85年7月採択の国連の「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」やこれまでの国内行動計画を踏まえてつくられた新計画は、実際上の婦人の地位向上を図るのに今後十数年間が重要な時期と位置づけ「男女共同参加型社会の形成を目指す」とうたっている。(朝日、5・8付)

◆「尼」—女性の法名に用いなくてよい◆

わが国屈指の仏教教団、浄土真宗本願寺派(本山・西本願寺)は、数百年間にわたり女性の門信徒、僧りょの法名に冠してきた「尼」の字を用いなくてよい、との方針を打ち出した。時代の流れに合わせた大改革で「男女に区別をつける必要はない」というもの。(毎日、4・20付)

◆黒川能、女の舞—500年の禁解く◆

約500年間、女性が舞台上上がることが禁じられていた山形県東田川郡郷引町黒川に伝わる「黒川能」で5月3日、初めて女性が舞台を踏んだ。歌人の馬場あき子氏ら3人で地元の春日神社に舞囃子、仕舞を奉納した。黒川能を支えてきたのは春日神社への信仰で、その伝統は、親子が同居して農業を営みながら男性だけの手によって受けつがれてきた。だが、近年の農業事情の変化で農業離れによる後継者問題が生じ、「将来、女性も登用しなければならなくなるのでは」との声が地元から出てきたため。(朝日、5・4付)

◆自然保護「必要」総理府調査◆

国民の自然保護に対する関心が高まっている中、総理府は4月19日、第2回「自然保護に関する世論調査」のまとめを発表。昨年10月下旬、全国の15歳以上の男女3000人以上を対象に実施、有効回収率79%。

自然保護については、「人間社会との調

和を図りながら進めていく」と考えている人62.7%。「人間が生活していくために最も重要なこと」と自然保護最優先とした人29.3%も。

自然公園内に道路やロープウェーなどの観光施設を造ることにに対し、「ある程度の観光開発も図るべき」とする人49.2%だが、「自然を守るためにはこれ以上観光開発をすべきでない」とする人も38.1%。東京都区部では「開発すべきでない」(49%)が「ある程度」(46%)を上回っているが、全国の町村部では逆に「ある程度」(50%)が「開発すべきでない」(32%)を大幅に上回った。

人々がお金を出し合って土地や建物を買ったり管理するナショナル・トラスト運動を「必要」と答えた人69.1%だが、「そのためお金を出してもよい」とする人は21.8%。(朝日、毎日、4・20付)

◆文部省が両親に手引書?◆

文部省がまとめた父母向け手引書『現代の家庭教育—小学校低・中学年期編』が、5月2日までに都道府県教委などに配られた。子育ての全面見直しを求める内容で、「子どもはもっとけんかをしてもよいのでは」との提言も織り込まれている。しかし、「受験競争など根っこの問題にまずメスを入れなくては大胆な提案も空回り」と指摘する声も出ている。手引きは、坂本昇一・千葉大教授を中心に学者・教員らで作成、約300頁。2年前に「乳幼児期編」を出しており、今回はその続編。(朝日、5・3付)

◆家庭医充実を提言—厚生省懇談会◆

身近な医師である開業医を、今後「家庭医」としてどう育て、増やしていくかを話し合ってきた厚生省の「家庭医に関する懇談会」(座長、小泉明・昭和大医学部教授)は4月24日、「病院勤務の専門医ばかりが増え続ける今日、大切なのは地域の家庭医の役割を見直し、質、量ともに充実させていくことだ」として、期待される家庭医像、大学教育も含めた養成策、他の医療機関や福祉施設などとの連携体制などを盛り込んだ報告書をまとめた。厚生省は、来年度以降モデル病院を選んで家庭医養成のための研修や、文部省を通じ大学カリキュラムの改善、家庭医の診療報酬の見直しなどに取り組む。(朝日、毎日、4・25付)



◆朝日新聞阪神支局、襲撃される◆

5月3日、朝日新聞阪神支局を暴漢が襲撃、散弾銃で発砲し、記者一人が死亡し、一人が重体となった。日本新聞協会（全国の新聞、通信、放送会社計163社で構成）は8日、同記者殺傷事件に対し、「暴力の威圧によって言論・報道に影響を与えようとする動きは、断固として排除しなければならない」とする声明を発表。新聞協会が取材・報道にかかわる暴力事件で声明を出すのは、戦後4回目。

15日には、「国家秘密法に反対する市民ネットワーク」主催で、東京・一ツ橋の日本教育会館において、表現の自由を守り抜くための緊急市民集会を開き、約200名の参加者が詰めかけた。（各紙、5・3～15付）

◆「チェルノブイリ」1周年

反原発の集会、世界で日本で◆

世界を放射能の恐怖に巻き込んだソ連のチェルノブイリ原発事故から丸1年の4月26日、世界各地で反原発の集会が開かれた。

札幌市では、市民運動の婦人たちが、北海道北部の留萌支庁幌延町を誘致している高レベル放射性廃棄物研究・貯蔵施設（核廃施設）建設計画と、原発に反対するデモ行進。わが国初の核燃料サイクル施設建設が計画されている青森県では青森市で「食べものと放射能を考える市民集会」。東京・日比谷公園では、日本消費者連盟や反原発団体主催の「4・26原発とめよう！ 東京行動」。和歌山県では関西電力の日高、日置川両原発立地計画に対し、「ふるさとを守る女の会」（日高郡日高町）など、県内5地域で女の立場から原発に反対するグループ5団体が「紀伊半島に原発はいらない女たちの会」の結成集会。四国電力・伊方原発や計画中の北陸電力・能登原発に反対する主婦らが中心となり、それぞれ松山市、金沢市で集会やデモ行進。大阪では、消費者運動、自然保護の市民運動団体約20団体が参加し、チェルノブイリ原発事故1周年共同

行動が開かれた。

ソ連、チェコ、イギリス、スイス、オランダ、西ドイツなどでも反原発集会やデモが行われた。（朝日、4・27付）

◆「核戦争ある」3人に2人—高校生調査◆

日本高等学校教職員組合は高校生を対象とする第3回憲法意識調査の結果を5月2日公表した（第1回'77年、第2回'81年）。11道県の普通科、職業科、家庭科、定時制の生徒9411人を対象に昨年11月調査。

今回初の質問項目「あなたは核戦争が引き起こされる危険があると思いますか」に対し「思う」68.4%で、「思わない」8.1%を大きく引き離した。「地球上から核兵器をなくすことができると思うか」には「思う」11.5%で「思わない」が68.1%。

第1回からの継続質問で「自衛隊は憲法に違反している」との回答は38.1%（'81年32.7%、'77年29.7%）と増えたが、「国民主権の原則と天皇の存在に矛盾を感じる」は29.4%（'81年35.9%、'77年43.8%）と減。

選挙権の18歳引き下げについて、「賛成」16.8%で'77年18.5%から微減傾向、「反対」も32.2%（'81年40.6%、'77年43.4%）と更に減少。「どちらともいえない」「わからない」が増えて過半数を超えた。（朝日、5・3付）

◆統一地方選で女性進出◆

統一地方選での女性の進出結果を（財）市川房枝記念会がまとめた。

〈首長〉5市2特別区1町1村で立候補、いずれも落選。

〈道府県議〉180人立候補、52人が当選。大部分が革新政党で、無所属4人。新人29人、元1人、平均年齢47.7歳。同時に行われた東京都議補選でも2人当選。今回非改選を合わせると総数63人。全議員中女性の割合2.2%（前回1.3%）。女性県議0の県19あり、第1回以来1人も出ていない県2。

〈市区議〉777人立候補、637人当選で、前回より149人増。全議員中4.8%。

〈町村議〉339人立候補、267人当選、前回



〈表紙のことば—加藤由美子〉

星空を眺めるには絶好の季節到来。それなのに初夏の薄暮にまたたく乙女座はいつも見そびれてしまう。争う人間にあいそづかしをした神々の中、ただ一人地上に残り人間とつき合った女神がきらめく星座。短時間でも会ってみたいね。

★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol. 1〉 〈vol. 2〉 〈品切れ〉
 〈vol. 3〉 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 11月号 “病む”ということ
 84年増 自分らしさをこそ
 2・3月号 “育てる”ということ
 〈vol. 4〉 4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 いま、熱く女の時代
 11月号 みのりの秋に
 12月号 人間と土を生かす
 85年冬増 自分らしさをこそⅡ
 1月号 暮らしの文化を探る
 2・3月号 水はいのちの泉
 〈vol. 5〉 4月号 幼い日—大人は
 忘れてしまった
 5月号 子ども—大人の勝手な思い込み
 6月号 “いじめ”—その根っこは何が？
 7月号 性—小・中・高校生は何を思う？
 86年夏増 こどもたちへ—大人になる旅
 8・9月号 親—いま、学校に何ができる？
 10月号 家庭科—いま新しい地平に立つ
 11月号 家庭科—どう変える、どう変わる
 12月号 平和—今年を顧みる
 86年冬増 自分らしさをこそⅢ
 1月号 女性—世界を変え得るか
 2・3月号 明日—人はみな成熟に向かって
 〈vol. 6〉 4月号 先生は悩んでいる
 5月号 情報化社会の光と影
 6月号 学校給食で論争しよう

◆夏季フォーラム——現地山形では地元の方々が奔走されて、準備が着々と進んでいます。東京では、若い西内みなみさんが実行委員会の中心となって、たいへんがんばり、力を発揮されておりです。毎回、きちっとしたレジメを準備されてきて、並の努力の方ではない感じがしています。大きなテーマに負けないよう、今、分科会の一つ一つを詰めています。多くの方々の参加をお待ちします。(青木)

◆先日久しぶりに高校時代の友人と話して、懐しく思い出した。Aさんはセーラー服の文をつめて、スカートもミニだったナ。三年の時、B君の学生服の下にピンク混じりのチュエックのシャツを見てドキリとした。似合っているかより、反骨精神をカッコイイと見ていた。私は透明のマニキュアしかできなかったが、先生方も見逃しがうまかった。肝心のところで片目をつぶってくれた。(中野)

◆五月七日から三カ月遅れの全国教研が東京で開かれた。女子教育もんだい分科会では毎年、家庭科の男女共学が検討事項だが、「もはや家庭科のことだけをとりあげる時期ではないのでは。教育全体の問題では」との意見が出た。同分科会で話し合われたことは、もはや「女子」だけの問題ではない、と私は思う。◆Weの購読者、現状維持もできないまま87年度出発。お仲間のテーマは「馬場」(馬場)にもう一度お声を／(馬場)ていいのか「ガーン」(半田)

♥初めて山形でフォーラムを開きます。この試みが、次は関西で、九州で、北海道で、と広がりを持てたらどんなにうれしいでしょう。『家庭科新時代』好評です。新時代の家庭科への船出の書、の評も。武田秀夫さんの朝日新聞の連載コラム「色鉛筆」、心がひたひたとるおいます。読んでいらつしやいますか？ 青葉若葉の美しい季節に楽しい話題は素敵です♥ところが次号

新しい家庭科—

Vol. 6 No. 4 1987年6月20日発行
 ¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)
 編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所／(有)若佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

'87We夏季フォーラム申込書

右記をよくお読みの上でご記入下さい
(該当するところを○で囲んで下さい)

お名前		
お仕事 学校名など		
お子さんづれ の場合 お子さんの名前	(男・女) (歳)	
ご住所	〒 Tel ()	
参加日	8/1(土) 8/2(日) 8/3(月)	
宿泊日	8/1 8/2	
希望する 交流会	1/1 作りたい交流会 ()	
分科会	2/2 1 2 3 4 5 6 その他に作りたい()	
関心をもっ ていること 語りたいこと		
昼食の希望	(宿泊しない人) (反省会に参加希望の人) 8/2 500円 8/3 2000円	
紅花資料館 見学の希望	(先着順30名まで) 有 無	
	大 人	子 ども
参加費		
宿泊費		
昼食費		
合 計		

¥

現金書留・郵便振替で上記の
通り送金します。

1987年 月 日

☆プログラム

★は子ども活動一子ども係はありますが、係でない人も自称子どもも歓迎 (★)は子ども・大人いっしょの活動

8/1(土)		8/2(日)		8/3(月)		
2:00	受 付	9:30	(★)早朝ミニハイク(希望者)	7:00	朝食	
2:30	開 会<オリエンテーション> みんなうちとけあって(★)		<全体会> 「くらしの場から世界を変える」 星寛治さんと共に ★子どもは、大自然の中で遊ぼう	9:00	<全体会>フォーラムを顧みる(★) 見学に出発(★) マイクロバス2台で ①出羽の織座②東光の酒蔵(政宗 の資料もあり)③上杉記念館 (1台は①②を逆に)	
3:30	<全体会> 「家庭科にとって地域の生活文化とは —山形の場合—」 佐藤慶子さんと共に ★なかよくなろう、友だち作ろう		12:00	昼食	12:00	上杉記念館で解散 バス1台は米沢駅まで
5:30			1:00	<分科会> 1.地域についての私たち 2.原子力発電と私たち 3.新しい政治、新しい選挙運動、や ってみませんか 4.いま、家庭科とは 5.教育とコンピューター 6.★子ども活動	午 後	実行委員と有志による反省会 昼食を共にして 希望者のみ紅花資料館研究所見学 (実行委員が案内します)
6:00	夕食 (★)子どもづれの方と子ども係は一緒に					
7:30	<分散会> 「山形のくらし—見たり、聞いたり、 話したり」(★) ○ビデオで見る古代織 ○語り部の方による山形の民話 ○一刀彫りの実演とお話 ○各地のおみやげの交換会 など ★子どもたちはおやすみタイム(子ども たちの部屋で)—希望する子集まれ 大人は「この指とまれ式交流会」	5:30		見学場所 ● 出羽の織座…全国唯一原始布織工房 米沢市門東町1-1-16 0238(22)8141 ● 東光の酒蔵…東北最大の土蔵、伊達政宗の資料もあり 米沢市大町2-3-22 0238(21)6601 ● 上杉記念館…上杉家の資料と献膳料理 米沢市丸の内1-3-60 0238(21)5121代		
		6:00	夕食			
		7:30	(★)キャンプファイアー いい思い出つくろう			
9:00		9:00	★おやすみタイム(子どもたちの部屋で) 大人は { 分科会を伝え合い 各地の読者会を語る			

☆参加のための費用(前納)

初めての試みとして、参加者全員行事災害保険に加入します。自宅を出てから帰着するまでの通常の経路における往復途上のケガや宿泊中のケガなども対象になります。下記の費用は、保険料を含みます。

●参加費

	全 日 程	1 日 通 し
大 人(大学生以上)	7300円	5300円
子ども(3才~高校生)	1800円	1300円

●宿泊費(税込み)

	1 泊 3 食	2 泊 5 食
大 人(中学生以上)	6000	11500
子ども(小学生)	4200	8050
幼 児(食事を注文する場合)	2000	4000

●1日通しとは、午前・午後または、午後・翌日の午前を意味します。

宿泊せず、昼食希望の方は、500円加えて下さい。

●8/3の見学は入館料の実費を現地で集めます。およそ1館につき300円(一般)小・中・高生、団体割引あり

☆申し込み方法

●左の申込書にご記入の上、代金を現金書留か郵便振替でお送り下さい。振替の場合、局の領収書を申込書に添え、封書でお送り下さい。

●申込〆切 7月20日(当日消印有効) 変更のご連絡は7月24日までにそれ以後は、参加費、宿泊費等をお返しできません。

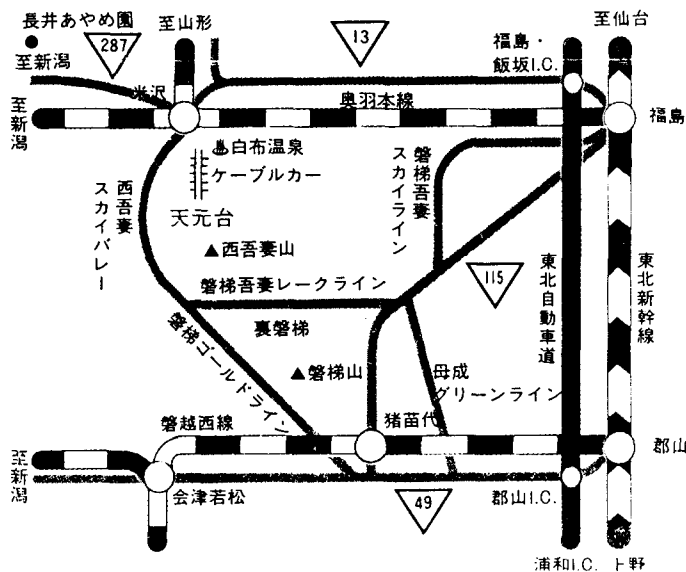
●申込先 〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14 ウィ書房フォーラム係(振替番号：東京6-59867) Tel. 03-326-1380

●会費を受け取り次第、会員証をお送りします。

交通のごあんない

上野から福島まで東北新幹線1時間30分、
福島から米沢まで奥羽本線特急40分
米沢駅前発白布温泉天元台行バス6時より
1時間毎(所要55分)
米沢駅よりタクシー40分
東北自動車道飯坂I.C.より車で90分

駐車場は有料1ヵ所、無料2ヵ所、白布温泉
には県営無料大駐車場あり
東京(八重洲口)→米沢間、東北急行バスあ
り(夜行)
仙台よりR128(笹谷トンネル)、R13で3時
間
新潟よりR7、R113、R287で3時間



列車時刻のごあんない

上野	福島	米沢
8:00 新幹線やまびこ41号	9:37 特急つばさ5号	10:30
10:40 やまびこ3号	12:07 つばさ9号	12:57

盛岡	仙台	福島
9:13 やまびこ38号	10:31 やまびこ38号	10:57
10:13 やまびこ42号	11:31 やまびこ42号	11:57

秋田	天童	山形	米沢
8:39	11:31	11:45	12:31
		つばさ10号	

新潟	新発田	坂町	米沢
7:19	7:46	8:08	9:57
		急行へはなる2号	

米沢	福島	上野
12:32 つばさ10号	13:11 やまびこ12号	13:27 やまびこ12号
14:06 つばさ12号	14:46 やまびこ12号	14:57 やまびこ12号
15:30 つばさ14号	16:10 やまびこ14号	16:34 やまびこ14号

■マイクロバスのごあんない

米沢駅発 10:40 13:00

■バス時刻のごあんない

(米沢駅前⇄白布湯元駅、運賃・片道670円)

米沢駅前発	白布湯元駅着	白布湯元駅発	米沢駅前着
(時)		(時)	
7:51	8:37	8:05	8:54
9:01	9:47	9:15	10:04
10:01	10:47	10:15	11:04
11:31	12:17	11:15	12:04
12:31	13:17	12:50	13:39
13:31	14:17	13:50	14:39
14:31	15:17	14:50	15:39
15:31	16:17	15:50	16:39
16:31	17:17	16:50	17:39
		17:25	18:14

■ロープウェイのごあんない

(運賃・片道450円、往復800円)
各時間毎 0、20、40分に発車

'87年 We 夏季フォーラムへのおさそい 「ゆたかさを紡ぐー山形のくらしからー」

東京周辺に会場を求めてきた We 夏季フォーラムは、今夏思いきって「みちのく」へ。磐梯朝日国立公園の中の天元台は、蔵王とともに山形が誇るスキーのメッカです。
上杉鷹山の、いま話題の独眼龍政宗の、歴史が馥郁と香る米沢から、白布温泉へ。鳥になってロープウェイで天かければ、そこは緑の別世界。空気のおいしさ絶品です。
3年間こだわってきた「自分らしさ」は大事に抱えながら、今年は山形のくらしに学び、真のゆたかさを紡ぎ合いたいのです。講師は山形大の佐藤慶子さん (Vol. 1の「K子さんちのね子たち」の筆者)。有機農法で名高い星寛治さん ('85年11月号「農からの発想」)。星さんは高畠町の教育委員長でもあります。地域の生活文化を、教育にどう生かし、その視点で世界をどう変えるのか? 共に語りあいましょう。
1日の夜は、文化祭のようににぎやかに地域のメニューを並べ、
2日の夜は、キャンプファイアーでいい思い出づくりを。
3日目は下界に降りて、米沢ならではの見学を。大自然の懷で、大人も子どももリフレッシュ!
北にすまう人たち、今年こそフォーラム参加の好機です。
子どもたち、今年も We はキミを待ってるヨ!
子ども係の人手の関係上、3歳にみたないお子さんについてはお連れになった方が世話されることを本体とします。
米沢から白布温泉ロープウェイ下までは、所定の時間に限り、天元台ホテルのマイクロバスが無料でご案内します。時間外にお着きの時は、バスかタクシーをご利用下さい。

- ☆と き 8月1日(土)午後2時受付2時半開会ー8月3日(月)12時閉会
午後希望者は紅花資料館研究所見学
- ☆ところ 天元台ホテル 〒992-14 山形県米沢市白布温泉天元台
☎0238(55)2231(代)
- ☆規模 子どもを含めて100人、満員になり次第締切ります
- ☆主催 ウィ書房、Weの会

5月18日現在

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。
お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由でご指定のうえ、ご注文下さい。